令和３年度
自己点検・評価「年次報告書」

長崎女子短期大学
自己点検評価室

【目次】

部　署　名	職　名	氏　名	頁
学長	学長	玉島　健二	1
栄養士コース	コース長	太田　美代	3
ビジネス・医療秘書コース	コース長	濵口　なぎさ	6
幼児教育学科	学科長	本村　弥寿子	8
学生部	部長	織田　芳人	10
図書館	館長	森　弘行	12
自己点検評価室	室長	武藤　玲路	14
入試広報室	室長	髙井　達司	16
キャリア支援センター	センター長	原田　実輝	18
ＦＤ・ＳＤ委員会	委員長	武藤　玲路	20
ＩＲ推進室	室長	森　弘行	22
教務委員会	委員長	織田　芳人	24
教職課程委員会	委員長	本村　弥寿子	26
特色化推進PT会議	会議長	玉島　健二	28
募集・広報委員会	委員長	髙井　達司	30
紀要・図書委員会	委員長	中村　浩美	32
学生委員会	委員長	船勢　肇	34
障がい学生支援委員会	委員長	織田　芳人	36
学生相談室	室長	福井　謙一郎	38
地域連携・子育て支援センター	センター長	荒木　正平	40
寮務委員会	委員長	桑原　倫子	42
事務局	局長	前田　功	44

職　名	氏　名	頁
学長	玉島　健二	46
教授	森　弘行	47
	織田　芳人	48
	福井　昭史	49
	武藤　玲路	50
	中澤　伸元	51
	松尾　公則	52
准教授	濵口　なぎさ	53
	本村　弥寿子	54
	中村　浩美	55
	太田　美代	56
	島田　幸一郎	57
講師	古賀　克彦	58
	荒木　正平	59
	福井　謙一郎	60
	江頭　万里子	61
	南條　恵	62

職　名	氏　名	頁
助教	船勢　肇	63
	桑原　倫子	64
	桑原　真美	65
	山中　慶子	66
	髙橋　秀樹	67
実習助手	守山　優美	68
	黒田　真衣	69
	内山　美保	70
事務局長	前田　功	71
入試広報室長	髙井　達司	72
キャリア支援センター長	原田　実輝	73
事務主任	宮﨑　伸一郎	74
事務（会計）	一瀬　章子	75
〃　（教務）	森口　和美	76
〃　（教務）	林田　翔太郎	77
〃　（学生）	櫻井　縁	78
〃　（入試広報・庶務）	作本　栞里	79
司書	伊藤　理恵子	80

令和３年度

「部署別報告書」

令和３年度　「学長・運営委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：玉島　健二（学長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．令和３年度の学長運営方針（４項目）の実現に向け、入試・運営委員会等での協議を推進する。入試・運営委員会が本学の特色化・魅力化の推進、教育の質の向上に資する協議の場となるよう、リーダーシップを発揮する。

２．入試・運営委員会やプロジェクト会議において、本学の課題を明らかにし、課題解決に向けた協議を定期的に行う。また、学科・コースの特色化、魅力化について、学科長・コース長との協議を通じて、実現化の道を模索する。

３．積極的な学生募集活動に取り組み、定員充足率の向上に努力する。また、きめ細かな対応による学生満足度の向上に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．学長運営方針の実現

①学長運営方針を学長室に掲示し、常に意識して業務や会議に臨むようにする。

②学長運営方針の進捗状況、達成状況を進行管理し、確認しながら業務を進める。

２．本学の課題解決・特色化の推進

①本学の課題を常に意識化し、運営委員会及び教授会において新しい提案等を行っていく。また、必要に応じ理事長等の学園関係者、教職員の報告等を行う。

②必要に応じ、学科・コース会議に出席するとともに、学科長・コース長とは定期的に協議したり、進捗状況の報告を求めたりして、実現化の可能性を探る。

３．定員充足率や学生満足度の向上

①進学ガイダンス、高校訪問等に積極的に参加し、本学の良さを直接高校生や保護者、高校教員に伝える。

②学生委員会に毎回出席し、学友自治会活動の充実のための協議に参加する。必要に応じて学友自治会役員との意見交換を行い、学生満足度の向上に努める。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」

①学長運営方針の学長室掲示は行った。運営方針の内容は常に意識して会議に臨むように心がけた。

②学長運営方針の進行管理は、他の教職員の担当分が多く、確認しながら業務を進めることは難しかった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」

①プロジェクト会議を開催し、本学の課題を挙げて協議した。学園本部に具申・進言したが、ほとんど対応してもらえなかった。

②学科・コースの課題については、必要に応じて協議し、その段階で最善と思われる案を出し合った。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

①進学ガイダンス等、可能な限り対応した。

②学生委員会には毎回出席して意見を述べた。学友自治会役員とは２回に渡り、意見交換を行った。このことが学生満足度の向上に繋がったかどうかは判断できないが、学長の姿勢は評価してもらったと思う。
幼児教育学科の学生からは遠隔授業及びWi-Fi環境の整備と１４１教室、１４２教室の椅子、記念ホールのテーブルの件で要望があった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　学長運営方針に関する教職員評価を行う。そのためには評価のための資料が必要となる。

２．　本学の課題は多岐に渡るが、主に耐震化・バリアフリー化、１人１台のパソコン保有とその前提となる施設設備の環境整備である。そのためには学園本部の理解と協力（予算化等）が必要である。

３．　定員充足率の向上のためには、頻繁な高校訪問や積極的なガイダンスが求められる。次年度も積極的に行動したい。

令和３年度 学長・運営委員会 年次報告

Plan 計画

1．令和３年度の運営方針の実現に向けた運営委員会等での協議、リーダーシップ
2．本学の課題を明確にし、解決に向けた協議の実施、学科・コース長との協議
3．積極的な学生募集活動の推進、定員充足率の向上、きめ細かな対応による学生満足度の向上

Do 実行

1．運営方針の学長室掲示と意識化した行動
運営方針の進行管理
2．運営委員会等での新たな提案、学園本部との協議
学科・コース長と定期的協議、報連相の徹底
3．進学ガイダンス等への積極的に参加
学生委員会への毎回出席、学友自治会との意見交換実施による満足度の向上

Check 検証

1．運営方針の学長室掲示は実施し、会議には方針を意識して臨んだ。　【評価：C】
運営方針の進行管理はあまりできなかった。
2．プロジェクト会議における課題の掘り起こしは行ったが、それ以上の進展はできなかった。
学科・コースの課題は必要に応じて協議し、最善と思われる案を出し合った。【評価：C】
3．進学ガイダンス・高校訪問は可能な限り対応した。島原半島からは昨年度以上の出願があった。また、大村地区は増加した。
学生委員会には毎回出席し、意見を述べた。
学生満足度の向上に繋がったかどうかは判断できない。　【評価：B】

Act 改善

1．学長運営方針に関する教職員による評価を行うことを検討したい。そのためには評価ができる資料をそろえる必要がある。

2．本学の課題解決には、学園本部の理解と協力（予算化）が必要となる。

3．定員充足率の向上のためには、頻繁な高校訪問や進学ガイダンスに出向く必要がある。次年度も可能な限り積極的に対応したい。

令和３年度　「栄養士コース」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：太田　美代（コース長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　コース職員が協働し、４項目の努力目標にチームとして取り組む。

２．「長崎食育学」、ゼミナールを核として本学栄養士コースならではの特色ある教育活動に取り組む。

３．専門職としての基礎的な力を養うため、栄養士実力認定試験の短大平均を上回る者８０％以上、及びA認定６０％以上を目指す。

４．学生の自己肯定感を高め、「選択してよかった」と思えるコース運営を行い、学生の満足度９０％(肯定的な評価の合計)を目指す。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．定期的なコース会議の開催を継続して実施し、円滑な意思の疎通、協働体制の維持に努める。

２．「卓袱料理試食会」を年間二回実施し、一回目は２年生から１年生への伝承。二回目はお客様をお迎えして１・２年生が協力しておもてなしをし、学修の成果を発表する機会とする。１年生はプレ・ゼミナールとして取り扱い、先輩から栄養士コースの伝統を引き継ぎ「長崎食育学」での学びを生かす場とする。

３．「栄養士スキルアップ特講」と並行して学力向上の強化策として学生による学習会を支援し、教育サポートスタッフの活用を図る。

４．一人一人を大切にしたきめ細かな指導を行い、学生の卒業後の夢を叶えるための後押しとしてキャリア支援の充実を図るとともに、女子中高生を対象とした料理教室などに学生の活躍の場を作り、自らの成長を実感できる機会とする。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 S・A・B・C・D 」
　ほぼ毎週コース会議を開催し、報告・連絡・相談を密にすることができた。学生指導などの課題が生じた際も相談しながら速やかに対応することができた。

２．自己評価「 S・A・B・C・D 」
　「長崎食育学」は学外講師の見直しを行い、「長崎の食文化とかまぼこ」「長崎の食文化とハトシ」「長崎の水産物の現状と課題」の３講座を新たに設け、本県の特産である水産物に関する知識を深めることができた。
　卓袱料理試食会は、新型コロナ感染者の急増に伴い、２回目の実施を中止としたが、第１回目の実施を経て２回目の実施に向けた準備は精力的に行うことができた。１年生のプレゼミナールとしての卓袱料理試食会への参加は難しかったが、弥生祭に向けてはゼミナール活動の一環として２年生と協力して取り組むことができた。コロナ禍で様々なイベントが中止となる中、思い出深い行事とすることができた。
　各研究室ゼミにおいてもそれぞれ学生の興味関心に沿ったテーマで実践的な研究活動を行い、地域貢献につながるよう努めたが、中でも、古賀ゼミの「ご当地タニタごはんコンテスト」と「うま味調味料活用　第６回郷土料理コンテスト 2021」での全国大会進出と「うま味活用賞」の受賞は快挙だった。

３．自己評価「 S・A・B・C・D 」
　栄養士実力認定試験で短大平均を上回った者は２２名中１０名で 45.5%。A認定は７名で 31.8%と目標に及ぶことはできなかった。前年度との比較ではA認定 21.8 ポイント減、B認定 16.2 ポイント増、C認定 5.5 ポイント増。平均正答率は 47.2 点で全国平均の 50.9 点に及ばなかったものの、短大平均の 47 点はかろうじて超えることができた。

昨年度からの課題として、「２年生はほとんどの学生が適正検査における基礎能力が３以下」という厳しい実態があった。「栄養士スキルアップ特講」で３回の模擬試験を行ったが、正答できなかった問題を再度試験してもなかなか成績を上げることはできなかった。栄養士実力認定試験の意義と、就職してからの実務に必要な知識を習得することの大切さを十分に認識させることができなかったため、学生が学びに向かう真摯な姿勢をもつに至らなかったのではないかと思われる。２年生の後期終業ガイダンスでは、今回の試験で明らかになった苦手分野を少しでも克服して、自信をもって卒業できるよう春期休業中に勉学にも励むよう指導した。

１年生に対しては、教育サポートスタッフ制度を活用し、ＴＡ（チィーチングアシスタント）とＰＳ（ピアサポーター）を２年生の中から２名ずつ任命し、学習支援にあたった。ＴＡは、実験の授業中に学生のサポートを行うもので、１年生は「気軽に質問することができた」とほとんどの学生が有用性を感じていた。ＴＡの２年生もやりがいを感じ、自らの成長を実感することができた。ＰＳは、学習会において１年生のサポートを行った。当初は学生の自主勉強会の支援を行う位置づけでスタートしたが、参加者が少なく、効果が見込めなかったため、後半は教員が課題を準備して、それに取り組ませることにした。参加した１年生は「わからないところがわかるようになった」「試験前にわからないところを理解するまでできた」と、学習会がためになったと感じている。ＰＳの２年生のうち１人は自分自身の学力向上と順序立てて話す力を身につけることができた点を自己評価しているが、もう１人は学力に自信がなく、ＰＳの仕事が自分自身のメリットになったかという質問に「あまりそう思わない」と回答していた。次年度は学習会参加者の増とＴＡ・ＰＳの人選が課題である。

４．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

卒業時アンケートでは、「本学に入学して学んだことをどう思うか」という質問に 86.4%の学生が肯定的な評価を行っている。「本学での学びが進路に役立つと思うか。」で 77.7%「将来に生きると思うか」で 86.4%の学生が肯定的な回答を行った。自由記述では「長崎女子短期大学で栄養士の勉強ができて良かった」「どんなに些細な悩みでも，親身に相談に乗ってくださる優しい先生方ばかりでとても心強かった」など、好意的なコメントが多く、否定的なコメントはなかった。

今年度も公開講座や女子中高生を対象とした料理教室に学生の出番を作った。

ただ、年度末になって新型コロナウイルス感染急拡大の影響で２回目の卓袱料理試食会が実施できなかったことは、２年生のモチベーションを下げる一因となっていたと思われる。

ＡＣＴ（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．次年度は職員も新メンバーでのスタートとなる。定期的なコース会議の開催は継続して実施し、円滑な意思の疎通、協働体制の維持に努める。

２．「卓袱料理試食会」を年間二回実施し、一回目は２年生から１年生への伝承。二回目はお客様をお迎えして１・２年生が協力しておもてなしをし、学修の成果を発表する機会とする。１年生はプレ・ゼミナールとして取り扱い、先輩から栄養士コースの伝統を引き継ぎ「長崎食育学」での学びを生かす場とする。

ゼミナール活動報告会を別途設ける。

３．１年生対象の学習会は、学力向上と学習習慣の定着を目的として４月から開始する（毎週火曜日 15：40～）。１年生は全員参加を原則とし、教員が課題を準備する。ＰＳの選出は栄養士コース教員からの推薦とする。学習会には教員・助手が交替で参加しサポートを行う。ＴＡに関しては現状のまま継続する。

２年生の学力向上対策として、修得度別グループを編成し、少人数指導を実施する。

４．中高生を対象とした料理教室や公開講座などに学生の活躍の場を作り、自らの成長を実感できる機会とする。

令和３年度 栄養士コース 年次報告

Plan 計画

1. コース職員が協働し、4項目の努力目標にチームとして取り組む。
2. 「長崎食育学」、ゼミナールを核として本学栄養士コースならではの特色ある教育活動に取り組む。
3. 専門職としての基礎的な力を養うため、栄養士実力認定試験の短大平均を上回る者80%以上、及びA認定60%以上を目指す。
4. 学生の自己肯定感を高め、「選択してよかった」と思えるコース運営を行い、学生の満足度90%(肯定的な評価の合計)を目指す。

Do 実行

1. 定期的なコース会議の開催を継続して実施し、円滑な意思の疎通、協働体制の維持に努める。
2. 「卓袱料理試食会」を年間二回実施し、一回目は2年生から1年生への伝承。二回目はお客様をお迎えして1・2年生が協力して実施し、学修成果の発表の場とする。
3. 「栄養士スキルアップ特講」と並行して学力向上の強化策として学生による学習会を支援し、教育サポートスタッフの活用を図る。
4. 一人一人を大切にしたきめ細かな指導を行い、学生の卒業後の夢を叶えるための後押しとしてキャリア支援の充実を図るとともに、女子中高生を対象とした料理教室などに学生の活躍の場を作り、自らの成長を実感できる機会とする。

Check 検証

1. 毎週コース会議をもち、意思の疎通を図って課題解決に当たることができた。
2. 卓袱料理試食愛は、新型コロナ感染者の急増に伴い2回目の実施ができなかったが、1回目は2年生が高い意識をもって実施することができた。
3. 栄養士実力認定試験で短大平均を上回る者45.5%、A認定31.8%と目標に及ぶことはできなかったが、平均点47.2点は短大平均点47点をわずかに上回った。
   教育サポートスタッフの運用は、課題はあるものの制度の構築をすることができた。
4. 卒業時アンケートでは、「本学に入学して学んだことをどう思うか」という質問に86.4%(22名中19名)の学生が肯定的な評価を行っている。自由記述では好意的なコメントが多く、否定的なコメントはなかった。

Act 改善

1. 次年度は職員も新メンバーとなるので、定期的なコース会議は継続し、円滑な意思の疎通、協働体制の維持に努める。
2. 「卓袱料理試食会」を年間二回実施し、一回目は2年生から1年生への伝承。二回目はお客様をお迎えして1・2年生が協力しておもてなしをし、学修の成果を発表する機会とする。ゼミナール活動報告会を別途設ける。
3. 1年生対象の学習会は、学力向上と学習習慣定着を目的として全員参加を原則として実施する。2年生の学力向上対策として、修得度別グループを編成し、少人数指導を行う。
4. 中高生対象の料理教室や公開講座などに学生の活躍の場を作り、自らの成長を実感できる機会とする。

令和３年度　「ビジネス・医療秘書コース」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：濵口　なぎさ（コース長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．令和４年度の「実践型教育プログラム」の実現に向け、具体的な内容・評価方法等について検討を進める。

２．学生の卒業時の満足度を向上させるために、特に①資格・検定取得の支援、②就職活動の支援、の２つの充実を図る。

３．プレゼミナール・ゼミナールは、コロナ禍に対応した形で「コミュニティ・サービス・ラーニング」に取り組み、成果を出す。

４．課題を抱えた学生に対し、コース全体で情報共有を密にして早期の問題発見を心がけ、きめ細やかに対応して卒業まで支援する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．インターンシップ受け入れ可能な企業を調査し、インターンシップ、アルバイト等実践型教育の内容別に具体的な評価の方法（ルーブリック等）を検討する。

２．秘書検定については、時間割上の対策講座への積極的な参加を学生に促す。日商 PC 検定については、２か月に１回程度の頻度で対策講座と随時試験を実施し、学生の受験機会を増やす。随時掲示板やメールを活用した就職情報の提供を行い、毎週のゼミナールで学生の就職活動状況を把握し支援する。

３．プレゼミナール・ゼミナールは可能な限り学外の方々との交流する機会を設け、地域社会にとって有用な成果へ導くよう指導する。

４．各教員が日々の授業などを通して学生の動向に注意を払い、小さなことでも気になることがあれば、隔週開催のコース会議等やメールにて情報共有を密にし、迅速な対応を心がける。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
コロナ禍により、夏休み・春休みのインターンシップは大部分が中止となる一方で、ゼミナールで取材した企業や中小企業家同友会など複数の企業から、今後の受け入れは可能との回答を得た。実践型教育プログラムについて、具体的な評価方法の確定には至らなかった。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
①秘書検定：20L の２級以上取得率は昨年度より 10%以上減、21L は現時点で昨年度の卒業時と同程度。日商 PC 検定：20L の３級取得率は昨年度より 10%以上増。昨年度は０の２級合格者が３名。②20L の内定率は 86.4%（2 月末）、例年と大差なし。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
今年度後期は１・２年のゼミナールが同時進行となり、指導が行き届かない点があった。制限がある中でも学外の方々と交流することができ、一定の成果は得られた。

４．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
休学・退学者を１人も出すことなく、今年度を終えられたが、卒業式までに全員就職内定には至らなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．次年度の早い段階で、インターンシップ受け入れ可能な企業のリストを作成する。実践型教育プログラムの評価の方法を確定する。

２．２年後期の実践型教育プログラムを活用し、検定上位級や登録販売者の合格者を増やし、就職活動支援も充実させる。

３．　プレゼミナール、ゼミナール、ライフプランニング、事務管理（ビジネスプランニング）等において、外部の力を活用しより実践的な教育活動の充実を目指す。

４．課題を抱えた学生への対応は従来通りきめ細かく行い、卒業まで支援する。就職活動については、外部機関のカウンセラー等との連携を図る。

令和3年度 ビジネス・医療秘書コース 年次報告

Plan 計画

1. 令和4年度の「実践型教育プログラム」の実現に向け、具体的な内容・評価方法等について検討を進める。
2. 学生の卒業時の満足度を向上させるために、特に①資格・検定取得の支援、②就職活動の支援、の充実を図る。
3. プレゼミナール・ゼミナールは、コロナ禍に対応した形で「コミュニティ・サービス・ラーニング」に取り組み、成果を出す。
4. 課題を抱えた学生に対し、コース全体で情報共有を密にして早期の問題発見を心がけ、きめ細やかに対応して卒業まで支援する。

Do 実行

1. インターンシップ受け入れ可能な企業を調査し、インターンシップ、アルバイト等実践型教育の内容別に具体的な評価の方法（ルーブリック等）を検討する。
2. ①秘書検定：時間割上の対策講座への積極的な参加を学生に促す。日商PC検定：2か月に1回程度の頻度で対策講座と随時試験を実施し、学生の受験機会を増やす。②随時掲示板やメールを活用した就職情報の提供を行い、毎週のゼミナールで学生の就職活動状況を把握し支援する。
3. プレゼミナール・ゼミナールは可能な限り学外の方々との交流する機会を設け、地域社会にとって有用な成果へ導くよう指導する。
4. 各教員が日々の授業などを通して学生の動向に注意を払い、小さなことでも気になることがあれば、隔週開催のコース会議等やメールにて情報共有を密にし、迅速な対応を心がける。

Check 検証

1. コロナ禍により、夏休み・春休みのインターンシップは大部分が中止となる一方で、ゼミナールで取材した企業や中小企業家同友会など複数の企業から、今後の受け入れは可能との回答を得た。
2. ①秘書検定：20Lの2級以上取得率は昨年度より10%以上減、21Lは現時点で昨年度の卒業時と同程度。日商PC検定：20Lの3級取得率は昨年度より10%以上増。昨年度は0の2級合格者が3名。
②20Lの内定率は86.4%（2月末）、例年と大差なし。
3. 今年度後期は1・2年のゼミナールが同時進行となり、指導が行き届かない点があった。制限がある中でも学外の方々と交流することができ、一定の成果は得られた。
4. 休学・退学者を1人も出すことなく、今年度を終えられたが、就職活動には苦戦が続いてる。

Act 改善

1. 次年度の早い段階で、インターンシップ受け入れ可能な企業のリストを作成し、評価の方法を確定する。
2. 2年後期の実践型教育プログラムを活用し、検定上位級や登録販売者の合格者を増やし、就職活動支援も充実させる。
3. プレゼミナール、ゼミナール、ライフプランニング、事務管理（ビジネスプランニング）等において、外部の力を活用しより実践的な教育活動の充実を目指す。
4. 課題を抱えた学生への対応は従来通りきめ細かく行い、卒業まで支援する。就職活動については、外部機関のカウンセラー等との連携を図る。

令和３年度　「幼児教育学科」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：本村　弥寿子（学科長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　心身面、経済面及び学習面で配慮や支援が必要な学生に対し、学科全体で丁寧に対応する。
２．　高大及び幼大連携の充実を図る。
３．本学幼児教育学科の特色として、ピアノ初心者に対する授業の充実を図る 。
４．長期履修制度の実施について検討を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．チューターや学生相談室及び関係者で密に連絡を取ることで学生理解を図り、重層的なサポートを図る。
２．長崎女子校生に対する体験授業や附属幼稚園の“わくわくクラブ”等で、それぞれの要望を受け止めながら短大教員の専門分野での協力を図り、系列校・附属園の強みを打ち出す。
３．初心者向けの授業枠を設け、専任教員２名で、希望者に対し実施する。
４．長期履修が可能となるよう、カリキュラムのスリム化を図りながら、長期履修制度及びプラス・ワン・イヤー・サポートの内容を検討し、実施の体制を固めていく。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　チューター面談や学生相談室での面談等から特に進路や家庭の悩みを学生自身が自覚していた６名に対しては面談を重ね、教職員及び関係機関とも連携を取り、本人の意思を尊重した修学サポートや休退学の対応を取った。その他、学習意欲の低下した学生や学力不足の学生が年間 10 名見受けられたため学科会議にかけて教員間での共有を図り、チューターや科目担当教員から学生に働きかけ、指導・支援を継続している。コロナ禍の毎日登学しない状況でいかに学生を理解し学習意欲を保持させるかが課題である。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
　長崎女子校生に対し３度の体験授業を行った。オープンキャンパスや系列外高校ガイダンスでは実践系講義を主としているため、理論系の体験授業を試みた。これに対し“知る楽しさ”を感じられただろうと高校教員より伝えられた。附属幼稚園との連携では、幼稚園の子育て支援活動“わくわくクラブ”で１講座、本学公開講座として２講座実施した。それぞれの講座に８組から 20 組の附属幼稚園関係親子が参加した。高校・幼稚園共に気軽な意見交換の場を作り、密な連携を図ることが望まれる。

３．自己評価「 $\boxed{\text{S}}$・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　前期27名、後期28名の受講希望の申し込みがあった。少人数で丁寧な指導が行われ、上達が早かった。練習の仕方が分かったため一人で練習できるようになり、授業後半は受講せずとも大丈夫であると言う学生が増えた。

４．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　長期履修制度が令和４年度から導入されることとなり、学則の変更と規定の制定がなされた。教職課程カリキュラムの見直しに伴い時間割のスリム化が図られたため、長期履修制度希望者に応じたカリキュラムが組まれるよう、教職員連携しての具体的な検討が課題となる。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　コロナ禍での学生理解と授業実践及び長期履修制度等希望者のカリキュラム作成について、教職員間の連携を密にし、充実を図る。

２．　系列高校及び附属幼稚園との連携を図り、充実した取り組みを共に検討する。

３．　ピアノ初心者へのサポート授業の継続及び実践系授業の充実を図り、学生の実践力を高める。

令和３年度 幼児教育学科 年次報告

Plan 計画

1．心身面、経済面及び学習面で配慮や支援が必要な学生に対し、学科全体で丁寧に対応する。

2．高大及び幼大連携の充実を図る。

3．本学幼児教育学科の特色として、ピアノ初心者に対する授業の充実を図る。

4．長期履修制度の実施について検討を図る。

Do 実行

1．チューターや学生相談室及び関係者で密に連絡を取ることで学生理解を図り、重層的なサポートを図る。

2．長崎女子校生に対する体験授業や附属幼稚園の“わくわくクラブ”等で、それぞれの要望を受け止めながら短大教員の専門分野での協力を図り、系列校・附属園の強みを打ち出す。

3．初心者向けの授業枠を設け、専任教員2名で希望者に対し実施する。

4．長期履修が可能となるようカリキュラムのスリム化を図りながら長期履修制度及びプラス・ワン・イヤー・サポートの内容を検討し、実施体制を固める。

Check 検証

1．6名の学生に対し面談を重ね、本人の意思を尊重した学修サポートや休退学の対応を取った。学習意欲低下や学力不足の約10名の学生に対し指導・支援の継続が必要。

2．長崎女子校生に理論系の体験授業を3度、附属幼稚園に向けて公開講座2講座とわくわくクラブ1講座を実施した。意見交換を図り内容を一層充実させることが必要。

3．前期27名、後期28名の受講希望があった。少人数の丁寧な指導で上達が早かった。学生が練習のやり方を理解できた。

4．長期履修制度に関する学則の変更と規定の制定がなされた。希望者に応じた具体的なカリキュラム作成が今後の課題。

Act 改善

1．コロナ禍での学生理解と授業実践及び長期履修制度希望者のカリキュラム作成について、教職員間の連携を密にし、充実を図る。

2．系列高校及び附属幼稚園との連携を図り充実した取り組みを共に検討する。

3．ピアノ初心者へのサポート授業の継続及び実践系授業の充実を図り、学生の実践力を高める。

令和３年度　「学生部」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：織田　芳人（学生部長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．学生委員会と連携しながら、可能な範囲で、円滑な運営に協力する。

２．寮務委員長と緊密に連携しながら、寮務の円滑な運営に協力する。

３．教務委員長として、教務委員会の円滑な運営に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．学生委員会に出席し、可能な範囲で意見を述べ、円滑な運営に協力した。

２．日々の寮務日誌をチェックし、また、寮務委員会に出席して、寮生に関する情報を得た。必要に応じて、寮務委員長・寮務委員と緊密に連携しながら、寮務の円滑な運営に協力した。

３．教務委員長として、教務委員会の円滑な運営に努めた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
新型コロナウイルス感染拡大と縮小の繰り返しが続き、学生委員会の時間の大半がスポーツフェスタと弥生祭という二大行事に関連した議題に費やすことになったが、昨年度の経験から概ね円滑な運営に協力できた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
短大の寮生に関しては特に大きな問題もなかった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
教務委員長として、長期履修制度の制定及び手続書類等の整備、再試験の成績評価における最高評点の見直し、授業時間に対する単位算定基準の整備等を行い、教務委員会の円滑な運営に努めた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学生支援委員会から緊密に情報を共有し、区切りとなる時期の委員会に出席し、可能な範囲の限りで意見を述べることとして、円滑な運営に協力する。

２．　寮務委員会と情報共有をしながら、円滑な運営に協力する。

３．教務委員会と緊密に連携しながら、円滑な運営に努める。

令和３年度 学生部 年次報告

Plan 計画

１．学生委員会と連携しながら、可能な範囲で、円滑な運営に協力する。

２．寮務委員長と緊密に連携しながら、寮務の円滑な運営に協力する。

３．教務委員長として、教務委員会の円滑な運営に努める。

Do 実行

１．学生委員会に出席し、可能な範囲で意見を述べ、円滑な運営に協力した。

２．日々の寮務日誌をチェックし、また、寮務委員会に出席して、寮生に関する情報を得た。必要に応じて、寮務委員長・寮務委員と緊密に連携しながら、寮務の円滑な運営に協力した。

３．教務委員長として、教務委員会の円滑な運営に努めた。

Act 改善

１．学生支援委員会から緊密に情報を共有し、区切りとなる時期の委員会に出席し、可能な範囲の限りで意見を述べることとして、円滑な運営に協力する。

２．寮務委員会と情報共有をしながら、円滑な運営に協力する。

３．教務委員会と緊密に連携しながら、円滑な運営に努める。

Check 検証

１．新型コロナウイルス感染拡大と縮小の繰り返しが続き、学生委員会の時間の大半がスポーツフェスタと弥生祭という二大行事に関連した議題に費やすことになったが、昨年度の経験から概ね円滑な運営に協力できた。

２．短大の寮生に関しては特に大きな問題もなかった。

３．教務委員長として、長期履修制度の制定及び手続書類等の整備、再試験の成績評価における最高評点の見直し、授業時間に対する単位算定基準の整備等を行い、教務委員会の円滑な運営に努めた。

令和３年度　「図書館」年次報告書
区分：　学科専攻 ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）
氏名：森　弘行（図書館長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1.　学術機関リポジトリの整備 2.　新型コロナウイルス感染症への対策を行いつつ、図書館利用の活性化を図る 3.　書庫狭隘化対策
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
1.　JAIRO Cloud の導入を進めるとともに、試行的に紀要の登録を行い、問題点等を確認する。 2.　換気や除菌など新型コロナウイルス感染症への対策を徹底する マスコットキャラクター、ライブラリーラバーズ、図書館ブログ等の活用 3.　未活用洋書などの除籍
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1.　自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」 オープンアクセスリポジトリ推進協会に加入したが、JAIRO Cloud の利用申請がシステム移行の遅れにより新規利用申請業務が停止しており、研修参加のみ。 2.　自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 新型コロナウイルス感染症への対策は特に問題なく実施できているが、来館者数は大幅減。 図書館ブログは毎月更新。11/1～15 に長崎県大学図書館協議会のライブラリーラバーズキャンペーンに参加。マスコットキャラクターの活用は一部にとどまっている。 3.　自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 寄贈の洋書 300 冊、検定、就職対策関連消耗図書 86 冊を除籍。洋書の 39 冊は県立図書館へ寄贈。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1.　JAIRO Cloud による WEKO3 の導入を進め、機関リポジトリの構築を試行する。 2.　新入生の初年次セミナーやイベントを活用し、新入生の図書館利用を図る。 3.　書庫狭隘化対策として、検定、就職対策等の消耗図書について除籍を進めるとともに、電子書籍を導入する。

令和３年度 図書館 年次報告

Plan 計画

1. 学術機関リポジトリの整備
2. 新型コロナウイルス感染症への対策を行いつつ、図書館利用の活性化を図る
3. 書庫狭隘化対策

Do 実行

1. JAIRO Cloudの導入を進めるとともに、試行的に紀要の登録を行い、問題点等を確認する
2. 換気や除菌など新型コロナウイルス感染症への対策を徹底する
3. マスコットキャラクター、ライブラリーラバーズ、図書館ブログ等の活用
未活用洋書などの除籍

Check 検証

1. オープンアクセスリポジトリ推進協会に加入したが、JAIRO Cloudの利用申請がシステム移行の遅れにより新規利用申請業務が停止しており、研修参加のみ。
2. 新型コロナウイルス感染症への対策は特に問題なく実施できているが、来館者数は大幅減。図書館ブログは毎月更新。11/1～15に長崎県大学図書館協議会のライブラリーラバーズキャンペーンに参加。マスコットキャラクターの活用は一部にとどまっている。
3. 寄贈の洋書300冊、検定、就職対策関連消耗図書86冊を除籍。洋書の39冊は県立図書館へ寄贈。

Act 改善

1. JAIRO Cloud によるWEKO3の導入を進め、機関リポジトリの構築を試行する。
2. 新入生の初年次セミナーやイベントを活用し、新入生の図書館利用を図る。
3. 書庫狭隘化対策として、検定、就職対策等の消耗図書について除籍を進めるとともに、電子書籍を導入する。

令和３年度　「自己点検評価室」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：武藤　玲路（室長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．学外の FD と IR 研修会に積極的に参加し、ＩＲデータの活用法に関する情報を収集して、学修成果のアセスメントプラン（評価計画）の案を作成する。

２．本学の自己点検・評価の一環として、教育研究活動に関する外部評価委員会を開催して、評価を受ける。

３．今年度の本学全体の部署別・個人別の総括資料として、「自己点検・評価　年次報告書」を作成する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．学外の 10 カ所の FD と IR 研修会に参加し、学修成果のアセスメントプラン（評価計画）の分類一覧と評価項目、ルーブリック、配分比率・到達度、ディプロマサプリメント、ポートフォリオの素案を作成した。

２．本学の教育研究活動について、５名の外部評価委員を招いた委員会を開催し、成果と課題の評価を受けた。

３．今年度の本学の部署別・個人別の総括資料として、「年次報告書」を作成し、学内の全教職員に配付した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
アセスメントプランの先進事例に関するセミナーに多数参加して、アセスメントプランの全体的な構想と具体的な作業内容について素案を作成することができた。しかし、学修成果のコアとなる評価項目と評価基準（ルーブリック）を提案するところまでには至らなかった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
産学官を代表する５名の外部評価委員の方々を招いて、主に募集活動・教育支援・就職支援について、今年度の成果の賞賛と課題の改善に関する多くの貴重な意見をいただいた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
全部署と全教職員の「年次報告書」を年度内に作成し、次年度の４月上旬に全教職員に配付する準備ができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．令和４年度もアセスメントプランや教学マネジメントに関するセミナーに参加し、先進事例を取り入れたい。また、令和４年９月迄に評価項目とルーブリックを作成し、令和５年３月までに学務システムに導入したい。

２．今後は、外部評価委員会の議題や資料について、改革総合支援事業の要件を満たす内容を検討したい。

３．今後も引き継き全教職員による「自己点検・評価　年次報告書」を作成し、内部質保証の参考にしたい。

令和３年度 自己点検評価室 年次報告

Plan 計画

１．学外のFDとIR研修会に積極的に参加し、ＩＲデータの活用法に関する情報を収集して、学修成果のアセスメントプラン（評価計画）の案を作成する。

２．本学の自己点検・評価の一環として、教育研究活動に関する外部評価委員会を開催して、評価を受ける。

３．今年度の本学全体の部署別・個人別の総括資料として、「自己点検・評価　年次報告書」を作成する。

Do 実行

１．学外の10カ所のFDとIR研修会に参加し、学修成果のアセスメントプラン（評価計画）の分類一覧と評価項目、ルーブリック、配分比率・到達度、ディプロマサプリメント、ポートフォリオの素案を作成した。

２．本学の教育研究活動について、５名の外部評価委員を招いた委員会を開催し、成果と課題の評価を受けた。

３．今年度の本学の部署別・個人別の総括資料として、「年次報告書」を作成し、学内の全教職員に配付した。

Check 検証

１．アセスメントプランの先進事例に関するセミナーに多数参加して、アセスメントプランの全体的な構想と具体的な作業内容について素案を作成することができた。しかし、学修成果のコアとなる評価項目と評価基準（ルーブリック）を提案するところまでには至らなかった。

２．産学官を代表する５名の外部評価委員の方々を招いて、主に募集活動・教育支援・就職支援について、今年度の成果の賞賛と課題の改善に関する多くの貴重な意見をいただいた。

３．全部署と全教職員の「年次報告書」を年度内に作成し、次年度の４月上旬に全教職員に配付する準備ができた。

Act 改善

１．令和４年度もアセスメントプランや教学マネジメントに関するセミナーに参加し、先進事例を取り入れたい。また、令和４年9月迄に評価項目とルーブリックを作成し、令和５年３月までに学務システムに導入したい。

２．今後は、外部評価委員会の議題や資料について、改革総合支援事業の要件を満たす内容を検討したい。

３．今後も引き継き全教職員による「自己点検・評価　年次報告書」を作成し、内部質保証の参考にしたい。

令和３年度　「入試広報室・入試委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：髙井　達司（室長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．初年度を迎える「大学入学共通テスト利用選抜」における志願実績の確保（20 名目標）及び歩留り 3 割を目標とする。
２．早期入試における志願者の囲い込みを第一義に捉え、前年同時期における志願者数の上積みを達成する。
３．進学説明会への積極参加を継続するとともに、対面接触した生徒の歩留まり（志願率）を向上させる。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．幼児教育学科、栄養士コースを中心に、本選抜に対する相応の志願実績を目指す。県内高校は元より、広く九州管内への募集告知を効果的に実施する。このための小島奨学金制度の有効活用を期す。
２．今後 4 年間は本県 18 歳人口が漸減していく中で、短大・専門学校と同様に、四年制大学においても早期入試における志願者囲い込みに各大学が追随していくことが想像される。6、7 月に集中する進学説明会や関係高校連絡会のほか、今夏のオープンキャンパスにおける生徒の反応が大きく左右する。これらイベントにおける対面接触者数の向上に傾注する。
３．本学の募集広報活動上、本説明会の影響は想像を越え大きい。対面接触した 3 年生徒の志願率は比較的高いので、これまで以上に信頼関係を深めるよう努めた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
予想はしていたが、志願者数は遠く及ばず 5 名に終わった。県内各高等学校に対し文書による共通テストへの呼びかけを行ったが、コロナ禍に伴い充分な高校訪問が出来なかったことは誤算であった。
然しながらこれまで出会うことのなかった志願者層や県外より 3 名の出願を見たことは、今後に繋がる大きな収穫であった。また入学手続き者 2 名は歩留 4 割であり、この目標は達成した。
２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
進学説明会への参加は可能な限り参加した。特に県央地区の高等学校で実施された本イベントには、県内何れの大学よりも数多く参加した。中には複数回に亘り面談した生徒も数多く、オープンキャンパス参加へと導くことが可能とされた。当地区における早期囲い込みを実現したものと評価する。
３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
正確な志願率は不明であるが、学校推薦型選抜志願者の内、進学説明会で面談したことのある受験生は栄養士 13/22 名（59.1%）、ビジネス 16/21 名（76.1%）、幼児教育 60/85 名（70.6%）であった。オープンキャンパスと並ぶ重要な募集活動となっていることが分かる。一回の面談に終わらず「また話を聞きたい」と思わせるような話しを進めたことで、複数回に亘る面談者が半数以上となった。中には 5 回以上の面談者も散見するなど一応の成果を達成した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．本選抜の利用者は、一定の基礎学力を有していることから一人でも多くの入学者確保に期待したい。今般 2 名が入学手続きに繋がったが、次年度の歩留まり向上に向け、一歩踏み込んだ施策が求められる。例えば共通テスト利用選抜合格者に対する奨学金制度の紐づけ等を検討したい。
次年度も継続して、志願者数の確保（20 名目標）及び歩留り 3 割を目標とする。
２．県内の人口流出減少に歯止めはかからず、県外地区からの学生募集に向け、改めて沖縄県に集中した資金投入を検討したい。特に共通テストの実施により志願エリアが大きく拡大されたことから、九州管内の募集活動にも最低限の対応を実施したい。
３．早期入試出願傾向は短大志願者を越え、四年制大学にまで拡大された。1～2 年次の早期面談者との出会いを、如何にして出願に導くかを継続して検討したい。

令和３年度 入試広報室・入試委員会 年次報告

Plan 計画

1．初年度を迎える「大学入学共通テスト利用選抜」における志願実績の確保（20名目標）及び歩留り3割を目標とする。
2．早期入試における志願者の囲い込みを第一義に捉え、前年同時期における志願者数の上積みを達成する。
3．進学説明会への積極参加を継続するとともに、対面接触した生徒の歩留まり（志願率）を向上させる。

Do 実行

1．幼児教育学科を中心に、本選抜に対する相応の志願実績を目指す。県内高校は元より、広く九州管内への募集告知を効果的に実施する。このための小島奨学金制度の有効活用を期す。
2．今後4年間は本県18歳人口が漸減していく中で、短大・専門学校と同様に、四年制大学においても早期入試における志願者囲い込みに各大学が追随していくことが想像される。6、7月に集中する進学説明会や関係高校連絡会のほか、今夏のオープンキャンパスにおける生徒の反応が大きく左右する。これらイベントにおける対面接触者数の向上に傾注する。
3．本学の募集広報活動上、本説明会の影響は想像を越え大きい。対面接触した3年生徒の志願率は比較的高いので、これまで以上に信頼関係を深めるよう努めた。

Check 検証

1．予想はしていたが、志願者数は遠く及ばず5名に終わった。県内各高等学校に対し文書による共通テストへの呼びかけを行ったが、コロナ禍に伴い充分な高校訪問が出来なかったことは誤算であった。然しながらこれまで出会うことのなかった志願者層や県外より3名の出願を見たことは、今後に繋がる大きな収穫であった。また入学手続き者2名は歩留4割であり、この目標は達成した。
2．進学説明会への参加は可能な限り参加した。特に県央地区の高等学校で実施された本イベントには、県内何れの大学よりも数多く参加した。中には複数回に亘り面談した生徒も数多く、オープンキャンパス参加へと導くことが可能とされた。所謂早期囲い込みを実現したものと評価する。
3．正確な志願率は不明であるが、学校推薦型選抜志願者の内、進学説明会で面談したことのある受験生は栄養士13/22名（59.1%）、ビジネス16/21名（76.1%）、幼児教育60/85名（70.6%）であった。オープンキャンパスと並ぶ重要な募集活動となっていることが分かる。一回の面談に終わらず「また話を聞きたい」と思わせるような話しを進めたことで、複数回に亘る面談者が半数以上となった。中には5回以上の面談者も散見するなど一応の成果を達成した。

Act 改善

1．本選抜の利用者は、一定の基礎学力を有していることから一人でも多くの入学者確保に期待したい。今般2名が入学手続きに繋がったが、次年度の歩留まり向上に向け、一歩踏み込んだ施策が求められる。共通テスト利用選抜合格者に対する奨学金制度の紐づけを検討したい。次年度も継続して、志願者数の確保（20名目標）及び歩留り3割を目標とする。
2．県内の人口流出減少に歯止めはかからず、県外地区からの学生募集に向け、改めて沖縄県に集中した資金投入を検討したい。特に共通テストの実施により志願エリアが大きく拡大されたことから、九州管内の募集活動にも最低限の対応を実施したい。
3．早期入試出願傾向は短大志願者を越え、四年制大学にまで拡大された。1～2年次の早期面談者との出会いを、如何にして出願に導くかを継続して検討したい。

令和３年度　「キャリア支援センター」年次報告書

区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）

氏名：原田　実輝（センター長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．就職率100%を目指して就職支援を行う。

２．リモート面接の増加を想定し、学生が安心して受験できるよう支援する。

３．各学科・コース担当と情報共有を密に行い、学生一人一人に寄り添った丁寧な指導を行い、学生の満足度の向上に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．特にビジネス・医療秘書コースの学生が早めに活動して内定を得られるよう、また専門就職以外を希望する学生が計画的に活動できるよう支援する。

２．現在行っている入試広報室以外にもリモート面接ができるような体制を整えると共に、学生が慌てないよう、事前に対策指導を行い支援する。

３．学生の状況を正確に把握し、効果的なタイミングで適切な支援が行えるよう、各学科・コース担当やその他学生に関わる教職員との情報共有に努める。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
3月1日現在の全体の内定率は96.9%である。昨年度と比べ出足が鈍かったが、12月頃から追い上げ前年比を上回るようになり、現時点では前年比を2.8ポイント上回っている。引き続き未内定者4名の支援を行っていく。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
L の学生を対象にヤングハローワークによるリモート面接対策講座を実施したが自分の事として捉えるまでには至っておらず、いざ面接を受ける時になると準備不足で失敗するケースも見受けられた。教務課の協力のもと、同時に二か所で対応できるように機器や部屋の予約もシステム化され、後半は円滑に行えるようになった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
時間割のスリム化やコロナ禍によるリモート授業の増加により学生の空き時間が減り、キャリアセンターを訪れる頻度が激減した。その為学生の状況把握が難しくなり、特にセンター利用のない学生の様子は全くわからなかった。就活時期が短期集中となった為常に余裕がない状況で、各学科・コースのからの情報もなかなか得られなかった。
　卒業時調査による就職支援による学生の満足度は、全学平均は4.0ポイントで昨年度比0.3ポイント減であった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．次年度も引き続き就職率100%を目指す。
　ガイダンスを通じて早めに活動するよう働きかけていく。

２．L以外のコースからのリモート面接のニーズが増えてくる可能性があり、その支援対策を検討する。

３．学生の状況に合ったアドバイスでないと学生には響かないので、ある程度事前に情報を収集しておかなければ適切な支援は行えない。その為にも各学科・コースとの連絡、情報共有法を密に行う。

令和３年度 キャリア支援 年次報告

Plan　計画

1.就職率100％を目指して支援を行う。

2.リモート面接の増加を想定し、学生が安心して受験できるよう支援する。

3. 学生一人一人に寄り添った丁寧な指導を行い、学生の満足度の向上に努める。

Do　実行

1.特にビジネス・医療秘書コースの学生が早めに活動して内定を得られるよう、また専門就職以外を希望する学生が計画的に活動できるよう支援する。
2.入試広報室以外にもリモート面接ができる体制を整え、学生が慌てないよう事前に対策支援を行う。
3.学生の状況を正確に把握し、効果的なタイミングで適切な支援が行えるよう、関係教職員間の情報共有に努める。

Check　検証

1.3月1日現在の全体の就職率は**96.9%**と、**前年比2.8ポイント増**である。引き続き**未内定者5名**の支援を行う。
2.①ヤングハローワークによるリモート面接対策講座をLの学生対象に実施　。②教務課の協力のもと、2部屋で面接対応可能となり、予約システムを構築した。
3.キャリア支援体制の見直しを図る余裕もないまま、就職活動が時期が一気に集中し、目先の支援にこなしていく形となった。
卒業時調査による、**就職支援に関する満足度全体平均は4.0で、昨年比0.3ポイント減**であった。

Act　改善

1.次年度も引き続き就職率100％を目指す。ガイダンスを通じて早めに行動するように働きかけていく。
2.S・Yもリモート面接の需要が増えていく可能性があるので、対策支援を行う。
3.キャリア支援体制の見直しを図る。
4.就職先調査を行う。

令和３年度　「ＦＤ・ＳＤ委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：武藤　玲路（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．夏季の FD 研修会で「アクティブラーニングの実践」をテーマとした研修会を実施する。

２．夏季の SD 研修会で「データサイエンスの学習と活用」をテーマとした研修会を実施する。

３．春季の FD 研修会で「授業評価アンケートおよび卒業時調査に基づく教育の充実と公表」をテーマとした研修会を実施する。

４．春季の SD 研修会で「部署別年次報告会による情報共有と相互支援の充実 ～データに基づく成果（特色・強み・魅力）と課題（弱み・改善計画）～」をテーマとした研修会を実施する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．夏季の FD 研修会で、ビデオ撮影を取り入れた「アクティブラーニング」の授業計画と教授法を学んだ。

２．夏季の SD 研修会で、過去数年間の学修成果のデータを用いた「データサイエンス」の活用法を学んだ。

３．春季の FD 研修会で、「授業評価アンケート」と「卒業時調査」を用いて、授業改善について討議した。

４．春季の SD 研修会で、学科・コース、キャリア支援センター、自己点検評価室および IR 推進室による「部署別年次報告会」を実施し、教職員による学生支援のための情報共有と相互支援の参考にした。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 S・A・B・C・D 」
幼児教育学科の福井講師による保育科目のアクティブラーニングを聴講し、学生への問題提起と課題設定、グループワークの討議と発表、ビデオ撮影のフィードバックなど、目的と方法の整合性が明確で参考になった。

２．自己評価「 S・A・B・C・D 」
過去数年間の学修成果をまとめたデータによるデータサイエンスの活用法を学んだ。長期的なデータ分析の事例としては参考になったが、学修成果の向上に繋がる分析が少なく、専門的な統計用語の理解が困難であった。

３．自己評価「 S・A・B・C・D 」
授業評価アンケートと卒業時調査を用いた初めてのグループ討議で、学生支援の向上・充実に参考になった。

４．自己評価「 S・A・B・C・D 」
主要な部署の成果と課題と改善点を把握でき、他の部署や教職員個人の改善計画や行動計画の参考になった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．今後もアクティブラーニングについて、学科・コースのローテーションで継続的に研修会を実施したい。

２．データサイエンスを学修成果の可視化と公表、学生の学習意欲の向上、学習支援の改善策に活用したい。

３．今後も多様な IR データを用いて、学修支援・生活支援・就職支援に繋がるディスカッションを行いたい。

４．各部署の年次報告の後に、本学の特色ある教育や校風、事業、イベントなどについて、討論していきたい。

５．多くの教職員が外部の FD・SD の研修会やセミナーに積極的に参加して、最新の情報を共有していきたい。

令和３年度 ＦＤ・ＳＤ委員会 年次報告

Plan 計画

1．夏季のFD研修会で「アクティブラーニングの実践」をテーマとした研修会を実施する。
2．夏季のSD研修会で「データサイエンスの学習と活用」をテーマとした研修会を実施する。
3．春季のFD研修会で「授業評価アンケートおよび卒業時調査に基づく教育の充実と公表」をテーマとした研修会を実施する。
4．春季のSD研修会で「部署別年次報告会による情報共有と相互支援の充実 ～データに基づく成果（特色・強み・魅力）と課題（弱み・改善計画）～」をテーマとした研修会を実施する。

Do 実行

1．夏季のFD研修会で、ビデオ撮影を取り入れた「アクティブラーニング」の授業計画と教授法を学んだ。
2．夏季のSD研修会で、過去数年間の学修成果のデータを用いた「データサイエンス」の活用法を学んだ。
3．春季のFD研修会で、「授業評価アンケート」と「卒業時調査」を用いて、授業改善について討議した。
4．春季のSD研修会で、学科・コース、キャリア支援センター、自己点検評価室およびIR推進室による「部署別年次報告会」を実施し、教職員による学生支援のための情報共有と相互支援の参考にした。

Check 検証

1．幼児教育学科の福井講師による保育科目のアクティブラーニングを聴講し、学生への問題提起と課題設定、グループワークの討議と発表、ビデオ撮影のフィードバックなど、目的と方法の整合性が明確で参考になった。

2．過去数年間の学修成果をまとめたデータによるデータサイエンスの活用法を学んだ。長期的なデータ分析の事例としては参考になったが、学修成果の向上に繋がる分析が少なく、専門的な統計用語の理解が困難であった。

3．授業評価アンケートと卒業時調査を用いた初めてのグループ討議で、学生支援の向上・充実に参考になった。

4．主要な部署の成果と課題と改善点を把握でき、他の部署や教職員個人の改善計画や行動計画の参考になった。

Act 改善

1．今後もアクティブラーニングについて、学科・コースのローテーションで継続的に研修会を実施したい。

2．データサイエンスを学修成果の可視化と公表、学生の学習意欲の向上、学習支援の改善策に活用したい。

3．今後も多様なIRデータを用いて、学修支援・生活支援・就職支援に繋がるディスカッションを行いたい。

4．各部署の年次報告の後に、本学の特色ある教育や校風、事業、イベントなどについて、討論していきたい。

5．多くの教職員が外部のFD・SDの研修会やセミナーに積極的に参加して、最新の情報を共有していきたい。

令和３年度　「ＩＲ推進室」年次報告書
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　推進室　）
氏名：森　弘行（室長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．学務システムの効果的な活用法を検討し、業務の改善を図る。 ２．IR に関する環境整備の推進。 ３．学修成果における 6 つの項目の見直しを行う。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．学務システムに実装されている面談記録、高校訪問記録、連絡事項管理機能などを活用し学内業務の改善を図る。 ２．Wi-Fi 環境など IR に関する環境整備を行う。 ３．他大学の取組等を参考にしながら、学修成果における 6 つの項目の見直しを図る。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1.自己評価「S・A・B・C・D 」 学務システムに実装されている面談記録、高校訪問記録については学科・コースで入力率が異なり、活用できる状況まで至っていない。 2.自己評価「S・A・B・C・D 」 Wi-Fi エリア拡張の調査を実施。 3.自己評価「S・A・B・C・D 」 FD 研修会において学修成果における 10 の評価項目指針を提案。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．学務システムへの情報登録を推進し、業務の効率化を図る。 ２．Google Workspace for Education や Microsoft Teams など、クラウド型教育・情報システムの導入を検討する。 ３．学修成果における評価項目と評価基準、評価項目の配点比率表の作成および学務システムへの適用の試行。

令和３年度 IR推進室 年次報告

Plan 計画

1. 学務システムの効果的な活用法を検討し、業務の改善を図る。
2. IRに関する環境整備の推進。
3. 学修成果における6つの項目の見直しを行う。

Do 実行

1. 学務システムに実装されている面談記録、高校訪問記録、連絡事項管理機能などを活用し学内業務の改善を図る。
2. Wi-Fi環境などIRに関する環境整備を行う。
3. 他大学の取組等を参考にしながら、学修成果における6つの項目の見直しを図る。

Check 検証

1. 学務システムの面談記録、高校訪問記録については、学科・コースで入力率が異なり、活用できる状況まで至っていない。
2. Wi-Fiエリア拡張の調査を実施。
3. FD研修会において学修成果における10の項目指針を提案。

Act 改善

1. 学務システムへの情報登録を推進し、業務の効率化を図る。
2. Google Workspace for EducationやMicrosoft Teamsなど、クラウド型教育・情報システムの導入を検討する。
3. 学修成果における評価項目と評価基準、評価項目の配点比率表の作成および学務システムへの適用の試行。

令和３年度　「教務委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：織田　芳人（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．学務システムの効果的な活用法を検討し、業務の改善を図る。

２．履修状況とシラバスを参考に、基礎科目の確認及び見直しを行う。

３．　学内の状況に応じて学則、規程等の整備を行う。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．学務システムに実装された連絡事項管理機能を全学生に周知し、学生への諸連絡に活用していくことで、教務関係の紙媒体による掲示からスマートフォン等を通した通知への転換等を図って、教務関係の業務の改善を図る。

２．各期における履修状況を確認し、基礎科目の必要性について検討する。

３．各学科・コースやIR推進室等との連携をとりながら、学則、規程等の整備を図る。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1.自己評価「S・A・B・C・D 」
学務システムの連絡事項管理機能を全学生への諸連絡に活用することを、徐々にではあるが、進めることができたので、教務関係の紙媒体による掲示を削減することができ、結果として教務関係の業務の改善をかなり図ることができた。

2.自己評価「S・A・B・C・D 」
基礎科目の韓国語、中国語について、過去３年間の授業評価アンケートの結果等を検討したが、非常勤講師には自由記述欄が開示されていないことから、今年度に開示し、令和４年度に再検討することにした。基礎科目の「現代社会と女性」の内容・開講期間を見直し、科目名も「初年次セミナー」へ変更した。

3.自己評価「S・A・B・C・D 」
長期履修制度の制定及び手続書類等の整備、再試験の成績評価における最高評点の見直し、１単位の授業時間に関する単位算定基準の整備、年間履修上限単位数及び履修上限緩和の成績基準の見直し、履修登録期間の変更等、学則、規程等を整備した。各学科・コースの履修科目の見直し等も行った。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学務システムの連絡事項管理機能が、現在、教職員からの通知だけに限定されていて、学生からの連絡を受け取れないので、Google提供の通知システムも検討する。

２．基礎科目の韓国語と中国語について検討し、必要に応じて見直しを行う。「基礎科目」という呼称の検討も含めて、基礎科目全体の確認及び見直しを行う。

３．カレッジ・ライフに記載されている教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）について、IR推進室と連携協力して、令和５年度へ向けて、改訂を検討する。

令和３年度 教務委員会 年次報告

Plan 計画

1．学務システムの効果的な活用法を検討し、業務の改善を図る。

2．履修状況とシラバスを参考に、基礎科目の確認及び見直しを行う。

3． 学内の状況に応じて学則、規程等の整備を行う。

Do 実行

1．学務システムの連絡事項管理機能を全学生に周知し、学生への諸連絡に活用することで、教務関係の紙媒体による掲示からスマートフォン等を通した通知への転換等を図り、業務改善を図る。

2．各期における履修状況を確認し、基礎科目の必要性について検討する。

3．各学科・コースやIR推進室等との連携をとりながら、学則、規程等の整備を図る。

Check 検証

1．学務システムの連絡事項管理機能を全学生への諸連絡に活用することを進めて、教務関係の紙媒体による掲示を削減することができた。

2．基礎科目の韓国語、中国語について、過去3年間の授業評価アンケートの結果等を検討したが、非常勤講師には自由記述欄が開示されていないことから、今年度に開示し、令和4年度に再検討することにした。基礎科目の「現代社会と女性」の内容・開講期間を見直し、科目名も「初年次セミナー」へ変更した。

3．長期履修制度の制定、再試験の成績評価における最高評点の見直し、1単位の授業時間に関する単位算定基準の整備、年間履修上限単位数及び履修上限緩和の成績基準の見直し、履修登録期間の変更等、学則、規程等を整備した。各学科・コースの履修科目の見直し等も行った。

Act 改善

1．学務システムの連絡事項管理機能が、現在、教職員からの通知だけに限定されていて、学生からの連絡を受け取れないので、Google提供の通知システムも検討する。

2．基礎科目の韓国語と中国語について検討し、必要に応じて見直しを行う。「基礎科目」という呼称の検討も含めて、基礎科目全体の確認及び見直しを行う。

3．カレッジ・ライフに記載されている教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）について、IR推進室と連携協力して、令和5年度へ向けて、改訂を検討する。オンライン授業と対面授業を組み合わせたハイブリッド授業の実施を検討する。

令和３年度　「教職課程委員会」年次報告書
区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）
氏名：本村　弥寿子（委員長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．　保育士養成に係る新カリキュラムを実施し、教育効果について評価・改善を図る。 ２．関係省庁からの通知・連絡内容に速やかに対応し、免許・資格取得のための学修を確実に行う。 ３．関係省庁が主催する説明会・研修会へ、積極的に参加する。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．学生の授業への取り組みの実態や成績、さらに授業評価アンケート等により各授業の評価・改善に取り組む。 ２．関係省庁や県のホームページ、通知等に目を通し、関係教員・職員で速やかに対応を図る。 ３．全国保育者養成協議会開催の研修会や説明会、保育学会等に参加し、得た情報を教員・職員間で共有する。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 免許・資格取得を希望しない学生でも取得希望者とほとんど変わらぬ単位数を取得しなければならない状況を変えるべく、すべての学生が無理や負担なく必要な単位が取得できるように科目及び必修・選択の見直しを行い、カリキュラムの整理がなされた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 文科省が推進する科目「情報機器の活用に関する理論及び方法（仮称）」についていち早く取り上げ、整備、各領域の指導法の指導内容の一部改変等の確認と教員間の情報共有を行った。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 各教員が専門及び担当分野についての説明会や研修会に進んで参加した。事後の教職員間での共有は十分ではなかった。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．　新たなカリキュラムでの学生の実態を成績やアンケートで把握し、カリキュラム・マネジメントに活かす。 ２．関係省庁からの通知・連絡に速やかに対応する。 ３．　関係省庁が主催する説明会・研修会へ積極的に参加し、教職員間での共有を図る。

令和３年度 教職課程委員会 年次報告

Plan 計画

1.保育士養成に係る新カリキュラムを実施し教育効果について評価・改善を図る。
2.関係省庁からの通知・連絡内容に速やかに対応し、免許・資格取得のための学修を確実に行う。
3.関係省庁が主催する説明会・研修会へ、積極的に参加する。

Do 実行

1.学生の授業への取り組みの実態や成績、さらに授業評価アンケート等により各授業の評価・改善に取り組む。
2.関係省庁や県のホームページ、通知等に目を通し、関係教員職員で速やかに対応を図る。
3.全国保育者養成協議会開催の研修会や説明会、保育学会等に参加し、得た情報を教員・職員間で共有する。

Check 検証

1.免許・資格取得を希望しない学生でも取得希望者とほとんど変わらぬ単位数を取得しなければならない状況を変えるべく、すべての学生が無理や負担なく必要な単位が取得できるように科目及び必修・選択の見直しを行い、カリキュラムの整理がなされた。
2.文科省が推進する科目「情報機器の活用に関する理論及び方法（仮称）」や、各領域の指導法の指導内容の一部改変等の確認と教員間の情報共有を行った。
3.各教員が専門及び担当分野についての説明会や研修会に進んで参加した。事後の教職員間での共有は十分ではなかった。

Act 改善

1.新たなカリキュラムでの学生の実態を成績やアンケートで把握し、カリキュラム・マネジメントに活かす。
2.関係省庁からの通知・連絡に速やかに対応する。
3.関係省庁が主催する説明会・研修会へ積極的に参加し、教職員間での共有を図る。

令和３年度　「特色化推進ＰＴ会議」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：玉島　健二（会議長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　現段階での本学の課題をメンバー全員で洗い出し、上げられた課題を分野別・項目別に整理し、課題の共有化を図る。
２．　学生支援策としての施設・設備の充実、奨学金の見直し等、新たな取組について模索する。
３．　教務関係として、「長期履修制度」及び「プラスワンイヤーサポートシステム」、ビジネス・医療秘書コースの「実践型教育プログラム」、栄養士コースの「学生サポートスタッフ制度」等の特色化の実現及び充実に向け、関係者と協議を重ねる。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　全教職員に対し、アンケートを実施するとともに、集計結果をもとに会議を開き、方向性を決定する。
２．　会議の中で「学生支援対策」としてテーマを設定して協議するとともに、学友自治会役員とのヒヤリングを行い、学生の要望を聴取し、協議の参考資料とする。
３．　会議の中で「教務関係」としてテーマを設定して協議する。また、「耐震化対策・バリアフリー化対策」として学園本部に対し、方向性を出すよう強く求めていく。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
令和元年度及び令和２年度までの協議内容、進捗状況等をまとめた資料を、６月に全専任教職員に配布し、改めて、「長崎女子短期大学の今後に向けて」というテーマで意見を求めた。「教育内容・教育課程」ほか、１４項目にわたって提言があり、９月以降のプロジェクト会議で検討した。
２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学生支援策としては、学食の特別メニューの提案、栄養士コースが使用する調理実習室のダクト塗装とオーブン交換、２号館トイレの自動水栓化などは実現した。また、学友自治会役員との意見交換会も１回ではあるが、実施できた。
３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
教務関係では、「長期履修制度」及び「プラスワンイヤーサポートシステム」は令和４年度からの導入が決定。栄養士コースの「教育サポートスタッフ制度」も今年度から実施できた。「耐震化対策」・「バリアフリー化対策」は何も進展しなかった。ただし、障がい者用トイレにオストメイトを導入することになった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　遠隔授業に対応できる施設設備の整備（Wi-Fi 環境整備を含む）、１３３教室の整備、放送設備の整備
２．「耐震化」、「バリアフリー化」への対応
３．　「男女共学化」の検討

以上、上記３点が次年度以降の大きな課題となる。

令和３年度 特色化推進PT会議　年次報告

Plan　計画

１．本学の課題をＰＴ会議メンバーで洗い出し、課題の整理と共有化を図る。

２．学生支援策として、施設設備の充実、奨学金の見直し等、新たな取組を模索する。

３．教務関係として、長期履修制度・プラスワンサポート等の実現に向け、協議する

Do　実行

１．全専任教職員へのアンケートの実施し、その結果を踏まえ、協議の方向性を決定する。

２．学生支援策の内容の検討、学友自治会役員との意見交換の実施

３．教務関係課題の実現に向けた協議、耐震化・バリアフリー化に関する学園本部への具申

Check　検証

１．これまでの取組を冊子にして、６月に全専任教職員に配布、新たな意見募集、９月以降ＰＴ会議を開催し協議した。→　評価：A

２．学生支援策としては、学食の特別メニューの提案、調理実習室ダクトの塗装やオーブンの交換、２号館トイレの自動水栓化等は実現。学友自治会役員との意見交換も１回実施　→　評価：B

３．教務関係としては、長期履修制度とプラスワンサポートは令和４年度より導入決定、栄養士コースの教育サポートシステムは令和３年度より実施、「耐震化・バリアフリー化」は何も進展なし、ただし、障がい者用トイレにオストメイトを導入する予定。
→　評価：C

Act　改善

次年度以降の課題

１．遠隔授業に対応できる施設設備の整備
　　１３３教室の整備、放送機器の整備

２．「耐震化・バリアフリー化」への対応

３．「男女共学化の検討」

以上、上記３項目が主な課題となる。

令和３年度　「募集・広報委員会」年次報告書

区分：　学科専攻　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：髙井　達司（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．オープンキャンパスの動員向上、及び参加者の満足度を上昇させる。
２．アンバサダー協力のもと、SNS や映像型媒体を活用したメディア発信を積極的に発信する。
３．予算管理の徹底と適正な資金投入を目指すことで、その有効活用を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．継続する「コロナ問題」はあったが、参加者数の増減については、常に入試広報室の責任であると認識している。実施可能なあらゆる手段を用い、これに対応していきたい。また、生徒・保護者の満足度向上のためには、学生スタッフの対応力が不可欠である。前年度開催した春のキャンパス見学会において若干の課題が見られたので、これを活かし徹底した事前指導を行うものとする。
２．本年度も学生スタッフを巻き込んだ情報発信を実施するが、内容については学生募集を意識し過ぎず、寧ろ在学生に対する発信ツールとして活用するよう発想を転換したい。これにより、在学生の本学に対する帰属意識を醸成させ、結果として在学生が投稿を楽しみにするようになれば、そのことが「雰囲気の良い大学」として高校生への評価に繋がると期待する。
３．昨年度末に発生した「コロナ問題」により予算執行対象のイベントが中止となり、これが一年間継続された。本年度は執行率が下がらないよう、積極的な資金の有効活用に努めたい。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
第３回における幼児教育学科の中止に伴い、当学科参加者の大幅減少を見たが、このことは最終的な出願者減にも繋がった。特に長崎地区の減少幅は予想を遙かに超え大きなものとなった。生活創造学科は延べ数、実数ともに微増であった。相対的に長崎地区の参加者向上を目指すとともに、県外エリアへの募集活動が求められる。
参加者の満足度は本年度も全ての項目で高い数値を残しており、教職員のモチベーションはもとより、学生スタッフに対する評価項目はいずれも高い満足度を残した。事前の指導が徹底されたのか、アンバサダーを中心に満足のいくパフォーマンスを披露した。
２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
SNS の発信はアンバサダーの協力のもと、各コースにおける日々のキャンパスライフやその魅力を、学生目線で年間 44 本、インスタグラムにより発信した。これは県内他学の SNS に比較し遜色のない数値であったが、購読者数が毎回 50 名に届かないことが課題であった。
動画配信は、コロナ対策として他学に先駆け取り組んできた。視聴者は本学公式サイトや、各種イベントで生徒の目に触れることが出来たが、これらを越えた更なる広範囲の活用策が課題である。
３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
本年度も継続してコロナ禍の影響により、予算執行対象のイベントが中止となったが、オープンキャンパスの実施回数が増えたことで、概ね予算執行は当初予定を達成した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．相対的に弱い長崎地区と県外募集対策に資金投入の分散を図りたい。特に次年度に出願者数の回復が期待される長崎女子高校との連携事業や、沖縄地区募集活動の再開に挑みたい。
２．アンバサダーとの連携を深めることを目的に、アンバサダー会議を初めて実施した。早速、次年度学校案内の企画編集に学生を一部参画させたが、これにより彼らのモチベーションを高め、ひいては学生の成長に寄与したい。動画配信は、公式サイトを越え広く高校生の目に届くよう計画進行中である。
３．ネット出願や、ＬＩＮＥを活用した募集ツールは県内何れの大学も導入しており、これへの対応は大きな課題である。投資額も大きいことから一年間をかけて研究していきたい。

令和３年度 募集・広報委員会 年次報告

Plan 計画

1、 オープンキャンパスの動員向上、及び参加者の満足度を上昇させる。
2、 アンバサダー協力のもと、SNSや映像型媒体を活用したメディア発信を積極的に発信する。
3、 予算管理の徹底と適正な資金投入を目指すことで、その有効活用を図る。

Do 実行

1、継続する「コロナ問題」はあったが、参加者数の増減については、常に入試広報室の責任であると認識している。実施可能なあらゆる手段を用い、これに対応していきたい。また、生徒・保護者の満足度向上のためには、学生スタッフの対応力が不可欠である。前年度開催した春のキャンパス見学会において若干の課題が見られたので、これを活かし徹底した事前指導を行うものとする。
2、本年度も学生スタッフを巻き込んだ情報発信を実施するが、内容については学生募集を意識し過ぎず、寧ろ在学生に対する発信ツールとして活用するよう発想を転換したい。これにより、在学生の本学に対する帰属意識を醸成させ、結果として、在学生が投稿を楽しみにするようになれば、そのことが「雰囲気の良い大学」として高校生への評価に繋がると期待する。
3、昨年度末に発生した「コロナ問題」により予算執行対象のイベントが中止となり、これが一年間継続された。本年度は執行率が下がらないよう、積極的な資金の有効活用に努めたい。

Check 検証

1、幼児教育学科の中止に伴い、当学科参加者の大幅減少を見た。特に長崎地区の減少幅は予想を遙かに超え大きなものとなった。生活創造学科は延べ数、実数ともに微増であった。参加者の満足度は本年度も全ての項目で高い数値を残した。
2、SNSの発信はアンバサダーの協力のもと、日々のキャンパスライフやその魅力を、学生目線で年間44本インスタグラムにより発信した。動画配信は、コロナ対策として他学に先駆け取り組んできた。
3、本年度も継続してコロナ禍の影響により、予算執行対象のイベントが中止となったが、オープンキャンパスの実施回数が増えたことで、概ね予算執行は当初予定を達成した。

Act 改善

1、相対的に弱い長崎地区と県外募集対策に資金投入の分散を図りたい。特に次年度に出願者数の回復が期待される長崎女子高校との連携事業や、沖縄地区募集活動の再開に挑みたい。
2、アンバサダーとの連携を深めることを目的に、アンバサダー会議を初めて実施した。早速、次年度学校案内の企画編集に学生を一部参画させたが、これにより彼らのモチベーションを高め、ひいては学生の成長に寄与したい。動画配信は、公式サイトを越え広く高校生の目に届くよう計画進行中である。
3、ネット出願や、ＬＩＮＥを活用した募集ツールは県内何れの大学も導入しており、これへの対応は大きな課題である。投資額も大きいことから一年間をかけて研究していきたい。

令和３年度　「紀要・図書委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：中村　浩美（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．昨年度に引き続きコロナ感染対策の徹底を行う。学生利用者の入館方法を昨年度同様として学生が利用しやすい環境を作る。

２．昨年度学生応募で完成されたマスコットキャラクターの活かし方を検討しながら工夫する。

３．紀要論文の向上と学術機関リポリトジの運用を検討し実行に向ける。倫理規定案を検討する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．コロナ感染対策のために入館者の手指のアルコール消毒と閲覧者の間隔を取り、利用後は机等をアルコール消毒する。学生利用者は図書館が準備した透明の小さなポーチに必需品を入れて飲み物も持参しての入館の許可をする。

２．昨年度図書館をより身近に気楽に利用してもらうために学生応募によって完成されたマスコットキャラクター「ぶんこさん」を、付箋紙としてやティッシュの裏になどにも利用できるよう、金額を考慮しがながら作成する。

３．リポリトジの運用指針に於いて、第２条２－⑵の論文、研究ノートを削除し「長崎女子短期大学紀要」のみとすること、査読は不可能である事の了承を得た。 本学紀要投稿に当たって規定順守のチェックシートを作成し、チェックに記入して提出する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１.自己評価「 S・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
３密にならないよう常に気を配り、手指の消毒や換気、席の間隔、使用後の机等も消毒に徹底した。

２．自己評価「Ｓ・Ａ・B・Ｃ・Ｄ」
コロナ渦中によって取り組む事が難しかったが、「ぶんこさん」の存在アピールとして図書館入口に絵を貼っていた。

３．自己評価「Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
紀要発行に際しては例年同様予定通りに遂行し発行する事ができた。しかしチェックシート作成の下、投稿者や投稿数を把握する事ができなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．コロナ感染対策の強化に徹底して、学生や教職員にも常に意識ある利用をしてもらう。

２．コロナの状況によってマスコットキャラクターを実用化できるようにする。

３．紀要の納品までのスケジュールは今年度と同様に行う。
学科・各コースの委員によってチェックシートの作成の下、投稿者と投稿数を確認して原稿提出できるようにする。

令和３年度 紀要・図書委員会 年次報告

Plan 計画

1.コロナ感染対策の徹底を行う。学生利用者の入館方法を昨年同様とし、利用しやすい環境を作る。

2.学生応募で完成されたマスコットキャラクターの活かし方を検討しながら実用化できる工夫をする。

3. 紀要論文の向上と学術機関リポトジの運用を検討し実行に向ける。倫理規定案を検討する。

Do 実行

1.コロナ感染対策に必要な手指の消毒や閲覧者の間隔、使用後の机等の消毒を行う。学生利用者は図書館が準備した透明ポーチに必需品を入れて入館し、飲み物の持参を許可する。

2.学生応募で完成されたマスコットキャラクターによって図書館のアピールをするため、実用化できる物を金額と見合わせ試作する。

3.リポリトジの運用指針に於いて、第2条2－(2)の論文、研究ノートを削除し「長崎女子短期大学紀要」のみとする事、査読は不可能である事の了承を得た。本学紀要投稿に当たって規定順守のチェックシートを作成し、チェックシートに記入しで提出する。

Check 検証

1.3密にならないよう常に気を配り、手指の消毒や換気、使用後の机等の消毒にも徹底した。

2.コロナ渦中によって散る組む事が難しかったが、マスコットキャラクター「ぶんこさん」の存在アピールとして、図書館入口に絵を貼っていた。

3.紀要発行に際しては予定通り遂行できた。しかしチェックシート作成の下、事前に投稿者と提出数を把握できずにスケジュールが動いてしまった。

Act 改善

1.コロナ感染対策の強化を徹底して、学生や教職員にも常に意識ある利用をしてもらう。

2.コロナの状況によってマスコットキャラクターを実用化できるようにする。

3.納品までのスケジュールは例年通りとする。学科・各コースの委員よって、チェックシート作成の下、投稿者と投稿数を事前に確認して原稿提出をできるようにする。

令和３年度　「学生委員会」年次報告書

区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）

氏名：船勢　肇（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学生生活全般並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重し、支援活動を行なう。

2. 学友自治会役員が行事を行う際には、担当教員が密に連絡を取りつつ、学生が自主性を養える機会となるよう適切に関わる。

3. 学友自治会活動における新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐ方策を講じる。

DO(実行)：目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 総会、スポーツフェスタ、弥生祭、学友自治会選挙等の学友自治会行事については、準備段階から学生の主体性を尊重しながらおこなう。

2. 自治会役員から各担当委員への報告・連絡・相談を徹底させ、逐次進捗状況の把握に努める。また、学生委員間のコミュニケーションも緊密にし、スムーズな活動ができるような協力体制を確立する。

3. 学友自治会行事実施時における新型コロナウイルス感染症の感染拡大を予防出来るよう、自治会役員に自覚を求め、指導を行う。

CHECK(検証)：成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。

1. 自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
スポーツフェスタと弥生祭について自由参加としたが、依然として教職員が関わりすぎているとの批判を多数受けた。次年度の自治会役員については早期からワークショップをおこない、主体性を重視しながら実施することができた。

2. 自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
各部門の担当教員への報連相が機能していたとはいいがたいが、次期自治会役員には早期からこの点に注意をうながしている。

3. 自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
行事でクラスター感染が起こることはなかった。新型コロナウイルスへの危機感は概ね共有されていた。弥生祭の実施については感染段階に応じた判断基準を作成し、自治会役員の理解を得られた。クラス会での換気やマスク着用について完璧ではなかった。

ACT(改善)：課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 自治会活動への参加・不参加については、より一層自由な意思で決められるような環境を整える。また、行事の準備については、学生に委ねられるところを模索しながらおこなっていく。

2. 報連相の窓口への意識をより徹底し、学生への関わりは、学生自身が考えながら行動するよううながしていく。

3. コロナ対策は、学生が公共の責任をもつ機会でもある。学生に問いかけ考えさせながら、対策を徹底していく。

令和３年度 学生委員会 年次報告

Plan 計画

1.学生生活全般並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重し、支援活動を行なう。

2.学友自治会役員が行事を行う際には、担当教員が密に連絡を取りつつ、学生が自主性を養える機会となるよう適切に関わる。

3.学友自治会活動における新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐ方策を講じる。

Do 実行

1. 総会、スポーツフェスタ、弥生祭、学友自治会選挙等の学友自治会行事については、準備段階から学生の主体性を尊重しながらおこなう。

2. 自治会役員から各担当委員への報告・連絡・相談を徹底させ、逐次進捗状況の把握に努める。また、学生委員間のコミュニケーションも緊密にし、スムーズな活動ができるような協力体制を確立する。

3. 学友自治会行事実施時における新型コロナウイルス感染症の感染拡大を予防出来るよう、自治会役員に自覚を求め、指導を行う。

Check 検証

1.自治会活動への参加・不参加については、より一層自由な意思で決められるような環境を整える。また、行事の準備については、学生に委ねられるところを模索しながらおこなっていく。

2.報連相の窓口への意識をより徹底し、学生への関わりは、学生自身が考えながら行動するようううながしていく。

3.コロナ対策は、学生が公共の責任をもつ機会でもある。学生に問いかけ考えさせながら、対策を徹底していく。

Act 改善

1.スポーツフェスタと弥生祭について自由参加としたが、依然として教職員が関わりすぎているとの批判を多数受けた。次年度の自治会役員については早期からワークショップをおこない、主体性を重視しながら実施することができた。

2.各部門の担当教員への報連相が機能していたとはいいがたいが、次期自治会役員には早期からこの点に注意をうながしている。

3.行事でクラスター感染が起こることはなかった。新型コロナウイルスへの危機感は概ね共有されていた。弥生祭の実施については感染段階に応じた判断基準を作成し、自治会役員の理解を得られた。クラス会での換気やマスク着用について完璧ではなかった。

令和３年度　「障がい学生支援委員会」年次報告書

区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）

氏名：織田　芳人（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．年度始めに、各学科コースで回収した申請書を整理し分類して、合理的配慮が必要な学生に関する情報を提供する。

２．「合理的配慮申請書」の様式を変更したことによる不都合や不便等が生じたかどうかを確認し、もしあれば随時修正して、次年度に反映させる準備をしていく。

３．各学科コースで可能な範囲の合理的配慮が行われているか、また、申請者以外に気になる学生がいないかを確認し、配慮の追加等を随時行う。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．合理的配慮申請書の様式を見直したことで、提出された申請書を従来よりも早く整理できたため、4 月 8 日に各学科コースへ、合理的配慮が必要な学生に関する情報を提供した。

２．新規の合理的配慮申請書で誤記入された部分があり、また、共有する情報の内容について変更の提案もあった。

３．各学科コースで可能な範囲の合理的配慮が行われているか、また、申請者以外に気になる学生がいないかを確認した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
合理的配慮申請書を早く整理できたため、年度始めの 4 月 8 日に、各学科コースへ合理的配慮が必要な学生に関する情報を提供することができた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
来年度の合理的配慮申請書を「入学予定者」用及び「在学生」用に分けて作成し、「入学前課題」の送付時に発送することができた。結果として、2 月下旬に入学予定者の約 7 割の合理的配慮申請書を確認することができた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
各学科コースで可能な範囲の合理的配慮が行われているか、また、申請者以外に気になる学生がいないかを 11 月初めに確認した結果、特に問題はなかった。ただし、少なくとも前期後半及び後期後半の 2 回、確認することが望ましい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．入学前に入学予定者の合理的配慮申請書を確認することができるが、未提出者分は新年度に入って確認することになるので、いったん学生課へ提出済申請書を戻して、新年度に提出された申請書も含めて、学籍番号順に整理したものを委員会が預かることとする。

２．「入学予定者」用の合理的配慮申請書に学籍番号を記入する欄を設けて、新年度始めに各学科コースで整理しやすい様式に改善することとする。

３．前期後半（7 月下旬～8 月上旬）及び後期後半（1 月中旬～下旬）に、各学科コースで可能な範囲の合理的配慮が行われているか、また、申請者以外に気になる学生がいないかを確認し、必要に応じて追加の配慮等を実施することとする。

令和３年度 障がい学生支援委員会 年次報告

Plan 計画

1．年度始めに、各学科コースで回収した申請書を整理し分類して、合理的配慮が必要な学生に関する情報を提供する。
2．「合理的配慮申請書」の様式を変更したことによる不都合や不便等が生じたかどうかを確認し、もしあれば随時修正して、次年度に反映させる準備をしていく。
3．各学科コースで可能な範囲の合理的配慮が行われているか、また、申請者以外に気になる学生がいないかを確認し、配慮の追加等を随時行う。

Do 実行

1．合理的配慮申請書の様式を見直したことでに、申請書を従来よりも早く整理できたため、4月8日に各学科コースへ、合理的配慮が必要な学生に関する情報を提供した。

2．新規の合理的配慮申請書で誤記入された部分があり、また、共有する情報の内容について変更の提案もあった。

3．各学科コースで可能な範囲の合理的配慮が行われているか、また、申請者以外に気になる学生がいないかを確認した。

Check 検証

1．合理的配慮申請書を早く整理できたため、年度始めの4月8日に、各学科コースへ合理的配慮が必要な学生に関する情報を提供することができた。

2．来年度の合理的配慮申請書を「入学予定者」用及び「在学生」用に分けて作成し、「入学前課題」の送付時に発送することができた。結果として、2月下旬に入学予定者の約7割の合理的配慮申請書を確認することができた。

3．各学科コースで可能な範囲の合理的配慮が行われているか、また、申請者以外に気になる学生がいないかを11月初めに確認した結果、特に問題はなかった。ただし、少なくとも前期後半及び後期後半の2回、確認することが望ましい。

Act 改善

1．入学前に入学予定者の合理的配慮申請書を確認することができるが、未提出者分は新年度に入って確認することになるので、いったん学生課へ提出済申請書を戻して、新年度に提出された申請書も含めて、学籍番号順に整理したものを委員会が預かることとする。

2．「入学予定者」用の合理的配慮申請書に学籍番号を記入する欄を設けて、新年度始めに各学科コースで整理しやすい様式に改善することとする。

3．前期後半（7月下旬～8月上旬）及び後期後半（1月中旬～下旬）に、各学科コースで可能な範囲の合理的配慮が行われているか、また、申請者以外に気になる学生がいないかを確認し、必要に応じて追加の配慮等を実施することとする。

令和３年度　「学生相談室」年次報告書
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：福井　謙一郎（室長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．　各学科コースとの情報共有を充実させる。 ２．　学生相談室の広報活動を行う。 ３．学生に対する支援を充実させる。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．　必要に応じ、各学科コース長と情報を共有している。 ２．　オリエンテーション時の説明内容の改善、ならびに学生相談室用の広報チラシを作成し、配布した。 ３．学生に対し、受容的・共感的態度で支援に臨んでいる。また、学生相談員との情報共有を密に行っている。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学生に問題が発生した場合、各学科コース長と連絡を取り、学生の情報を共有した。より一層の情報共有が必要となる。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学生に対する広報を、チラシ以外の別媒体でも必要になると考えられる。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学生相談員との情報共有をより一層行う必要がある。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．　学生に関する情報共有を各学科コース長と行う。 ２．　学生相談委員会の実施を定期的に行い、また広報についてはインスタグラム等の SNS を用いる。

令和３年度 学生相談室 年次報告

Plan 計画

１． 各学科コースとの情報共有を充実させる

２． 学生相談室の広報活動を行う

３．学生に対する支援を充実させる

Do 実行

１．必要に応じ、各学科コース長と情報を共有している

２．オリエンテーション時の説明内容の改善、ならびに学生相談室用の広報チラシを作成し、配布した。

３．学生に対し、受容的・共感的態度で支援に臨んでいる。また、学生相談員との情報共有を密に行っている

Check 検証

１．学生に問題が発生した場合、各学科コース長と連絡を取り、学生の情報を共有した。より一層の情報共有が必要となる。

２．学生に対する広報を、チラシ以外の別媒体でも必要になると考えられる。

３．学生相談員との情報共有をより一層行う必要がある。

Act 改善

１． 学生に関する情報共有を各学科コース長と行う

２． 学生相談委員会の実施を定期的に行い、また広報についてはインスタグラム等のSNSを用いる。

令和３年度　「地域連携・子育て支援センター」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：荒木　正平（センター長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．公開講座については、地域ニーズの把握・精緻化をすすめるとともに、新型コロナ対策も適切に行い、参加人数の増加や満足度向上につなげる。

２．子育て支援（親育ち講座）、高大連携を含む地域連携活動については、学内全体として取組む意識の共有をさらに高める。そのために、各学科・コースの特色を生かした事業の実施のみならず、実施した活動についての情報共有・公開体制の整備を進める。

３．ボランティア担当委員の配置を今年度も継続し、スムーズな受付・活動支援の実施が可能な体制を定着させ、コロナ禍においてもさらなる活動の充実を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．今年度も新型コロナ感染の影響が継続したこともあり、参加者数の確保が困難な企画があった一方で、参加者多数のため実施を二回に分けた講座もあった。

２．親育ち講座については、コロナ禍での困難な状況の継続が見込まれるため、今年度も web を活用するなどして講座を実施した。高大連携については、県内３高校（長崎明誠、長崎玉成、長崎女子）との間での連携体制をさらに強化することができた。学内 PC 上の学内ネットワークを活用した情報共有体制の整備については、効率的な運用に向けて体制整備を進めている。

３．担当委員の継続配置により、受付対応・学生への呼びかけ等についてもスムーズな実施が可能な体制は継続して整えている。また、ボランティア活動に関心を持ってもらう新たな企画としてビンゴ大会を実施し好評を得た。引き続き、新型コロナ感染拡大の影響下で、実施可能なボランティアの在り方の検討を進める。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
各学科コース２講座ずつ、計６講座の実施を当初計画したが、新型コロナの影響により、実施が困難な１講座が中止となった。一方で、長崎食育学講座に関連する企画である「親子パン教室」については、参加希望者が多く、２回に分けて開催することとなった。実施可能であった企画については満足度も高い結果となった。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
親育ち講座についても高大連携事業についても、活動日程や実施形態の変更等が余儀なくされた部分があったものの、コロナ禍の困難な状況においては出来る限りの取組みができた。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
今年度も、新型コロナ感染拡大の影響が大きく、ボランティア募集自体が少ない状況ではあった。その中で、愛宕小の見守り活動のほか、新たにボランティア活動事態に関心を持ってもらうためのビンゴ大会などの活動に取り組み、学生の意識を高めることができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．引き続き地域ニーズの把握・精緻化を行うとともに、新型コロナ禍の現状を踏まえた講座形態や開催時期についての検討継続のほか、ウィズコロナで実施可能であり且つ満足度の高い企画の立案・実施を進める。

２．コロナ禍の現状で得られた web 講義（オンライン開催）等のノウハウを生かしながらも、対面での実施の方が適した内容の活動については、実施につなげられるような環境整備について検討を進めたい。

３．引き続き、ボランティア参加希望学生が安心して参加できるような支援体制の整備・連携強化を進めたい。

令和３年度 地域連携・子育て支援センター 年次報告

Plan 計画

1．公開講座については、地域ニーズの把握・精緻化をすすめるとともに、新型コロナ対策も適切に行い、参加人数の増加や満足度向上につなげる。
2．子育て支援（親育ち講座）、高大連携を含む地域連携活動については、学内全体として取組む意識の共有を行う。そのために、各学科・コースの特色を生かした事業の実施、実施した活動についての情報共有・公開体制の整備を進める。
3．ボランティア担当委員の配置を今年度も継続し、スムーズな受付・活動支援の実施が可能な体制を定着させ、コロナ禍においてもさらなる活動の充実を図る。

Do 実行

1．今年度も新型コロナ感染の影響が継続したこともあり、参加者数の確保が困難な企画があった一方で、参加者多数のため実施を二回に分けた講座もあった。
2．親育ち講座については、今年度もwebを活用するなどして講座を実施した。高大連携については、県内３高校との間での連携体制をさらに強化した。学内PC上の学内ネットワークを活用した情報共有体制の整備については、効率的な運用に向けて体制整備を進めている。
3．担当委員の継続配置により、受付対応・学生への呼びかけ等についてもスムーズな実施が可能な体制は継続している。活動に関心を持ってもらう新たな企画としてビンゴ大会を実施し好評を得た。

Check 検証

1. 各学科コース2講座ずつ、計6講座の実施を当初計画したが、新型コロナの影響により、実施が困難な1講座が中止となった。一方で、長崎食育学講座に関連する企画である「親子パン教室」については、参加希望者が多く、2回に分けて開催することとなった。実施可能であった企画については満足度も高い結果となった。
2. 親育ち講座についても高大連携事業についても、活動日程や実施形態の変更等が余儀なくされた部分があったものの、コロナ禍の困難な状況においては出来る限りの取組みができた。
3. 今年度も、新型コロナ感染拡大の影響が大きく、ボランティア募集自体が少ない状況ではあった。その中で、愛宕小の見守り活動のほか、新たにボランティア活動事態に関心を持ってもらうためのビンゴ大会などの活動に取り組み、学生の意識を高めることができた。

Act 改善

1．引き続き地域ニーズの把握・精緻化を行うとともに、新型コロナ禍の現状を踏まえた講座形態や開催時期についての検討継続のほか、ウィズコロナで実施可能であり且つ満足度の高い企画の立案・実施を進める。

2．コロナ禍の現状で得られたweb講義（オンライン開催）等のノウハウを生かしながらも、対面での実施の方が適した内容の活動については、実施につなげられるような環境整備について検討を進めたい。

3．引き続き、ボランティア参加希望学生が安心して参加できるような支援体制の整備・連携強化を進めたい。

令和３年度　「寮務委員会」年次報告書
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：桑原　倫子（委員長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．問題が起こっても直ぐに対応ができるよう、寮務委員やチューターとの連携や情報共有を密に行う。 ２．長崎女子高の先生が寮務委員会に出席できるよう、日程調整等を計画的に行い、高校生の寮内での様子を把握してもらう。寮務日誌も毎日 FAX で女子高に送り、情報を共有する。 ３．省エネ推進員の寮生を中心に省エネ活動を行い、電気のつけっ放しを減らして電気料金の削減に努める
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．問題が起こった際、寮務委員内で速やかに相談し、中心となって解決に導く担当者を決め、適切に対応をする。 ２．長崎女子高の担当者が会議に参加できるよう、早めの日程調整を行う。引き続き、寮務日誌を毎日 FAX で女子高に送り、情報を共有する。 ３．寮生会議や寮内代表者会議等を通じ、寮生全員に省エネへの協力を促す。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 寮生個人間のトラブルは、寮務委員やチューターの教員等で個別に対応することができた。昨年 11 月頃起こった、寮生全体を対象とする問題については、緊急に寮務委員会を開催し寮務委員全員で解決を図った。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」 寮務日誌は、毎日事務局長が長崎女子高校へ FAX で送ってくださったおかげで、情報共有を行えた。会議の日程調整においては、まずは学内での日程調整が上手くいかず、長崎女子高校への連絡が遅れがちであった。 ３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 寮生会議等で省エネの協力を促した。1 月末までの昨年度電気使用料金差額累計をみると、173,016 円のマイナスであった。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．来年度は寮務委員会が新体制になるため、関係職員及び寮務委員の情報共有による支援体制を確立させ、安全・快適な寮生活の提供を図る。 ２．高大連携による寮運営の充実を図る。 ３．寮内各個人部屋単位での、細やかな省エネルギー推進に努める。

令和３年度 寮務委員会 年次報告

Plan 計画

1．問題が起こっても直ぐに対応ができるよう、寮務委員やチューターとの連携や情報共有を密に行う。

2．長崎女子高の先生が寮務委員会に出席できるよう、日程調整等を計画的に行い、高校生の寮内での様子を把握してもらう。寮務日誌も毎日FAXで女子高に送り、情報を共有する。

3．省エネ推進員の寮生を中心に省エネ活動を行い、電気のつけっ放しを減らして電気料金の削減に努める

Do 実行

1．問題が起こった際、寮務委員内で速やかに相談し、中心となって解決に導く担当者を決め、適切に対応をする。

2．長崎女子高の担当者が会議に参加できるよう、早めの日程調整を行う。引き続き、寮務日誌を毎日FAXで女子高に送り、情報を共有する。

3．寮生会議や寮内代表者会議等を通じ、寮生全員に省エネへの協力を促す。

Check 検証

1．寮生個人間のトラブルは、寮務委員やチューターの教員等で個別に対応することができた。昨年11月頃起こった、寮生全体を対象とする問題については、緊急に寮務委員会を開催し寮務委員全員で解決を図った。

2．寮務日誌は、毎日事務局長が長崎女子高校へFAXで送ってくださったおかげで、情報共有を行えた。会議の日程調整においては、まずは学内での日程調整が上手くいかず、長崎女子高校への連絡が遅れがちであった。

3．寮生会議等で省エネの協力を促した。1月末までの昨年度電気使用料金差額累計をみると、173,016円のマイナスであった。

Act 改善

1．来年度は寮務委員会が新体制になるため、関係職員及び寮務委員の情報共有による支援体制を確立させ、安全・快適な寮生活の提供を図る。

2．高大連携による寮運営の充実を図る。

3．寮内各個人部屋単位での、細やかな省エネルギー推進に努める。

令和３年度　「事務局」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：前田　功（事務局長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　円滑な事務局運営のために各種取り組みを行っていく。今年度は新型コロナ感染症対策の徹底と事務局内分担の見直しをしたことによる評価を行っていく。

２．　教務（学務）システムの完成が目標。日々より良いものにしてくことでシステムの完成へと近づけていく。

３．　ＳＤ研修会の計画的な実施と事務局内の報連相の徹底により業務の効率化を図っていく。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　新型コロナ感染症対策の基本として手指の消毒、検温の徹底を図るとともに、コロナ対策として考えられるあらゆる方策の実施を目指す。業務分担については兼務者を増やしているのでその業務の遂行状況を見極めていき、進捗状況を確認していく。

２．教務（学務）システム開発先との連携をより強化していくとともに、システムの完成に向けて情報交換を密にしていく。

３．課題解決に向けたＳＤ研修会を実施していくために、朝礼での情報交換や月に一度の事務局会の実施を通してより緊密な連携を取っていく。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　新型コロナ感染症対策の基本として手指の消毒、検温の徹底を図ることができた。また、業務分担の一環として兼務者を増やすなどスムースな業務遂行に努めることができた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　教務（学務）システム開発先との連携をより強化していくとともに、システムの完成に向けて教務課とともにより強く更新すべき点の把握に努めることができた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　課題解決に向けたＳＤ研修会を実施していくために、朝礼での情報交換を行うことができた。月に一度の事務局会の実施については業務の都合からほとんどできなかった点が残念である。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　新型コロナ感染症対策を徹底することはもちろんのこと、次年度も兼務者を増やしていきながら複数の業務が担当できるような体制を構築していく方向で検討していく。

２．　システム先との連携は時間がたつにつれて、より深まっていると思われるのでこのまま担当者を通じて連携を深めていく。

３．　ＳＤ研修会を実施していくために事務局内の局員たちがお互いの仕事内容を理解するとともに、担当者不在の場合のことを考えて複数の仕事が担当できるようにしていく。さらに兼務者を増やすことと自己の専門分野以外での業務の習熟を果たしていきたい。

令和３年度 事務局 年次報告

Plan 計画

・円滑な事務局運営のために各種取り組みを行っていく。今年度は新型コロナ感染症対策の徹底と事務局内分担の見直しをしたことによって評価を行っていく。
・教務システムの完成が目標。日々よりよいシステムにしていくことでシステムの完成へと近づけていく。
・ＳＤ研修会の計画的な実施と事務局内の報連相の徹底により業務の効率化を図っていく。

Do 実行

・新型コロナ感染症対策の基本として手指の消毒、検温の徹底を図るとともに、対策として考えられるあらゆる方策の実施を目指す。業務分担については兼務者を増やしているのでその業務の遂行状況を見極め、進捗状況を確認していく。
・教務（学務）システム開発先との連携をより強化していくとともに、システムの完成に向けて情報交換を密にしていく。
・課題解決に向けたＳＤ研修会を実施していくために、朝礼での情報交換や月に一度の事務局会の実施通してより緊密な連携を取っていく。

Act 改善

・新型コロナ感染症対策を徹底することはもちろんのこと、次年度も兼務者を増やしていきながら複数の業務が担当できるような体制を構築していく方向で検討していく。
・システム先との連携は、時間がたつにつれてより深まっていると思われるのでこのまま担当者を通じて連携を深めていきたい。
・ＳＤ研修会を実施していくために事務局員たちがお互いの仕事内容を理解するとともに、担当者不在の場合のことを考えて複数の仕事が担当できるようにしていく。さらに兼務者を増やすことで自己の専門分野以外での業務の習熟を果たしていきたい。

Check 検証

・新型コロナ感染症対策の基本として手指の消毒、検温の徹底を図ることができた。また、業務の一環として兼務者を増やすなどスムースな業務遂行に努めることができた。
・教務（学務）システム開発先との連携をより強化していくとともに、システムの完成に向けて教務課とともにより強く更新すべき点の把握に努めることができた。
・課題解決に向けたＳＤ研修会を実施していくために、朝礼での情報交換を行うことができた。月に一度の事務局会の実施については業務の都合からほとんどできなかった点が残念である。

令和３年度

「個人別報告書」

令和３年度　「玉島　健二」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：大学運営	職名：学長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．「現代社会と女性」、「長崎観光入門」及び「長崎観光概論」の授業を通して、学生の基礎学力や社会人基礎力の向上を目指すともに、授業評価アンケート結果において「全体的な満足度」４．３以上を目指す。

２．令和３年度の学長運営方針における４つの努力目標について、実現に向けた取組を推進する。特に、学科・コースの特色化、魅力化推進に向け、学科長・コース長と連携して積極的に取り組む。

３．学生募集に繋がる取組（ガイダンス・高校訪問等）に積極的に関わり、令和４年度入学生１７０名の定員確保を目指す。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．授業運営

①「現代社会と女性」については、計画に基づき、学科・コースの担当教員の協力を得ながら、教材の準備や運営を行う。受講後の満足度を高められるよう、運営に工夫を凝らす。

②「長崎観光入門」及び「長崎観光概論」については、「観光」に特化した本学初の科目であり、「卒業後に役に立つ」という観点から教材や指導内容、外部講師の人選等を配慮する。

２．学長運営方針の４項目の努力目標の実現

①運営委員会、入試委員会及び教授会における協議の徹底・情報の共有により、その実現を図る。

②各委員長及び学科長・コース長に対し、会議開催後の報告を求め、学長の指示を徹底させる。

③学科・コースに対し、特色化や魅力化について協議させ、場合によっては学長も検討に加わる。

３．学生募集

①進学ガイダンス、高校訪問、高校からの本学見学会等に積極的に関わり、本学の良さ・強み等をアピールするとともに、丁寧な対応を心掛ける。

②募集・広報委員会には原則参加し、可能な限りの助言を行う。

③入試広報室が作成するパンフレット、募集要項、各種資料には必ず目を通し、助言・指導する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

①「現代社会と女性」の２年生については、前期で終了したが、「全体的な満足度」は平均４．３であり、目標を達成できた。しかし、１年生については、感動を与えられるような内容（外部講師を含む）でなかったためか「３．８」にとどまった。

②「長崎観光入門」については、初年度ということもあり、手探り状態であったが、「全体的な満足度」は平均４．４という結果であった。※「長崎観光概論」は履修希望者がおらず、開講できなかった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

①運営委員会等については、定例的に開催し、所期の目的を達成できた。

②学長が出席していない会議内容については、各長より定期的に報告され、情報共有を図ることができた。

③学科・コースの特色化については、栄養士コースでは対応できたが、他はほとんどできなかった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」

①～③について、ほぼすべてにわたり、対応したが、定員確保にはほど遠い結果となった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．「現代社会と女性」は令和４年度入学生より、「初年次セミナー」に名称及び内容を変更する。学生には授業の目的をしっかり把握させるとともに、「全体的な満足度」は４．３以上を目指す。

２．「学長運営方針の４項目の努力目標の実現」については、まずは運営委員会のメンバーがしっかり取り組むことが重要であるので、共通理解を図りながら、実現に向けた取組を推進する。

３．「学生募集」については、今年度同様に対応する。

令和３年度　「森　弘行」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1.　授業について
　統計理論や暗号化など、学生の理解度が低い領域の教材開発改善。
2.　学務について
　・学術機関リポジトリの整備
　・学内情報システムの維持管理
3.　研究活動について
　・学外との研究協力の継続

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1.　授業について
　・シミュレーション等、体感型教材を開発する。
2.　学務について
　・JAIRO Cloud の導入によるリポジトリ運用の試行
　・無線 LAN 環境整備と無線 LAN 利用の端末増による DHCP リースアドレス不足の対策
3.　研究活動について
　・COVID-19 関連の分析データ収集・加工プログラムの開発

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
・　数的理解等、演習課題と学生による解答、説明の時間を設けたが、授業アンケートでは、自分が説明することで理解ができたという意見の反面、課題が多い、難しい、説明が分からないなど、否定的な意見もあった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
・　JAIRO Cloud の新システムへの移行時期と重なり、利用申請が一時停止状態となっており、導入には至らなかった。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
・　Impact of Workplace on the Risk of Severe COVID-19（共同研究）を Frontires in Public Health で発表。1900 回以上の閲覧。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1.　演習課題と学生による解答、説開設の方法を見直す。

2.　JAIRO Cloud の利用申請は再開されたものの、3 月の総会では新システムのサービス提供開始時期は発表されず、未定のまま。新システムでのサービス開始に合わせてリポジトリの構築を行う。

3.　学外との共同研究の成果を学内での業務に活用する。

令和３年度　「織田　芳人」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．動画製作及び受講生用配付資料の作成等、ICT 活用によって、オンデマンドと対面を組み合わせたブレンド型授業の可能性を模索する。
２．教務委員会の業務を引き継ぎ、また、障がい学生支援委員会の業務を継続する。
３．①知育玩具による体験学修とヴィジュアル・プログラミング学修を組み合わせた授業のアンケート調査をまとめて、紀要に発表する。
②幼児教育学科学生の漢字力向上に資する学修資料の作成を試みる。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．新型コロナウイルス変異株の感染拡大を受けて、ICT 活用によるオンデマンド授業への変更と一部対面授業とを組み合わせたブレンド型授業を試みる。
２．①教務委員会の業務を引き継いで、長期履修制度の制定等を行った。
②障がい学生支援委員会の業務として、合理的配慮事項申請書の様式を見直したことにより、提出された申請書を従来よりも早く整理できた。なお、誤解された部分もあるので、引き続き修正していく。
３．①知育玩具による体験学修とヴィジュアル・プログラミング学修を組み合わせた授業のアンケート調査結果を集計する。
②幼児教育学科学生の漢字力向上に資する学修資料を試作する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
前期は、新型コロナウイルス変異株の感染拡大を受けて、YouTube 活用によるオンデマンド授業を実施した。後期は、新型コロナウイルス変異株の感染が縮小したため、情報演習室での授業をほぼ対面で実施した。しかし、終盤に感染が急速に拡大したため、本学で教員に割り当てられたホームページを活用して、課題を配布した。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
①教務関係の様々な改善を行った中で、特に、授業時間に関する単位算定基準の整備を行った結果、幼児教育学科の履修表をかなり見直すことができ、令和４年度からの時間割のスリムを実現することができた。また、さまざまな授業でのレポート作成能力の向上を図るため、令和４年度から「情報科学」の授業を１年後期から１年前期へ前倒しして開講することとした。
②障がい学生支援委員会の業務として合理的配慮事項申請書の様式を見直したことと入学予定者へ入学前に発送し、７割程度回収できたため、新年度での業務が以前よりは速やかに進めることができた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」
①知育玩具による体験学修とヴィジュアル・プログラミング学修を組み合わせた授業のアンケート調査結果の集計が一部に止まったため、紀要に発表するまでに至らなかった。
②幼児教育学科学生の漢字力向上に資する学修資料を試作するまでに至らなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．①ICT 活用によるオンデマンドと対面を組み合わせたブレンド型授業の可能性を模索する。
②情報科学の授業内容を見直し、必要に応じて、選択科目として内容を拡充することも検討する。

２．障がい学生支援委員会の業務を継続する。

３．知育玩具による体験学修とヴィジュアル・プログラミング学修を組み合わせた授業のアンケート調査をまとめる。

令和３年度　「福井　昭史」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．保育者養成における音楽教育の課題とその解決のための指導方法を研究する。
２．音楽実技の科目において、ピアノ初心者の技能に対応した指導の在り方、教材の開発を行う。
３．各種楽曲の特質を明らかにし、音楽教育における教材性を究明する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．保育者として身につけるべき音楽の能力を明らかにし、その育成のためのカリキュラムを開発する。
２．ピアノ初心者の演奏技能向上を目指した教材を開発（編曲等）し、教育実践を通してその有効性を究明する。
３．音楽の表現と鑑賞の活動において、教材として取り上げられる楽曲を選択しその特質を究明する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

保育者を目指す本学の学生の実態は、音楽に関する知識と技能が十分でないことである。具体的には、楽譜に関することなどの音楽理論、音楽の感受とそれが人間に及ぼす効果や影響、音楽による教育の効果などについての知識と、歌唱やピアノ演奏などの表現技能である。それらの知識や技能は、入学前の学習経験が乏しいことが予想され、授業を通して獲得させる必要がある。そこで、授業科目の「子どもと表現（音楽）」では、音楽の基礎的な理論、音楽の感受と表出、それによる教育の在り方、創造的な表現活動とその教育効果などの知識を身に付けさせることを目的に指導計画を作成し実践にあたった。音楽の表現技能の向上については、授業科目の「子どもの歌と伴奏法」「保育と音楽表現」で担当する学生に合った教材を用い、各々の技能の向上を主として評価する縦断的な個人内評価の視点で学習を展開し、学生が意欲をもって学習に取り組めるように努めた。その結果、学生の授業評価では概ね好評であった。

２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

音楽の表現技能向上を目指す１年生の授業科目「子どもの歌と伴奏法」では、ピアノ演奏について能力別のクラス分けによる指導体制とし、その中の未経験者を担当した。それらの学生は、学習課題の楽曲を既製の楽譜で演奏することが困難なことから、基礎練習曲、伴奏の簡易楽譜を作成し指導にあたった。それら指導に活用した資料を構成し、令和４年度に授業で使用する初心者用のピアノテキストを作成した。演奏が容易な旋律の歌 20 曲程とそのための基礎練習曲による構成で全 60 頁である。

３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

音楽の表現や鑑賞の教育に活用する楽曲の教材性の研究では、季刊「音楽鑑賞教育」の連載「教材研究と指導法」の教材ノートに、「クラリネット・ポルカ」（ポーランド民謡）、「そりすべり」（アンダーソン作曲）、「亡き王女のためのパヴァーヌ」（ラヴェル作曲）の３曲を掲載した。作曲家や地域・時代など楽曲の背景、形式や演奏形態など楽曲の特質を研究し教材性を明らかにしたものである。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．令和４年度から教育課程の改定があり、「子どもと表現（音楽）」が「子どもと音楽表現」となり授業時数が変更になること、「子どもの歌と伴奏法」が選択科目になることなどに対応した授業改善が必要であり、カリキュラムの見直しが求められている。
２．作成した初心者用のピアノテキストを活用し、その有効性を検証するとともに改善に努める。
３．音楽教育に活用する教材楽曲の研究を引き続き実践する。

令和３年度　「武藤　玲路」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．授業について
①講義科目の社会心理学と臨床心理学について、成績評価の度数分布のＳとＡの評価が３０％以上になるようにする。また、授業評価アンケートの５と４の評価が８０％以上になるようにする。
②演習科目のビジネスデータ活用１・２・３でも同様である。
２．学務について
①選択科目の学外実習（インターンシップと病院実習）に、３割以上の学生を参加させて就業体験をさせる。
②キャリア支援では、就職率９５％以上を達成する。
３．研究活動について
①「女子短大生の学習意欲の規定要因」をテーマとして、紀要等で３本以上発表する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．授業について
①心理学の講義科目では、アクティブラーニングの導入を試みた。毎回の授業の最後に理解度と感想を確認するミニレポートの提出を求め、授業の冒頭では前回の授業に関する質問をして授業への関心を高めた。
②表計算ソフト・エクセルの演習科目では、後半の授業で応用問題と自由課題を与え、主体性と問題解決能力、学習意欲の育成に努めた。
２．学務について
①学外実習のインターンシップと病院実習の体験が就職活動や就職後の業務に役立つことを数回説明した。。
②キャリア支援では、キャリアアップセミナーの全体ガイダンスと相談者に対する個別ガイダンスに加え、12月以降は就職未決定者に対して、コース教員全員による総合面談を効果的なタイミングで数回実施した。
３．研究活動について
女子短大生の学習意欲を研究テーマとして、「長崎女子短期大学におけるアセスメントプランの構想」についてと、「秘書検定の学習意欲と教員の声掛けに関する研究」について、本学の紀要に共同研究で投稿した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
成績評価のＳとＡの割合と授業評価アンケートの５と４の割合は、全体的に目標に達しなかった。
特に授業の到達目標を高レベルに設定したビジネスデータ活用３の授業アンケートの学生評価は低かった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
学外実習は、１Ｌ３名／２４名中（１２．５％）、２Ｌ５名／２３名中（２１．７％）しか参加しなかった。
就職率支援では、２Ｌ２０名／２１名中（就職率９５．２％）で、かなり高い就職率を上げることができた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」
「女子短大生の学習意欲の規定要因」をテーマとした報告書を紀要に２本しか投稿することができなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　高度なレベルの科目は、到達目標と授業計画・教授法を見直して、学生の理解度と満足度を上げたい。

２．　学外実習と就職支援の問題点を再検討し、全体と個別の支援を駆使して、学生の動機づけを高めたい。

３．　学習意欲を促進させるルーブリックの開発と学修成果のフィードバックについて研究していきたい。

令和３年度　「中澤　伸元」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

知識を教える授業からディスカッションを取り入れることで他人との違い、新しい発想力を学んでいく正解のない授業へ

１．発声、音楽表現、身体表現などかだいについての独自の考えを持つ。

２．(1) についての自分の考え方を仲間に発表し、ディスカッションを能動的に行う。

３．(1) (2) での自分に必要な正解のない考えや、新しい発想、方法を前提にしたトレーニングを考える。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　発声、音楽表現、身体表現を実践し、実践結果を毎回記録していく。

２．　自分の新しい考え、方法、仲間の新しい発想も実践し、違いについて研究する。
「正解はない！」ということが前提での実践。

３．　正解のない新しい考え、方法について確信できるまで徹底的に繰り返し探求し、トレーニングする。
改めて各自の課題を見つける。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
今回は、コロナのため計画が実行することができなった。
２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
実技が思うように進まなかったため、発想、考えを実践することがなかなかできなかった。
３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
一人一人の改善点を見つけ出す授業ができず課題を追求できなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　実技指導が徹底できなかったため、コロナに振り回されない理論との並行した授業展開。ピアノなど初心者が多く保育者としての音楽の基本的知識を学ぶ。

２．　曲によるイメージ作り、感情表現、臨場感、リアリティの脳訓練。

３．ドリル形式を多く取り入れ、個人個人の理解できていない点を徹底指導。
音名と音階の違い、リズムの理解、訓練の必要性、音程感覚、等々

令和３年度　「松尾　公則」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：教授　　特専教授　　松尾公則

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．「ヒトと生物」「栄養士の科学」は、現場で役立つ内容とし、興味関心を持たせる

２．卒研では環境教育が実践できるような人材の育成を目指す。

３．中庭庭園池の管理を行い多様性を高めていく。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．毎時間、講義内容に関する資料やプリントを準備し、90 分間学生が集中できるようにする。

２．毎時間、自然と触れ合う内容を準備し実践する。野外活動や教育活動を重視する。

３．アメリカザリガニの侵入により池の生態系が崩壊しているが、維持に努める。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　栄養士の科学では、基礎的な化学の力を十分につけることができたと思う。
　ヒトと生物では、コロナ禍の休講のため十分とは言えないが、就職後の生きものとの関わり方については理解できたと思う。

２．自己評価「 [S]・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　子どもと自然環境のゼミ生として、自然とのかかわり方や自然の中での遊び方などを学ばせることができた。コロナ禍のため、予定していた項目を完全に実施することはできなかったが、学生の関心も強かったので成果は十分であった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
　昨年に引き続きアメリカザリガニによる環境悪化のため、池の水質状況は最悪である。その中で、多数のヒキガエルが産卵に訪れたので、2 年ぶりに多数のオタマジャクシが見られるだろう。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学力差が大きいため、基礎学力のない学生の指導を図りたい。

２．コロナ禍は継続すると思われるが、短い時間を有効に使い、自然との触れ合いを深めさせていきたい。

３．個人的な力やゼミでの力には限度があるが、池の保全に努めていきたい。

令和３年度　「濵口　なぎさ」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．演習科目は、今年度同様課題チェックとリアクションペーパーを併用する。講義科目は単元の区切りを目安にリアクションペーパー等を活用し、学生の理解度を確認する。

２．配慮が必要な学生や基礎学力の低い学生に対して、コース内で協力して対応できるよう心がける。

３．日商PC検定３級の全員合格と２級合格者を出すこと、登録販売者試験の合格者が出るよう、学生サポートに尽力する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．ビジネス文書作成１ではタッチタイピングの練習記録カードを配布し、学生の進度をチェックする。講義科目ではリアクションペーパーやポイントのまとめプリントを配布して、学生の理解度を確認する。

２．配慮が必要な学生や基礎学力の低い学生に対して、毎回の授業の中で可能な限り把握し、隔週のコース会議で教員間での情報共有を図る。

３．日商PC検定は２か月に１度の頻度で対策講座と検定を実施し、受験機会を増やす。登録販売者試験は過去問の分析を行った結果を学生にフィードバックし、合格を目指して指導する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
タッチタイピングの習熟度向上に関しては、ほぼ予定通りに指導することができた。演習科目の一部でリアクションペーパーを活用し、理解度の確認ができたが、講義科目については不十分な点があった。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
他者とのコミュニケーションを苦手とする学生については、チューターとして二者面談の際は当然として、日常的に観察し、声掛けをするよう心掛けた。就職活動においても各学生の状況に応じて、その都度必要と思われる指導を行うことができた。

３．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
日商PC検定は、予定通り２か月に１度程度の頻度で対策講座と検定の実施を連絡し、受験を促した。しかし、学生たちは様々な理由を挙げて受験を先延ばしにする傾向が見受けられ、結局は今年度最初の検定は９月となり、２月中に５回実施するなど学期末に受験希望者が集中する結果となった。幸い受験者は全員合格し、今年度はMOSの合格者も２名出たが、随時試験でいつでも受けられる環境によって、学生たちが受験を先延ばしにしていると感じている。登録販売者試験は今年度も合格者が出なかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．講義・演習などに関わらず、全ての授業で必要に応じてリアクションペーパー等を活用し、学生の理解度を把握するよう心掛け、より効果的な授業を目指す。

２．配慮が必要な学生に対する観察を怠らず、隔週のコース会議で積極的に情報共有を図る。

３．日商PC検定とMOS試験については毎月の検定実施日を明示し、学生たちが受験計画を立てやすくする。登録販売者試験については合格者を出すために過去問を積極的に活用し、対策講座の充実を図る。

令和３年度　「本村　弥寿子」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　コロナウイルス感染対策を講じた授業展開を工夫しながら、学生の満足度が 80%以上になるようにする。

２．　学生対応、授業内容及び方法等、学科内の情報交換や情報共有を丁寧に行うようにする。

３．　保育者及び学生の保育力を高める保育方法や内容について考察する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　グループによる保育実践に代わり事例検討を行ったり、遠隔授業に個人でできる保育実践を取り入れたりすることで、対面授業と同等の学びが得られるようにする。

２．教員間のグループラインや臨時の学科会議を利用し、些細なことでも気軽に連絡を取り合ったり疑問や考えを出し合ったりできるようにする。

３．　降園前保育を記録したり保育者の考え等を調査したりして保育実践について分析し、保育者の援助について考察を深める。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 $\boxed{\text{S}}$・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　担当するすべての科目で 85%以上の満足度を得ることができた。オンデマンド形式や時間短縮したグループ活動などのコロナ対策を取りながらも学生にとっては「分かる」授業となっていたと思われる。授業評価アンケートの自由記述欄から、レジュメが好評であることが分かった。「分かりやすい」「振り返りやすく試験対策が容易にできた」といった内容であった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
　グループラインの利用や声かけを行い、簡単な情報共有はできていた。学科会議はおよそ１か月に１回の頻度で行うが、臨時学科会議を必要に応じて設けることで情報共有を心がけてきた。しかし、コロナウイルス感染症に係ることで時間割が急遽変更になったり急ぎの連絡を教員間で共有する時間が取れなかったりする場合も多かった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
　コロナ禍で保育現場に長時間滞在することに取り組めず記録やインタビューがなされないままとなった。しかし、県の環境教育に関する講演内容を SDGｓに絡めて行うことで、“持続可能な社会の担い手づくり”となる保育の在り方について現場の声を収集する機会が得られた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．授業内容の見直しを常に行い、学生の状況や理解力に応じた授業づくりを心がける。また、ハイブリッド授業を取り入れ、学び方についても学生の状況に応じて柔軟に対応できる力を付ける。「分かる授業「多様な授業形態」により、さらに学生の満足度を高める。

２．学科会議を月２回開催し、一層細やかな情報共有に努める

３．領域「環境」に関わる授業や講演の中で学生や現場保育者との対話を重ね、“保育における SDGｓ”について知見を広げる。

令和３年度　「中村　浩美」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．人前での笑顔を始めとする豊かな表情、意思表示・発言に勇気を持って取り組める事から歌唱や手遊びうたを活かす指導を行う。
２．学生の人前で歌う羞恥心を少しずつ緩和しながら保育現場で必要とされる歌唱を意欲的に楽しんで歌えることに重点をおく。
３．発声法や地声からファルセットへのチェンジ音域の悩みや疑問を解決できるための技術面を指導するために、学生各々の声質を早く把握して不安を軽減できるようにする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．体幹を意識した姿勢での腹筋と腰筋の使い方、口角や表情筋アップから子どもの前で歌う事、手遊び歌をリードするために、大切な笑顔が生まれ、声が出やすく明るい声になる事を毎授業で確認していく。
２．イメージ力を持って歌うために、歌詞読みと歌詞の解釈を一人ずつ発表し、楽曲を知った上で何度も繰り返し歌う。なるべく毎時間短い小節でも一人で歌う経験を積みながら羞恥心を軽減させる。
３．声にも当然個性があり、その個性を自信がないために否定せず、受け入れて伸びる可能性を持っている事、勇気の積み重ねが実力・自信に繋がる事を気付かせる。特に自分の歌声を否定する学生への指導には、班分けのグループ内で少しでも改善できたことへの喜びを認め合い励まし合う形を作る。特にチェンジの声がそれぞれ違うため、一音一音丁寧に直接体に触れながらの指導を強化する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
コロナ渦中でマスクやマウスシールドを使用しての歌唱指導は昨年よりも難しかった。特に１年生は初めての声楽指導であるため、口角アップや表情筋アップからの笑顔がどのような意味を成しているのか理解していても、実践する事に抵抗があり継続する集中力が乏しかった。
２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
楽曲がどんな意味をもたらすのか、どんなイメージが湧いてくるかをみんなや一人ずつでも絵本の読み聞かせのように読んでみる事で、それまで考えた事もなかった楽曲の歌詞の意味や思いが理解でき、イメージも浮かび声の出し方歌い方に大きな変化が表れ。音楽として通用する歌唱になり、歌った学生自身も納得し、歌うことへの喜びを増せる取り組みとなった。
３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
みんなと一緒に歌う事で、かえって自身の声や音程に問題があるのかと言う不安でしっかりと声を出せなかったようだが、一人ずつ距離を置いてマスクを外して歌わせると、羞恥心は少しあっても楽しく歌声や声量にも想像を超えた良い印象があった。さらに良くなるための改善方法を指導してみんなで認め合う事は自信に繋がったと考えられる。手遊び歌も同様であった。授業外で個別にレッスンを希望する学生もおり、個人に見合った指導によって改善できた事も多く、学生自身も改善できつつある事、改善できた事に満足していた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．コロナ渦中での声楽授業のため、感染対策に一層の気を配ばりながら行う。新１年生は初めての声楽授業となるため、初めて知る発声方法・表情・筋肉の使い方を実践しながら理解し、子どもの歌に興味を持って積極的に歌えるよう、工夫ある授業にする。
２．歌詞が持つ大きな意味に音楽が乗っていく事。それによってイメージ力が湧いて心を育む音楽になる事がおもしろいと思える授業内容を研究する。また、イメージ力ある歌唱表現・手遊び表現を指導する。
３．自身のどんな声でも素晴らしい個性である事を受け入れさせ、改善方法の指導は勇気をもって受けられる事、改善後の声・歌唱・表情との違いを理解させながら、成長できるための継続できる授業や、授業外でのレッスン方法をさらに強化する。

令和３年度　「太田　美代」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．（授業）栄養士実力認定試験における「給食経営管理論」での正答率６５％以上を目指す。
２．（学務）栄養士コースにおける新たな取組として教育サポートシステムの構築を図り、食を通して社会に貢献し、自らも夢の実現に向けて前向きに努力することのできる学生を育てる。（就職率並びに学生アンケート等を指標とする）
３．（研究）「幼児の食事マナー」をテーマに幼稚園と短大が連携した食の分野での子育て支援の方策を探る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．今年度の２年生は、理系の科目を苦手としており、ほとんどの学生が適性検査における基礎能力が３以下であるため、いかにして学力の向上を図るかが課題である。可能な限り個別対応を行い、学生が自ら学ぶ姿勢をもつよう支援するとともに機会をとらえて栄養士実力認定試験の過去問にあたらせ、理解不十分な分野を把握して指導を行う。１年生に対しても教材研究を丁寧に行い、授業のポイントを復習できるワークシートを作成して授業にあたる。
２．TS、PS の円滑な運用ができる体制を整え、学生の主体的な学びを支援するとともに、学生の活躍の場を設けて自己肯定感を高め、本学での学びが将来に活きると考える学生９０％以上を目指す。
３．ゼミナール活動で附属幼稚園における箸の持ち方を中心とした食事マナーに関する実態調査を行い、直接的な指導並びに食育だよりによる保護者への意識啓発を実施して正しい箸の持ち方ができる幼児を増やす。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[Ｃ]・Ｄ 」
栄養士実力認定試験における「給食経営管理論」での正答率は５６．５％で目標に８．５ポイント足りなかった。力を入れて指導した衛生管理に関する設問は、今年度総合力問題に含まれており、こちらは８８．２％の正答率だった。
２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
就職率は１００％。４年制大学へも３名が編入することができた。卒業時アンケートでは、８６．４％の学生が本学での学びを肯定的にとらえている。また、本学で学んだことが将来に活きると考える学生も８６．４％で、ほぼ目標に近かった。教育サポートスタッフ制度は、改善の余地はあるものの、受講者の評価は高く、TA、PS 自身も指導力やコミュニケーション能力が向上したと自己評価していた。
３．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、スケジュールの変更が必要だったが、附属幼稚園の先生方の御協力により、学生による幼児への調査や直接指導を実施することができた。正しい持ち方で箸を持てる園児は、指導後、年長児で９０％、年中児で７５％に増えた。年少児はスプーンで調べたが、これも８５％。ただし、指導直後の学生に目視による調査のため、正しい食習慣の定着のためには、継続した指導を要する。食育だよりも２回発行することができた。
また、これとは別に学生の昼食調査と生活時間調査の分析を行った。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　栄養士実力認定試験により自分の専門的な力を客観的に評価することの意味をよく理解させることが必要である。評価指標としている「給食経営管理論」の成績は、新２年生の評価が前年度に比べ平均点で０．７ポイント下回っており、さらにＣ評価者が５名から９名に増えている。栄養士スキルアップ特講だけでは準備が間に合わない可能性があるため、ゼミナールの時間などを活用して補習を行う。
新１年生に対しても、基本方針は今年度の授業方針を基盤とし、確認テストやクイズを活用して知識の定着を図る。
２．学力向上対策のためにも教育サポートスタッフ制度の充実は重要である。次年度は、TA だけでなく PS も教員の推薦により人選を行い、学習会は原則全員参加として運用する。２年生に対してはゼミナールの時間も活用し、習得度別グループ編成で指導を行う。
３．学生の昼食調査の結果は、栄養教育指導論実習の授業に生かすこともできるため、次年度は生活時間調査と同時に昼食調査も実施する。可能であれば調査対象を広げたい。

令和３年度　「島田　幸一郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：准教授
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　コロナ感染対策に留意するとともに、アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）の要素を取り入れた学習活動（課題提起のプリント学習等）に取り組む ２．　教育実習（事前・事後指導を含む）を通して、特別な教育的ニーズのある子どもの理解と関わり方を具体的に指導する。 ３．　保育現場における「合理的配慮」について、研究を進め論文にまとめる。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　前時の課題について学生に記述・提出させたプリントをクラス毎に２名発表させる。課題の要点を具体的に説明し理解を深めさせる。 ２．　映像を活用することで障がい等の理解と具体的な関わり方を示すとともに、事後のアンケート調査で自身の課題を検証させる。 ３．　幼稚園・保育所に在園する３歳以上の子どもについて、過去の研究成果を踏まえて論文にまとめる。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　コロナ感染防止により個人発表は控え授業者が発表した。徐々に内容が充実してきた。 ２．　映像の効果もあり、実習において積極的に関わりができたようである。 ３．　論文にまとめることはできなかったが、県保育協会主催の講演会で研究の成果を還元することができた。	

令和３年度　「古賀　克彦」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース　　職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 栄養士養成施設協会が実施する栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上【授業】。
2. 学外実習の円滑な運営（実習先評価がＡ評価の学生が 80%以上）【学務】
3. 紀要の執筆（二報以上）【研究】

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上【授業】
   - 毎回授業前に栄養士実力認定試験問題出題し解説を実施。また、授業において頻出分野の解説強化
   - 定期試験に栄養士実力認定試験を一部採用
   - スキルアップ特講の内容充実
2. 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱにおいて、実習先の評価向上【学務】
   - 学外実習総合演習での指導強化
   - 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱの直前指導および事後指導強化
3. 紀要執筆【研究】
   - 計画的に準備を行い執筆する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

令和３年度栄養士実力認定試験の結果は昨年度より低下し、臨床栄養学は短大平均と同じ点数、栄養指導論は短大平均を上回る結果となった。成績が昨年度より向上した理由として普段の授業や定期試験において栄養士実力認定試験に取り組む機会を増やし、多くの問題を溶かしたためだと思われる。次年度は全国平均を超える成績を目指し、今年度の対策に加え、栄養士実力認定試験対策講座の内容をさらに充実させていきたい。

科目名	全国平均(正答率)	短大平均(正答率)	本学(正答率)
臨床栄養学（6 点満点）	3.6 点（53.3%）	3.1 点（45.0%）	3.4 点（45.0%）
栄養指導論（6 点満点）	4.2 点（78.7%）	4.1 点（58.3%）	3.9 点（63.3%）
全体（85 点満点）	50.9 点（55.5%）	47.0 点（49.6%）	40.2 点（49.8%）

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

今年度の学外実習Ⅰ及び学外実習Ⅱの評価は以下のとおりとなった。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響の為学外実習Ⅰは学内で実施した為、A 評価の割合が高くなった。学外で実習を行った学外実習Ⅱでは昨年度より S 評価の割合が更に増加した。来年度も B･C 評価の学生を減らし、S 評価、A 評価を増やせるように、評価が低くなりそうなグループの指導にも注力していきたい。

	S	A	B	C
学外実習総合演習	7 名(31.82%)	9 名(40.91%)	4 名(18.18%)	2 名(9.09%)
学外実習Ⅰ	4 名(18.18%)	8 名(36.36%)	7 名(31.82%)	3 名(13.64%)
学外実習Ⅱ	12 名(54.55%)	5 名(22.73%)	4 名(18.18%)	1 名(4.55%)

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

今年度の長崎食育学は前任者からの引継ぎが無い状況での実施であったため、授業の円滑な運営と、授業評価の向上を目標として授業を実施した。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、一部内容を変更しての実施であったが、各外部講師の講義･実習も、学内講師の講義実習も問題なく実施することが出来た。。学生の授業内容の評価に関しては、十分に適当であった 45.8%、適当であったが 37.5 であり問題は少なかったと思われた。また、満足度(総合評価)も十分に満足できたが 54.2%、満足できたが 33.3%であり多くの学生に満足してもらえる結果となった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 栄養士実力認定試験において令和４年度は担当科目の得点を全国平均上回るために、授業内容の見直しを行うと同時に、教えている内容の取捨選択を行い、重要な部分は確実に修得させていきたい。また過去問を用いた試験対策に合わせて、授業内容の理解度を上げていきたい。
2. 学外実習に関しては令和４年度も学外実習Ⅰは学内で実施予定であるので、評価方法が適正になるように見直していきたい。また学外実習Ⅱでは今年度同様にＳ・Ａ評価が増加するように学生にはなぜ学外実習を行うのか理由や目的納得するまで説明していきたい。また、評価が低くなりそうなグループの学生の成績向上の為、個々の特性に応じた指導を行っていきたい。
3. 令和４年度の長崎食育学も新型コロナウイルス感染症流行の実施になるため、感染予防に配慮し学内外講師の授業を実施していきたい。また学生の満足度向上の為にも、講義内容は常に見直し満足度の向上を図っていきたい。

令和３年度　「荒木　正平」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．担当授業の内容充実と、学習成果の向上（評価アンケート 4.0 以上をめざす）

２．　施設実習に関する学内外の連携体制の確認と、学生指導の充実（実習先ごとに異なる仔細な対応に関する共通理解をよりスムーズにするための支援方法の対応）。

３．「地域連携・子育て支援センター」「キャリア支援」における業務の充実化に向けた体制の整備

４．学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う（論文掲載、または学会での発表）

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．講義形式の科目では、教科書を中心に知識の定着を図った。あわせて、学生が興味を持って取り組めるよう保育現場での支援を具体的に想定した資料の配付のほか、DVD などの教材も活用することができた。演習系の授業では、学生がより能動的に考えるためにグループ演習を取り入れたが、コロナまん延防止措置に伴う授業形態の調整を余儀なくされたため、レポート課題を活用して授業をすすめた。
２．担当教職員と連携し、協力施設との情報共有を適切に実施した。個別対応が必要な学生については、特に支援を強化した。新型コロナへの対応として、実習施設との連携や情報共有と調整を迅速に実施した。
３．センター業務各担当を中心に連携を図って情報共有をスムーズに行ったほか、新たな試みやコロナ対応に関する調整なども問題なく実施できた。キャリア支援についても、例年と同じく各教職員と連携して実施した。
４．「特別な支援が必要な幼児の教育・保育」に関する研究については、新型コロナ対応のため聞き取り調査の中断が余儀なくされ、予定していた紀要論文の投稿が不可能となった。関連テーマでは、雑誌論文として発表することができた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　コロナ禍が続いたものの、遠隔授業の実施など、状況に応じて対応しつつ、本年度も個人演習形式での実践を行った。まん延防止対応のため中止を余儀なくされたグループ演習もあったが、テーマを設定してのレポート学習により、学生の意欲を引き出す取り組みが実施出来た。
２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　学外協力施設との調整に本年度も非常に苦慮したが、学内での情報共有・連携を意識して取り組み、最終的に施設実習希望のほとんどの学生に、年度内での学外実習機会を提供できた。学内授業と実習の連動性を意識づけを引き続き行うことで、ほとんどの学生が充実した実習を行えられた様子である。
３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　センター業務各担当教職員間で情報共有体制の構築を進めることができた。キャリア支援との横断的業務として、私立幼稚園連合会と連携しての県内就職に関する事業については、まん延防止対応のため１回のみの実施となったが、参加学生は多くの学びが得られたようであった。
４．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
　前述の通り、「特別な支援が必要な幼児の教育・保育」に関する研究は、コロナ対応のため聞き取り調査の中断により、予定論文の執筆が保留となった。一方、別テーマでの雑誌論文については無事掲載に至った。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．担当授業の内容充実と、学習成果の向上。

２．新たに担当する「学生相談室」業務体制の確立と、「キャリア支援」における業務の充実化に向けた体制の整備。

３．学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う（論文掲載、または学会での発表）

令和３年度　「福井　謙一郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．個人研究の充実を図る（保育者養成課程に関する研究） ２．遠隔授業の方法を確立させる。 ３．学生へのフィードバックを確立させる。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　博士課程に在籍しつつ、研究の充実を図っている ２．　YouTube や Zoom 等を用いた授業展開を行っている ３．リモート並びに対面授業において、学生のレポートを取り上げつつ、疑問を解消し、また授業への意見を取り入れつつ改善に努めている。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 今年度は保護者支援に関する展望論文を長崎女子短大紀要にて発表した。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 YouTube 上にてオンデマンドの授業を行い、zoom や webex にて外部での研修を行った。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 毎授業ごとに学生の提出レポートを振り返り、学生が抱く疑問を解消した。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．保護者支援ならびに保育者養成に関する研究を行う。 ２．引き続きオンラインを通した授業改善に取り組む。	

令和３年度　「江頭　万里子」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　授業：学生の授業満足度を上げる。
２．　研究：秘書検定の学習意欲についての研究を行う。
３．　学生支援：学生への声掛けの回数を増やし、就職活動が遅れないように支援する。
４．　学務：主体的に委員会活動を行う。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　マナー学の授業資料を見直し、学生が考え、発表する時間を増やす。併せて、リアクションペーパーに書かれた質問には、必ず、次の授業時に答える。

２．　自己調整学習法に加えて、授業内外で学生への声掛けを行い、声掛けと学習意欲との関係を検証する。

３．　ゼミナールの時間に毎回、就活に関する声掛けを行い、進捗状況を確認し、相談しやすい環境を作る。

４．　委員会活動には、全て参加する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　1Ｓ（前期）のマナー学の授業満足度の平均は、5 点満点中、昨年と変わらず 4.0、1Ｙ（後期）のマナー学の満足度は、4.2 で前年度の 3.9 から 0.3 ポイント上がった。資料の見直しに加え、リアクションペーパーに書かれた質問に対する回答や、提出された課題の間違った解答へのコメントは遠隔授業時にも必ず次の授業で伝え、授業内容の定着を図ったためか、1Ｙの満足度は上がり４点代となった。また、教員の教え方も、前年と比べ1Ｓが4.0から4.1へ、1Ｙが3.9から4.2へ上がった。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　教員の声掛けで学習意欲が上がったか尋ねた結果は、5点満点で3.8と余り高くなかったが、調査の結果、79.2%の学生が教員の声掛けで学習意欲が上がった瞬間があったことが分かった。秘書検定の学習意欲に教員の声掛けが効果的であることが示唆されたので、今後は声掛けのタイミングや声掛けの回数を増やすことなどを検討していきたい。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　履歴書作成の相談を受けたり、就職先が決まるまでゼミナールの時間に毎回声掛けを行ったりした結果、ゼミ生の就職希望者全員が内定を得ることができ、進学希望者も進学先に合格することができた。

４．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
　１回を除き全て参加したが、主体的に参加することはできなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　授業：授業内容の定着と十分な演習の時間を確保するために反転授業を行う。
２．　研究：反転授業を行い、その結果を検証する。
３．　学生支援：学生への声掛けの回数を増やし、就職活動が遅れないように支援する。
４．　学務：積極的に学務に取り組む

令和３年度　「南條　恵」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．担当科目において授業の方法、内容についての研究、検討をおこない、学生の理解、知識習得の向上をはかる。 ２．オンライン配信における遠隔授業の方法を習得し、学生がわかりやすい遠隔授業の展開を目指す。 ３．寮務委員会において適切な学生寮の管理・運営についての理解を深める。 ４．博士論文ならびに個人研究をすすめる。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
２．リアクションペーパー等を活用しながら学生の習熟度をはかりつつ、授業内容のねらいへの到達、理解の促進をすすめていく。 ３．YouTube を活用した遠隔授業の中で、わかりやすい授業の配信に努める。 ３．寮務委員会の各教職員の方と情報を共有しながら、業務を適切に行う。 ４．博士課程における研究会へ参加する。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」 授業の進み具合と学生の理解において、若干乖離があったように思われる。 ２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 わかりやすいスライド作成と音声による解説で、学生の理解も良かったように思われる。 ３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学生の悩み事やトラブル解消に向けて迅速に対応し、学生の生活しやすさについて支援することができた。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１.学生の理解度を細かにチェックしながら、授業の進め方についてもう少しゆっくりと丁寧さを心がける。 ２.わかりやすいスライド作成について、今後とも改善に努める。 ３.今後も学生に寄り添った支援に努める。	

令和３年度　「船勢　肇」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：助教
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．対面の授業を中心としつつ、アクティブラーニングの形態をより模索する。就職後の評価においても、学生の文章力が指摘されているので、学生の文章力向上に努める。 ２．学生自治会活動を通じて、コロナ対策を含めて学生が主体性を養える機会となるよう適切に関わる。 ３．終了した科研の成果は岩波書店と出版の交渉中であるため、審査を通過できるよう努める。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．よりその意義を丁寧に説明し、丁寧な添削をおこない、学生の意識が向上するように取り組む。 ２．自治会役員に小まめな報連相を求め、進捗状況を把握しながら、適切に関わる。 ３．原稿の提出に少しでも時間を割くことができるよう模索する。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」 コロナの影響もあり、交流会は簡略化せざるをえなかった。文章力については、特にメールの体裁について大きな成果がみられた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」 主体性について多くの批判を受けた。報連相についても問題があった。次年度の委員には早くから意識して対応している。 ３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 岩波書店より刊行された。古典的な主題について基本文献刊行の一角を担うことができた。しかし、もはや二度とないであろう執筆の機会であったにもかかわらず、他の業務との時間調整が難しく、ページ数は少なくなってしまった。希有の機会であることを思えば、この点が残念でならない。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　引き続き、学生の意欲を引き出す工夫を重ねる。 ２．　他の学生支援委員と連携しながら、主体性を意識しつつ関わっていく。 ３．　大学教員の責務の１つとして、人類社会を眺望しながら研究課題に取り組むということがある。あらためて自身の論点を整理しながら、研究を進める。	

令和３年度　「桑原　倫子」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース	職名：助教

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．授業について

今年度に引き続き『子どもの食と栄養』では、分野ごとの授業スピードやボリュームの調整、コロナ禍でも行える実習内容を検討し、授業評価アンケート項目『この授業に満足できたか』では『満足できた』を 80%以上にする。

２．研究活動について

夏前までに論文執筆のためのデータを収集し、紀要論文にまとめる。

３．学務について

公開講座や料理教室に加え、卓袱料理試食会についてもその内容をより洗練されたものにし、栄養士コースの魅力を広報宣伝する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　授業について

学生にとって難易度が高いと思われる分野の回の授業では、スライドや写真・動画等を多く使用し、より印象に残りやすい内容にし、加えて、練習問題への取り組みと解説も複数回行い、知識の定着を図る。調理実習においては、学生が調理室内で無駄なく素早く動けるよう、事前説明を詳細に行う。

２．　研究活動について

夏前までに、論文執筆のための学生のデータをとる。

３．　学務について

公開講座等で作る、魅力的なメニュー決定のヒントになるように、文献やインターネットでの情報収集を積極的に行い、最新で最適な情報を逃さないようにする。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」

授業スライドや配布資料はイラストや表など増やし、視覚的印象が残りやすくなるよう改良した。また、授業内容を深められるような動画の視聴機会も増やし、知識の定着を図った。後期の調理学実習Ⅱにおいては、新型コロナウイルス感染を懸念し、必要最低限の基礎的調理技術習得を目標とした授業を行った。そのため、より深い内容の授業を望んでいた生徒には物足りなく感じたと考えられる。授業評価アンケート『授業の内容とレベル』項目は、昨年度『十分適当であった』77.3%、『ほぼ適当であった』13.6%に対し、今年度『十分適当であった』34.8%、『ほぼ適当であった』39.1%と、『十分適当であった』が 42.5P も減少し大きな課題となった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」

コロナ禍のため、長崎県立大学の先生や学生を招いての、本学でのデータ取得は行えなかった。そのため長崎県立大学で取得したデータのみ用い、解析・分析を行った。

３．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

文献やインターネットでの情報収集は、定期的に行った。料理レッスンでは定番料理に工夫を加えた、独自の料理レシピで実習を行えた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　授業について

講義においては、一部配布資料やスライドを、穴埋め形式やワークシート形式などに改良し、より理解度の高まるものにする。実習においては、配布資料(レシピ)を書き込み形式のものに変更する。また、料理や食材、調理法などについての資料部分も増やし、中身を充実させる。

２．　研究活動について

次年度も長崎県立大学でデータを取得し、今年度分と合わせて再び解析・分析し、まとめる。

３．学務について

料理レッスンや公開講座などで自分の強みを生かし、本学の魅力を外部に発信する。

令和３年度　「桑原　真美」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース	職名：助教

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　講義科目の授業評価における全体的な満足度について、平均 4.5 以上を目指す。

２．　栄養士実力認定試験担当として、コースで掲げた目標である「短期大学平均を上回る者 80 %以上、A 判定 60 %以上」の達成へ向けて対策の強化を図る。

３．　紀要を最低１本執筆する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　担当科目の中でも学生の理解度が 3.9 と低い栄養学Ｉおよび食品衛生学について改善を図る。この 2 つの科目については、学生に練習問題を多く解かせて自分の理解度を把握させることで効率のよい学習方法を支援する。また、食品衛生学はパワーポイントスライドによる授業に変更することで学生がノートを取ることだけに集中しないよう配慮する。

２．　栄養士実力認定試験対策講座の実施内容の見直し及び栄養士コース学習会を利用した対策強化を行う。

３．本年度から新設した教育サポートスタッフの運営について評価を行い、実施報告としてまとめる。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[Ｃ]・Ｄ 」

講義科目の授業評価における全体的な満足度の評価は平均 4.12 であり、目標の 4.5 には及ばなかった。満足度において最もポイントの低かった科目はビジネス医療秘書コースの公衆衛生学であった(3.9)。栄養士コースと合同で開講していたが、栄養士コースの満足度は 4.2 であった。その要因として、ビジネス医療秘書コースの学生の理解度が 3.7 と他の科目に比べて大幅に低いことが挙げられる。昨年度、学生の理解度の評価が低かった栄養学Ｉおよび食品衛生学については今年度の理解度は共に 4.0 であった。昨年度と比較して 0.1 ポイント上昇したが大きく改善することはなかった。食品衛生学は今年度からパワーポイントスライドを使用した授業に変更したが、全体的なレベルと教員の教え方、全体的な満足度の評価がやや上昇し、一定の効果があったことが伺えた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[Ｃ]・Ｄ 」

栄養士実力試験は、短期大学平均を上回った者が 45.5%、A 認定が 46.5%であり、目標達成には程遠い結果となった。対策講座に関しては全員受講していたが、意欲のない学生がやや多くみられた。学習会については、2 年生の参加はほぼみられなかった。受験の意義や目的を学生には伝えているものの、自分のこととして捉えられない学生が多い印象であった。

3. 自己評価「 [Ｓ]・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

本年度は教育サポートスタッフの１つであるティーチングアシスタントの評価と、本学栄養士コースの学生の SDGs に対する認知度についての 2 本の紀要を執筆することができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　今年度の目標には大幅に届かない結果となったため、更なる授業改善が必要である。授業内容のレベルについてはこれ以上下げることが難しいため、理解度や意欲の評価を上昇させることで、全体的な満足度の上昇へ繋げていきたい。

２．　栄養士実力認定試験に関しては、受験の意義・目的を理解させるとともに、対策の方法を変更する。
これまでの受験対策は後期から本格的に行ってきたが、前期から実施することを検討したい。

３．　次年度は今年度の紀要をもとにさらに研究を発展させていきたい。

令和３年度　「山中　慶子」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科	職名：助教

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　授業　前年の授業内容を精査し、学生が保育の現場で活用できる知識、技能の習得を目指す。
　　満足度８割以上を目指す。
２．　学務　高校ガイダンスやオープンキャンパス・公開授業などを通して、対象に合わせた造形活動を企画し実施する。
３．　研究　教科横断的な領域表現の授業について研究を行い論文にまとめる。
　　また、保育者の造形に関する意識調査を行う。
４．　教育活動　　幼児対象の造形活動を積極的に企画し、幼児の造形指導についての幅を広げる。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．子どもへの声掛けの仕方や、導入、活動の注意点など具体的な事例を示し、分かりやすい授業を行う。
　個々の製作の進行状況を把握し、授業のペースを調整しながら進める。

２．受講対象の興味関心や、活動時間に合わせた活動を企画し、アンケートにより成果を検証する。
　多種多様な対象に対応できるよう製作のレパートリーを増やしておく。

３．音楽表現と造形表現の関係について研究し、音楽教諭とともに効果的な授業研究を行う。
　現場の保育者へのアンケート調査、インタビュー調査を行い、結果をまとめ考察する。

４．幼児の造形活動について具体的な活動計画を立て、実施する。（半期に１度）

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　前年の授業内容を改善し、効果的な演習ができた。前期授業満足度８割を超えていた。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　公開講座・オープンキャンパスなどで造形の体験授業を実施し、参加者アンケートでは高評価であった。

３．自己評価「 $\boxed{\text{S}}$・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　基礎造形学会 030 作品集への掲載、紀要論文２．５本を執筆した。

４．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
　新型コロナウイルスの感染拡大により、幼児対象の活動を立案することが困難であった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 全体の思考力・表現力の向上のために、グループワークを積極的に取り入れていきたい。また、次回の授業内容を事前に伝えることで、学生がイメージをもって授業に臨めるよう工夫していきたい。

2. 幼児、小学生、高校生、大人など対象と目的を考えた造形活動について自身のレパートリーを増やす。

3. 修士論文を７月までに執筆する。造形活動における実習課題についても研究を進める。

4. コロナ感染の状況を見ながら、幼児の造形活動が実施できるよう準備を進める。

令和３年度　「髙橋　秀樹」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：助教

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　幼児の運動遊びの指導の計画、実践、評価の方法について指導し、保育学生が指導を行える力を身に付けられるよう学びの環境を整える。

２．　スポーツフェスタを中心とした学生委員会の活動を学生が主体的に大学生活をおくれるよう援助を行う。また地域連携・子育て支援センターの活動とし、地域への支援活動回数が増えるよう検討する。

３．子どもの発達援助に貢献できるよう研究の実施を検討する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　運動遊び指導計画の立て方、発達段階に応じた表現遊び方法、運動遊びの指導に必要な技能を身に着けられるよう指導を行い、各回の授業においてフィードバックシートを用い、理解の確認を行う。

２．　スポーツフェスタを中心とした学生委員会における資料作成の援助・確認・助言を行い、学生が主体的かつ適切に活動が行えるよう援助・指導する。地域連携・子育て支援センターの活動とし、地域への支援活動の立案・実施を行う。

３．子どもの発達援助に貢献できるよう研究計画を立て、研究の実施を行う。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
　新型コロナウイルスの影響により、対面授業の一部を課題授業としたため、対面における課題発表やグループディスカッションの取り組みが実施できなかった。実技・演習における技能試験においては、感染対策を行ったうえで、規模を縮小させ実施した。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　新型コロナウイルスと共に生きる社会の中、学生が主体的にこの社会の状況に適応した中で行う自治会活動（スポーツフェスタの開催）の意味と意義を考えた上で、どのような対策をし、実施することが出来るか考慮し、スポーツフェスタの実施が出来た。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　American Journal of Dance Theray (米国)と Body, Movement & Dance in Psychotherapy (英国) への各一本ずつ（計二本）の知的能力障害を伴う児・者へのダンス・運動療法の効果検討に関する論文を投稿した。内一論文は条件付き採択論文となっている。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．今年度の目標は新型コロナウイルスの影響もあり、一部達成できていないため、次年度は達成できるよう授業構成を再検討する。

２．社会情勢の難しい中、本年度学生が行った自治会活動の反省を踏まえ、次年度の取り組み方を再検討する。

３．発達支援が必要な児・者に対する実践研究を行うと共に現場に還元できる研究活動を行っていく。

令和３年度　「守山　優美」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　実習助手間や教員との情報共有を密に行う（報告・連絡・相談の徹底）

２．　学生のサポートを十分に行う（課題提出期限の声掛け、相談員としての業務等）

３．　料理レッスンの開催に際し魅力的なイベントになるようサポートする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　気になる学生についてはコース会議や必要に応じて随時情報共有を行う。

２．　期限内の提出ができていない学生には声掛けを行い、意識改善を促す。

３．　Instagram の活用やコースの学生への呼びかけを行い、参加者増加に努める。
料理レッスンでは参加者の満足度が向上するよう、サポートに努める。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 $\boxed{\text{S}}$・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
実習助手間や教員との情報共有はコース会議内および適時意識しながら密に行うことができた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
２年生に関しては前年度密に声掛けを行った成果もあり、ほとんどの学生が提出できていた。
本年度の１年生に関しては、学業への意欲や提出物への意識がとても低い学生が多くみられた。学生の主体性を大切にしていたが、期限までに提出ができない学生が多数見られたため個別に声掛けを行ったり、授業の際の伝達等も適宜行ったりしたが意識の改善は見られなかった。サポート全般を担うにあたり、学生の自主性を尊重したいところだが、現在の学生の状況を見るに手厚いサポートが必要と思われる。本コースは学生数が少ないこともあり密に声掛けやサポートを行えているにも関わらず意識改善が見られないため、どのようにサポートを行っていくべきか課題も残る結果となった。
相談員としてのサポート及び学業に関する質問等に対してはしっかり対応することができた。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
本年度もコロナ禍の状況下での開催となったが、前年度より多くの高校生が参加してくれた。
Instagram 等でも呼びかけを行い参加者増加へつながったのではないかと思う。参加者の満足度も非常に高く入学者獲得へも繋がる結果となった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．引き続き、実習助手間や教員との情報共有を密に行う（報告・連絡・相談の徹底）

２．相談員や学生の質問に対してのサポートは今年度同様引き続き行う。
学生の意識改善に関しては、個別に都度声掛けを行い根気強く対応していく。

３．各種イベント参加者増加の為、引き続き Instagram 等を活用し募集に努める。
参加者の満足度が向上し、入学者獲得へつながるよう、サポートに努める。

令和３年度　「黒田　真衣」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．調理実習の効率化

２．学生の調理技術の向上、および作業効率の向上

３．コース教員・実習助手同士でのコミュニケーションの徹底

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．①実習の流れを頭に入れ、担当教員との打ち合わせをしっかり行う。
②調理室の環境を常に整えておく。
③事前準備はゆとりをもって行う。

２．①時間内に終えることができるように学生への声掛けを行う。
②実習中は学生の様子を優先的に見て回り、進捗状況によってアドバイスを行う。

３．報告・連絡・相談の徹底

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
①昨年度の反省も踏まえながら打ち合わせを行ったため、実習はスムーズに進められた。また、示範の内容に関して、要点をまとめて簡略化することで、学生の作業時間をより長く確保することにもつながった。
②毎回の実習後に必ず調理室の整理を行うことで、常に整った状態を保つことができた。実習中の学生の作業効率も保たれたと思われる。
③事前の打ち合わせを２週間前に行うことで、特殊な食材の取り寄せや発注等に余裕ができた。購入先などをマニュアル化することにもつながったため、業務負担の軽減につながった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
①今年度の１年生に関して、例年より慣れるのに時間がかかっているようだった。実習中の作業の進め方を十分に理解してもらう必要があったため、担当教員の指導の下、実習中の学生の動きをよく見ておき、より早く順応してもらうよう、声掛けを行った。
②余裕を持った準備と示範の簡略化により、実習中に学生の様子を見て回り、アドバイスを行う時間を確保することができた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
常に情報を共有する意識を持つことができたため、滞りは少なかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．例年と同じ内容であっても、打ち合わせの時間をしっかりと確保し、実習がスムーズに進められるようにする。また、準備等をマニュアル化できないかを意識し、常に効率を重視していく。

２．学年によって順応する速度は異なるため、様子を見ながら対応できるようにする。そのため、準備などに時間をかけるのではなく、学生の指導に長い時間をかけることを意識する。

３．　常に情報共有する意識を持つ。

令和３年度　「内山　美保」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．授業がスムーズに行われるように準備を行う。

２．教員や他助手との報告・連絡・相談を密に行う。

３．「栄養士実力認定試験の短大平均を上回る者 80%以上およびＡ認定 60%以上」というコースの目標を達成できるよう、主に資料準備・分析等でサポートする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．昨年度の記録を基に、授業日から逆算し計画的に行動する。また、新しい内容の実験や昨年度から変更になった点については、記録を確実に残しておく。

２．日頃から目配りを心掛け、授業に関することや学生の様子など気になった点は報告・連絡・相談する。

３．実力認定試験前に開講される栄養士スキルアップ特講において、模擬試験準備等でサポートにあたる。また各自の得意・苦手分野を把握できるようなデータを作成する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

授業がスムーズに行われるよう、事前に担当教員との打ち合わせや実験試料・試薬の準備を計画的に行った。また今年度より、２年生の学生２名を TA（ティーチングアシスタント）として任命し、１年生の実験において学生に対する助言や実験操作の補助等を行ってもらうという新しい取り組みがスタートした。この TA２名の協力もあり、授業をスムーズに進めることができたかと思う。新しい内容の実験については予備実験を行い、確実に記録を残すことに努めた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

今年度はレポート等の提出遅れが非常に多かった。個人的な声掛けは特別行わないようにしていたが、あまりにも遅れが目立つ学生が多かったため、学生の主体性を尊重しつつもある程度の声掛けは必要なのではないかと感じた。他助手との報告・連絡・相談に関しては、昨年度から引き続き意識して行うことができた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

栄養士実力認定試験の結果、短大平均を上回る者は 45%（10 名／22 名）、Ａ認定は 32%（7 名／22 名）とどちらにおいても目標を達成することはできなかった。試験対策として 2 年後期に開講していた「栄養士スキルアップ特講」では、事前に重要な試験であると周知していたにも関わらず最終模擬試験や追再試験を欠席する者がいた。普段の学生生活を観察していても、試験対策に取り組んでいる学生はわずかしかいないように感じた。学生自ら進んで試験対策に取り組んでもらうことはとても難しいことであるように感じた。

また、担当助手としては、問題毎に正答率を算出しまとめた資料を毎試験後にコース教員へ配布した。学生個人ごとに得意・苦手分野を把握できるようなデータを作成することができなかったことは反省である。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．記録を残し次年度に活用することは重要なことである。しかし、必要以上に準備をしてしまい学生の学びを減らすことがないように、程合いを考えながらも丁寧な作業を心がけたい。

２．報告・連絡・相談は引き続き意識していきたい。また、必要であれば学生への声掛けや支援も行う。

３．正答率を掲載した資料の作成は今後も続けていきたい。次年度は、学生自身の取り組む力をどのように引き出し、継続させていくかがポイントとなると思われる。

令和３年度　「前田　功」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務局長
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　円滑な事務局運営のために各種取り組みを推進する。今年度は新型コロナ感染症対策の徹底と事務局内業務分担の見直しを再度行っていく。 ２．　教務（学務）システムの完成のため事務局職員や業者との連携を深めていく。 ３．　ＳＤ研修会の計画的な実施と事務局の業務の効率化を図っていく。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　新型コロナ感染症対策の基本として手指の消毒、検温の徹底を図る。業務分担の一環として兼務者を増やしているのでその業務の遂行状況を見極め、改善を図る。 ２．教務（学務）システム開発先との連携をより強化していくとともに、システムの完成に向けてより強く更新すべき点を更新していくように求めていく。 ３．課題解決に向けたＳＤ研修会を実施していくために、朝礼での情報交換や月に一度の事務局会の実施を行っていく。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 新型コロナ感染症対策の基本として手指の消毒、検温の徹底を図ることができた。業務分担の一環として兼務者を増やすなどスムースな業務遂行に努めることができた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 教務（学務）システム開発先との連携をより強化していくとともに、システムの完成に向けて教務課とともにより強く更新すべき点の把握に努めることができた。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 課題解決に向けたＳＤ研修会を実施していくために、朝礼での情報交換を行うことができた。月に一度の事務局会の実施については業務の都合からほとんどできなかった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　新型コロナ感染症対策を徹底していくとともに、次年度も兼務者を増やしていきながら複数の業務が担当できるような体制を構築していく方向で検討していく。 ２．　システム先との連携は時間がたつにつれて、より深まっていると思われるのでこのまま担当者を通じて連携を深めていく。 ３．　ＳＤ研修会を実施していくために事務局員たちがお互いの仕事内容を理解するとともに、担当者不在の場合のことを考えて複数の仕事が担当できるようにしていく。さらに兼務者を増やすことと自己の専門分野以外での業務の習熟を果たしていきたい。	

令和３年度　「髙井　達司」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：入試広報室長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．初めて体験する大学入学共通テスト利用選抜の業務は、要員派遣を含めその内容は多岐にわたるとともに、複雑多岐に亘ることが想像される。導入発案者でもあることからその責任は遥かに大きい。全て事故無く完遂するよう万全な準備と慎重さに努めたい。
２．プロジェクトメンバーの一員としての意識を日常より維持し続ける。前年の繰り返しではなく、新たな取組みや変革を常に意識することが、自身の役割と認識する。
３．兼務者を含めた入試広報室の業務分担を再構築することで、業務量の平準化と各職員の特性や能力を効率的に発揮させる。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．膨大な関係書類の読込みと正確な理解に努めるとともに、関係機関（大学入試センター、長崎県連絡会）や県内他大との連携を密に実施する。
２．本学の有する強みを圧倒的なものに引き上げるための施策を提案する。このための強み・弱みの洗い出しを精査していく。
３．若手職員（入試広報室）への業務指導は、本人の特性を見極めながら進めている。計画的指導を実行したい。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
要員派遣については、試験監督を務めた教員（10 名）及び監督補佐に当たった事務職（3 名）の協力により、事故無く万事業務を完遂した。然しながら大学入試センターとの事務処理は、全てが Web システム上で行われたため、その知識習熟には困難を来した。取り分け成績請求の業務は複雑さを極め、システム上における理解度を求められたので、急遽 IT 技術に明るい教務課職員の協力を得ながら対応した。このことには長崎純心大、長崎短大による指導協力を要請した。結果、充分な試行錯誤を繰り返したことで、請求事務作業についても特に問題なく順調に遂行できた。
２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
共通テスト導入を提案し実現したが、これ以外の大学改革への発案には及ばなかった。
３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
業務推進に繋がる意見を汲み上げるよう、本人のモチベーションの高揚に努めてきたが、充分ではなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．単独による業務担当は業務重要度の高さより大きなリスクを伴うため、副担当者を決め業務遂行に当たりたい。次年度の会場校は活水女子大学。試験委員の協力を仰ぐとともに、初年次の経験を活かしたい。
２．プロジェクト会議に対し、実現可能でより実質的な提案を発信する。取り分けビジネス・医療秘書コースの改革は待ったなしの状況に直面した。これに特化した実質的提言を行うこととしたい。次年度取り組む中で最も重要な項目である。
３．可能な限り、企画から運営まで委ねるイベントを策定させることで、本人の技能向上に繋げたい。

令和３年度　「原田　実輝」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：キャリア支援センター	職名：キャリア支援センター長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．引き続き新型コロナウイルス対策を徹底し、学生が安心してキャリア支援センターを利用できる環境を整備する。

２．兼務担当者や、他部署との連携を深め、業務の効率化を図る。

３．学生の知りたい情報をまとめた、見やすい資料を作成する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．こまめな換気、消毒を徹底し、学生が密にならないよう配慮する。

２．業務の分類、見直しを行い、マニュアルを作成する。

３．今まで作成していた前年度の就職状況分析や、学科・コース別求人票を、より見やすくまとめ、学生が知りたい情報を得やすいよう工夫する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
今年度はリモート授業や幼児教育学科においてカリキュラムのスリム化が行われた為、全体的なキャリア支援センター利用者や利用時間は減少傾向にあり、同じ時間帯に学生が大勢やって来るという状況は少なかった。数名のグループで入室してきた際には、意識的に換気を行い、密を避けて感覚を空けて座るように対策を徹底して行った。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
センターで行っている事務的な業務の分類、マニュアルの作成にとりかかることはできたが、完成までには至らなかった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
年度当初に学生より要望があったコース別求人先、就職先等の資料については作成したが、その後利用者が減少し要望もなかったのでそのままになってしまった。一方、個別に依頼があったケースについては情報を集め、次回訪れた時には必ず提示できるように準備した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．引き続き、コロナ対策を徹底して行うと共に、古い資料等を整理し、センター内の環境整備に努める。

２．センターの事務的な業務の分類、見直しを引き続き行い、マニュアルを作成する。
また、次年度はキャリア支援委員の一部入れ替わりがあるので、業務分担等を明確化し、就職支援体制を強化してく。

３．就職支援に対する学生の満足度が上がるよう、ガイダンス通した全体支援と、個人のニーズに合った個別支援をバランス良く行っていく。

令和３年度　「宮崎　伸一郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務主任
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．会計課業務の計画的および正確・効率的な業務遂行。 ２．事務局内情報共有。関連担当部署だけでなく、事務局全体において業務分担や連携ができるよう体制強化。 ３．修学支援等の学生支援に係る業務の理解、遂行	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．計画的かつ早期の処理。補助資料の作成・活用。 ２．連絡・報告、および協力体制の確立。 ３．昨年度より始まった修学支援制度の的確な運用ができるよう各部署との連携。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学費徴収業務以外の会計業務については滞りなく執り行われたと思う。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・B・Ｃ・Ｄ 」 毎年目標に挙げているが少しずつ改善されている箇所もあると思う。 ３．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 大まか不具合なく執り行われた。規定が昨年と変更されている部分の理解不足で混乱した部分があった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１.会計業務については特に問題はないと思うが、業務執行について補助的な資料（引継書等）の充実。 ２.必要時には、事務局会議・連絡会など行う。（全体に係る事項について、個々での連絡は無くすべき） ３.制度が始まり２年、事務局職員全員が理解し、対応ができるような体制づくりが必要。	

令和３年度　「一瀬　章子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（会計）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　監査関係資料を整える ２．　会計ソフトを活用する ３．　会計以外の個人業務の見直し	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　日々の業務理解への取組み ２．　１つのデータをもとに幅広く活用できる資料作り ３．　年々増える傾向にあるため整理する	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学費について月締めを行ったことにより納入動向等がわかりやすくなった ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・B・Ｃ・Ｄ 」 機能的でないところがあり使いづらい ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・B・Ｃ・Ｄ 」 時期的に重なることが多いため、引き継ぎ書作成にまで手が回らない	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　学費等の納入状況を作成しているが、これをもう少し機能的に使用できるよう改善する ２．　入力時数の問題解消、検索方法の幅を広げる(業者で検索等)、勉強不足もあるが伝票入力後の反映(確定)についての改善 ３．　時期的に重なることが多い会計業務や行事については何とかするが、管轄外に近い高校(寮に関する業務)を取り除き、短大業務をよりよく進めたい	

令和３年度　「森口　和美」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（教務）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．課内の連携を密にし、円滑に業務遂行を図る。コロナ感染症等の状況に応じた柔軟な対応を心がける。

２．新しい入試体制が加わる為入試管理を含む学務システムの改修・見直し

３．入試広報室の補佐が出来るよう、業務内容の把握・フォローアップ体制の構築を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．状況を見極めながら、学科・コースとの連携を図り、時間割や教室等調整する。課内の情報共有を密にする。

２．まず、募集要項作成から携わり、入試の流れを把握する。その後、募集要項に合わせ、学務システムの改修をおこなう。DKS との打ち合わせの機会を設ける。

３．業務内容・１年間の業務の流れの把握に努める。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
課内の連携については、自分が抱えている仕事については共有し、万一休んでしまってもサポートしてもらえるよう業務が滞らないよう努めた。コロナ感染対策として、特別時間割の編成・調整等行った。科目によっては、教室が限られた場所でしか行えず、学生から不満が一部上がった。しかしながら、出来る限りの柔軟な対応はできたと考える。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
募集要項については、今年度より入試区分ごとの頁構成に変更した為、例年よりも受験生にとっても本学教職員にも見やすく、理解しやすい仕様にできたと考える。ただし、入試スケジュールの頁等はもう少し分かりやすく変更していく余地がある。学務システムについては随時 DKS と連絡を取りながら改修等行った。引き続き Web 出願に向けても検討していく必要がある。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
入試広報室の１年間の流れの把握は大体できたように思う。入試広報室の担当職員が不在の際も出来る限りフォローできるよう業務の把握にも努めた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　コロナ感染対策を講じ、時間割・教室等の調整を行い、様々な状況に応じ柔軟に対応していく。事務局内の情報を共有し、円滑に事務対応できるように心がける。

２．募集要項をより見やすく分かりやすいように見直しを行う。

３．特色化推進ＰＴ会議メンバーとして、学生募集・学生の満足度向上に繋がるよう業務を遂行したい。

令和３年度　「林田　翔太郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（教務）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．事務局内業務への理解及び他の職員への担当業務の共有（不在時でも他の職員が対応可能となるような体制作り。）。

２．教務関係の規程等の見直しを行う。

３．学務システムの更なる機能拡充を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．遂行中の業務のうち、他の職員でも対応可能なものについては、メール等で不在時の対応を連絡することで情報共有を行う。

２．現状の教育課程等を踏まえた教務関係の規程改正を目指す。

３．学務システムに対する要望書をスタッフメールで配布し、要望を募る。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・ A ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
課内の職員が対応中の業務について、メール等で課外の職員に対して情報共有を行った。おおむね年度当初の計画どおり、事務局で各自の担当課を越えた協力体制の構築につながったのではないかと考える。引き続き取り組んでいきたい。

２．自己評価「 S ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
本年度は、教務に関係する多くの規程等の改正に取り組んだ。結果として、来年度以降の教育課程に則した規程等の制定が可能となった。

３．自己評価「 S ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学期ごとに学務システムに対する要望を募った。学務システム開発に向けた学内の要望を集約するという点においては、行動計画どおりに業務を遂行できたものと考える。ただし、本年度中に寄せられた要望は１件のみであった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．Google Workspace for Education の導入による新しい教学システムの構築

２．Google Workspace for Education の活用による業務の効率化

３．教学マネジメントシステム構築に向けた学務システムの開発への着手等

令和３年度　「櫻井　縁」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（学生）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　１月頃から６月ごろにかけての業務が多くうまく手が回らないことが多々あったため、年間で業務負担割合を考える。 ２．　日々の業務の中でイレギュラーが発生した際の対応能力の向上。 ３．　国の修学支援制度・学校独自の奨学金・日本学生支援機構の奨学金の関係の理解を深める。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　年間業務表を更新することで、多忙な時期の仕事を余裕のある時期に処理する計画を立て直す。 ２．　日々の業務の細かい計画に、すこし余裕をもたせる。 ３．　各種の奨学金に関しての理解を深め、他部署との情報共有も積極的に行う（とくに授業料減免の関係）	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 これまでの経験を活かし、先に処理できる仕事に早めに取り組むことができたため、見通しを立てて業務の遂行ができた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・C・Ｄ 」 もう少し積極的にほかの仕事に関わりたかった。 ３．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 授業料減免に関しては事務作業も２年目に入り、制度への理解もだいぶ深まったように思う。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　自分で効率化したファイルを使用することで、いろいろな事務作業のスピードが上がっている。引き続き適切な事務処理ができるよう業務内容の理解を深めておきたい。また、欲しい情報にすぐにアクセスできるよう、フォルダ内の整理を行いたい。 ２．　他部署の仕事に対する気付きのアンテナを張って、いつでも手助けできるようにしておきたい。コミュニケーションを積極的にとる努力をする。 ３．　奨学金に対する個人の理解は深まっているが、一時他部署との連携でミスが出て事務処理が遅れる場面もあったので、重要な情報は周囲とも共有し、疑問点はともに確認しながら仕事を進めていきたい。	

令和３年度　「作本　栞里」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（入試広報・庶務）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　業務内容で分からないことや疑問点がある場合、必ず周囲の方に確認するか、または助言を求める。

２．　学生への信頼度を高める。

３．　ＳＮＳの目的を理解した上で、見ている方に沢山の情報を提供したい。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．気持ちに焦りを生じると周りが見えなくなることがあるため、業務の悪循環を招かないよう、日頃から計画的に業務を行い、分からないことや疑問点を早めに気付けるようにする。

２．　学生に協力してもらうことが多いため、「この人のお願いなら協力しよう」と思ってもらえるよう、日頃から学生への声掛けや接する際の態度を心掛ける。また、学生が相談しやすい雰囲気や声掛けを心掛ける。

３．　現在 SNS で入試広報室が利用しているのは、「YouTube、Instagram、LINE」であることから、それぞれの使用目的や見ている人がどういう情報が欲しい時にどの SNS を利用しているのかを理解した上で、本学の情報を提供したい。また、学生の個人情報の取り扱いには十分注意して掲載する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」
準備に時間を要する業務に関しては、昨年度よりも事前の準備を行うことが出来たが、全ての業務に対して余裕を持った行動が取れていなかった。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
昨年度よりも学生が話しやすく、肩の力を少し抜けるような雰囲気を作ることができたのではないかと思う。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
「Instagram」に関しては、学生の協力もあり、定期的に本学の情報を発信できたが、「YouTube・LINE」に関しては、情報の発信が思うように行えなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　業務引継書を参考にしながら、年間スケジュール（事前準備の開始時期）を作成し、円滑な業務遂行に努める。

２．　一部の学生（学生アンバサダー）以外にも、積極的に関わり、「話しやすい」と思ってもらえるように心掛ける。

３．　「Instagram」は、引き続き定期定な情報発信を行う。「YouTube」は、定期的な情報発信ではなく、例年 KTN で制作していただいている動画のみにする。「LINE」は、個人での定期的な情報発信が厳しい為、業者を取り入れるか検討する。

令和３年度　「伊藤　理恵子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：図書館	職名：司書
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　新型コロナウイルス感染症が終息するまで安心して図書館を利用してもらえるよう、感染予防対策を含め館内の環境整備を行う。 ２．　新型コロナウイルス感染症の影響に注視しながら、学生・教職員のニーズに合わせて臨機応変な図書館サービスの改善を行う。 ３．図書館に親しんでもらうため、マスコットキャラクター「ぶんこさん」の活用や学生による図書選定を実施する。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　可能な限りの新型コロナウイルス感染症予防対策を行うことと、閲覧室・書庫のスペース確保のため古い蔵書の整理をする。 ２．学外実習や長期休暇の際の貸出冊数を増やす、教職員の要望にそって長崎県立図書館・県内他大学の協力貸出・相互貸借システムなどを利用する。 ３．　学生による図書選定を実施する。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 一連の新型コロナウイルス感染症予防対策を行い、クラスターなどの発生もなく、図書館を利用する学生には安心して使ってもらうことができた。また、古い蔵書の整理としては、書庫の洋書３００冊・消耗図書８６冊を除籍した。（そのうち洋書３９冊は長崎県立図書館へ寄贈） ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置などによって 一部学生の学外実習期間の変動があった。貸出可能期間および貸出可能冊数を個別に設定し、臨機応変に対応できた。また、教職員の閲覧希望図書が本学未所蔵で長崎県立図書館に所蔵があるものについては、協力貸出システムを利用し 教職員に提供することができた。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 昨年度までは学生選定図書を年２回行っていたが、新型コロナウイルス感染症や書庫の収納容量のことを考え、今年度は年１回の実施にとどめた。図書館マスコットキャラクター「ぶんこさん」の活用についても、新型コロナウイルス感染症関連に伴い来館者数が大幅減になっているため、費用対効果の観点から今年度は見送った。来年度以降はまた感染者数の動向などを見ながら検討していきたい。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．引き続き 新型コロナウイルス感染症が終息するまで安心して図書館を利用してもらえるよう、感染予防対策を含め館内の環境整備を行う。 ２．引き続き 新型コロナウイルス感染症の影響に注視しながら、学生・教職員のニーズに合わせて臨機応変な図書館サービスの改善を行う。（長崎県立図書館 協力貸出、長崎市立図書館 団体貸出） ３．図書館でのアクティブラーニング（絵本の読み聞かせ実演・絵本についての勉強会・ブックトークなど）を学生の要望があれば個別に開催するなど、学生の学外実習対策・就職後の即戦力をサポートしていく。	

令和３年度

「研究活動報告書」

専任教員の研究活動状況表（職位順）								FD・SD研修会参加状況		
平成29年度（2017）～令和3年度（2021）（過去5年間）								令和2年度（2020）～令和3年度（2021）		
氏名	職位	過去5年間の研究業績				国際的活動の有無	社会的活動の有無	過去2年間のFD・SD研修会参加実績		報告書掲載ページ
		著作数	論文数	学会等発表数	その他			学内定例会（4回実施中）	学外主催（Webを含む）	
森　弘行（L）	教授	0	7	0	0	有	有	4	1	81
織田　芳人（Y）	教授	0	5	1	0	無	有	2	0	82
福井　昭史（Y）	教授	20	3	0	0	無	有	4	0	83
武藤　玲路（L）	教授	0	14	2	0	無	有	4	16	84
中澤　伸元（Y）	教授	0	1	0	2	無	有	0	0	85
松尾　公則（Y）	教授	3	10	3	0	無	有	3	0	86
濵口　なぎさ（L）	准教授	0	8	0	0	無	有	4	0	87
本村　弥寿子（Y）	准教授	0	9	2	0	無	有	4	0	88
中村　浩美（Y）	准教授	0	6	1	25	無	有	3	0	89
太田　美代（S）	准教授	0	5	0	0	無	有	4	0	90
島田　幸一郎（Y）	准教授	0	3	0	0	無	有	0	0	91
古賀　克彦（S）	講師	0	6	0	0	無	有	4	0	92
荒木　正平（Y）	講師	0	6	4	3	無	有	4	0	93
福井　謙一郎（Y）	講師	0	10	3	0	無	有	4	0	94
江頭　万里子（L）	講師	0	7	0	0	無	有	4	0	95
南條　恵（Y）	講師	0	4	0	2	無	有	2	0	96
船勢　肇（Y）	助教	1	4	0	5	無	有	4	0	97
桑原　倫子（S）	助教	0	3	0	0	無	有	4	0	98
桑原　真美（S）	助教	0	6	0	0	無	無	4	0	99
山中　慶子（Y）	助教	0	6	0	1	無	有	3	0	100
髙橋　秀樹（Y）	助教	1	7	4	3	有	有	3	0	101

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース　【職名】教授　【氏名】森　弘行

【研究の題目】Fine-Gray モデルのシミュレーションプログラム開発（共同研究）

【研究の概要】

生存時間分析において競合リスクデータの解析手法である Fine-Gray モデルの問題点を分析するためのシミュレーションプログラムの開発を行っている。正確を期するため、Excel の他、SAS 言語、R 言語での開発を行っている。

【研究の題目】Impact of Workplace on the Risk of Severe COVID-19（共同研究）

【研究の概要】

新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置による地域ロックダウンは、人の移動を制限することで新型コロナウイルス感染症 2019（COVID-19）の感染を防ぐことを目的としている。しかし、これには心理的、社会的、経済的コストがかかることから、この影響を軽減する対策が必要である。これまでの疫学研究では、高リスク集団は特定されているが、閉鎖が有効な職場は特定されていない。本研究は、PCR 陽性の COVID-19 症例の正確で信頼できる追跡調査データを用い、エビデンスに基づく対策を提供するために実施されたものである。

日本では、PCR 陽性の全症例を登録し、症状が回復するか死亡するまで追跡しており、データは選択バイアスや追跡バイアスに左右されることはない。顧客との直接的な接触はウイルス接種量に影響し、それが感染時の重症化リスクに影響する可能性がある。そこで、症例の職業を主観的観察に基づく顧客との直接接触頻度（FDCE）により分類した結果、病院、学校、給食、屋外サービス、屋内オフィスの 5 つの職場が特定された。

追跡調査データから職場分類ごとに年齢、性別、家族状況、合併症を調整することで、集中治療室（ICU）入院または死亡と定義される重症化リスクを正確に推定することができた。主な結果は以下の通り：病院と学校は最もリスクが低く、食品と屋外サービスは、FDCE は高いものの、屋内のオフィスよりも安全である。無職と職業不明は、FDCE が低いにもかかわらず、最もリスクが高い。これらの結果から、ロックダウンを補完する職場特有の対策として、学校は閉鎖すべきではなく、食品・屋外サービス業は無差別な閉鎖を避けるべきであり、学生や顧客に公衆衛生ガイドラインの遵守を促す努力を強化することがより効果的であることが示唆された。これらの措置は、ロックダウンの悪影響を軽減することにもつながると期待される。

本研究は、職場と重症化との因果関係について初めて言及したものである。FDCE と公衆衛生ガイドライン（APHG）を導入し、職場の特性と COVID-19 重症化のリスクを関連付けし、ロックダウンを補完する施策の根拠とした。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】　教授　　【氏名】　織田芳人

【研究の題目】

(1) 保育で使われる漢字の学修資料の作成

(2) 保育学生に対するプログラミング教材としての知育玩具の活用

【研究の概要】

(1) 令和元年度では、「幼稚園教育要領」の全文をExcelデータ化し、計量テキスト分析ソフトを利用して、どのような語が頻出しているか、どのような語と語の組み合わせが多いか等を検討して、本学紀要にまとめた。令和2年度（昨年度）では、本学学生6名が幼稚園における20日間の実習で記録した実習日誌から「今日の課題と反省」及び「今日学んだこと・感想・反省など」の全文をExcelデータ化し、計量テキスト分析ソフトを利用して、上述と同様の検討を行って本学紀要にまとめた。

本年度は、令和元年度及び令和元年度の研究と同様、計量テキスト分析ソフトを利用して分析するため、「保育所保育指針」の全文、及び、本学学生6名が保育所における20日間の実習で記録した実習日誌から「今日の課題と反省」及び「今日学んだこと・感想・反省など」の全文をExcelデータ化した。しかし、ソフトを利用して分析するまでには至らなかったため、本学紀要に投稿できなかった。次年度以降の課題として、「保育所保育指針」の分析、及び、本学学生が保育所における20日間の実習で記録した実習日誌を、計量テキスト分析ソフトを利用して分析することとする。漢字の学修資料の作成については、「幼稚園実習」と「保育所実習」とでそれぞれ出現が予想される漢字を別々にまとめることから進めていきたい。

(2) 保育学生を対象とする知育玩具を活用したヴィジュアル・プログラミング学修に関する研究として、令和元年度で知育玩具の体験とヴィジュアル・プログラミングの体験に対するアンケート調査を行い、本学紀要にまとめた。令和2年度においても、同様のアンケート調査を行ったが、ARCSモデルに基づく分析を試みるため、質問項目の文言を一部修正してアンケート調査を実施した。本年度に、令和2年度の調査結果をまとめる予定だったが、まとめるまでに至らなかった。

また、本年度においても、同様のアンケート調査を継続する予定で準備していた。しかし、これまでの研究で利用してきたヴィジュアル・プログラミング・ツール「プログラミン」（文部科学省提供）がAdove Flash Playerのサービス終了によって利用できなくなったため、調査に利用するヴィジュアル・プログラミング・ツールを「Scratch」に変更して準備をし、後期の終盤に実施する計画だった。しかし、新型コロナウイルス感染の拡大を受けて、対面を必要とする知育玩具の体験、及び、パソコンを用いてのヴィジュアル・プログラミングの体験を実施できず、当該研究のアンケート調査を行うことができなかった。次年度以降の課題としたい。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】教授　　【氏名】福井　昭史

【研究の題目】

音楽教育の教育方法と教材の研究

【研究の概要】

音楽教育の方法と教材の研究では、ピアノ演奏の経験が無い、又は少ない学生に演奏技能を身に付けさせるための有効な指導方法の研究を、担当する授業の中で実践した。授業では能力別に編成した初心者クラスの学生を担当した。その実態は、演奏技能ばかりでなく楽譜に関する知識に乏しく、学習課題の楽曲を既製の楽譜で読譜し演奏することは全く困難であった。そこで、基礎練習曲と伴奏の簡易楽譜を作成し指導にあたった。

簡易楽譜の作成にあたっては、旋律を演奏する右手が細かい動きに対応できないことから、同音の連打は省略する、２拍、４拍を単位に旋律の骨格となる音だけにするなどで演奏を容易にした。旋律の伴奏を受け持つ左手は、主要三和音を基本とし伴奏音型をパターン化した。３つのパターンを基本とし、最も容易な三和音の連打と和音の分散型とした。一つの楽曲について、その曲想に合わせて複数の伴奏を作成し、技能の状況、学習の段階で選択し演奏することにした。

このような初心者用のテキストを活用することで、学生の負担を軽減することができ、意欲をもって学習に取り組むことができたようである。

学習の評価にあたっては、演奏表現を絶対評価するのではなく、個々の表現技能の向上を主として評価する縦断的個人内評価をとりいれた。学習の過程では進歩の状況を把握し、適切なKRを出すことで意欲を高めるよう配慮した。その結果は、学生の授業評価に表れている。

音楽教育では、技能の習得だけでなく創造性の育成が求められており、創造的な活動が注目されている。そこで学生の創造性の育成を目指し授業に創作の活動を取り入れた。

幼児教育学科の学生に対しては、保育現場でも重要な音楽活動である「わらべ歌」を取り上げ、その音組織を理解させ、その創作と表現を実践した。また、打楽器を使った合奏の創作と表現を実践した。

他の学科の学生に対しては、歌の創作を実践した。

教材の研究では、前述のピアノ初心者用のテキストを作成した。演奏が容易な子どもの歌 20 曲程と基礎練習曲集で構成した 60 頁のものであり、令和４年度からこれを活用した授業を展開する予定である。

音楽鑑賞教育に活用する楽曲の教材性の研究では、「クラリネット・ポルカ」（ポーランド民謡）「そりすべり」（アンダーソン作曲）「亡き王女のためのパヴァーヌ」（ラヴェル作曲）の３曲について、各々の楽曲の作曲家や地域、作られた時代などの楽曲の背景、楽曲の形式や演奏形態など、その特質を研究し、音楽教育雑誌の季刊「音楽鑑賞教育」に掲載した。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース　　【職名】教授　　【氏名】武藤　玲路

【研究の題目】

「長崎女子短期大学におけるアセスメントプランの構想」、長崎女子短期大学紀要、47、2022 年（投稿中）

【研究の概要】

1. 本稿の目的

武藤（2016）は、「長崎女子短期大学の自己点検・評価における学修評価システムの構築」において、独自の手法でアセスメントプランの策定に取り組んだ。しかし、評価の目的と活用方法を明確にしていなかったことと、評価の観点と尺度と基準からなるルーブリックを導入していなかったため、客観性と実用性に欠けており、教育の改善に活用するまでに至らなかった。そして、現時点においても国からの潤沢な補助金の目途はなく、教学マネジメント体制やアセスメントプラン、学修成果の評価システムが構築されていないため、学生の学修成果の到達度や学生支援の満足度を十分高めるような支援ができていない。

そこで本稿では、長崎女子短期大学のアセスメントプランを、先進校の事例を参考にして独自に考案し、オリジナルの評価システムを構築することとした。具体的には、①教学マネジメント体制の構成、②アセスメントプランの構想、③学修成果の評価基準の策定、④教学ＩＲデータの可視化と活用法、について提案することを目的とした。

これにより、学生がより客観的に学修成果をフィードバックすることができ、授業の到達目標と学習方法を明確に把握できるため、自己効力感や学習意欲の持続・促進につながると考えた。

2. 評価の方法と活用

2.1 教学マネジメント体制の構成

2.2 アセスメントプランの構想

2.3 学修成果の評価基準

2.4 教学ＩＲデータの可視化

3. 今後の課題と展望

今回、筆者が考案したアセスメントプランの構想は、まだまだ不十分ではあるが、この提案を基に、学生の学修成果を的確に捉え、教育の質の保証・向上、改革・改善に役立つことができれば幸いである。今後は、より有用性と利便性の高い評価システムの構築に取り組んでいきたいと思う。

一方、教育心理学の領域の自己調整学習理論の研究では、学修成果の規定要因として学習意欲を数多く取り扱っている。時間と労力を費やす学習者にとって、学習目的の有用性、学習方法の明確性、評価基準の明確性、評価結果の公平性、適切なフィードバックは、学生の学習意欲を高める大切な鍵であると言える。このことを踏まえて、長崎女子短大では、今後、次のような課題に取り組んでいく必要がある。

①評価基準の共通言語である学科・コース共通のルーブリックを作成し、さらに、全科目別のルーブリックを作成する。これをシラバスに掲載し、各科目の初回の授業で学生に説明することで、各自に目標を設定させて学習意欲を高めるようにする。

②学修成果などの知的な側面のルーブリックのみならず、満足度・達成感・自己効力感・自己肯定感・自信・学習意欲などの情緒的な側面のルーブリックも作成して、より客観的な比較や分析ができるようにする。

③教学ＩＲデータを多方面で活用し、学習支援と学生支援を充実させ、教育の成果を学内外に公表する。具体的には、エンロールメントマネジメント（ＥＭ）体制を確立し、ＩＲデータを二者面談・三者面談、学科・コース会議、ＦＤ・ＳＤ研修会等で有効に活用する。

④学務システムの機能性・利便性・有用性が向上するように、教職員の意見や要望を収集して開発業者に依頼する。

⑤短期大学コンソーシアム九州（ＪＣＣＫ）など、他短大と共同で実施した共通調査のデータをベンチマークとして、本学の強み・弱みを明確にし、改善のための参考資料とする。

⑥卒業生の就職先の人事担当者と定期的な合同会議を開催して、産学連携の学修成果や人物評価の評価基準を策定する。

最後に、本学は令和８（2026）年度に第四期の認証評価を受審する予定である。今後は本稿で考案を試みた資料を基に、さらにブラッシュアップした根拠資料を準備して、第四期認証評価に臨みたいと思う。

以　上

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　教授　【氏名】中澤　伸元

【研究の題目】
子供の未来をつくる保育者育成の方法
学生の個性を伸ばすための研究と個々の意識改革の実践と研究。

【研究の概要】
音楽において学生の基礎知識や基礎技術は保育者に絶対に必要条件である。後期の試験においていかに音楽の基礎が理解されてないかを知ることができた。そのことによって、学生たちは、自信がなく自己受容ができず不安になっている。ピアノの先生が指導しているだろう、ほかの先生が教えているであろう。これらはすべて教員の課題であり責任である。来年は学生の将来に責任を持ち授業において楽典の時間を増やすこととする。学生たちは、解っているはずだ！理解しているだろう！という思い込みが根本的に間違っていた。音符って何なのか？リズムって何なのか？楽譜って何なのか？音程は何のためなのか？調とは何のためにあるのか？和音って何のためにあるのか？などなどすべてのことを納得理解できるよう説明する必要があるのだ。これからは、理解できていない学生たちを生まないよう楽しむことに課題を持っていく。
そのためには、学生全員の名前をまず覚え、学生に信頼感を持ってもらうことが必要条件だと考え、去年から実行している。

なぜこの課題をするのか？
一つ一つの課題についての納得説明と、興味関心。
楽典においては、音階と音名の違い。音階とは、音名とは？音譜と休符、リズムと拍子、音程、強弱が楽語、記号、和音コード進行等を興味を持って理解する。
そのためには、授業を興味関心を持って受ける姿勢態度ができていなければならない。

他人と自分を評価しない。自分の課題と他人の課題をしっかり区別する。
思い込みを開放し、潜在意識を楽しい、やった！に本心をつなげる。

『出来る！』『勇気あるよ！』『元気あるよ！』『和気あるよ！』『根気あるよ！』『本気あるよ！』
やる気あるよ！』『その気あるよ！』のモチベーションを上げる訓練。
アファーメーションの徹底。

表現力意識改革
想像力の訓練。臨場感の感じる訓練。イメージをリアルに表現する訓練。

前回も書いたが時代に合った新しい発想力、考え方、捉え方、園児に心に残るコミュニケーション力などを求め得られる時代になっている。人間らしさを表現できる保育士育成に全力をささげたい。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】　特別専任教授　　【氏名】松尾公則

【研究の題目】

①コロナ禍での長崎特別支援学校カエルの授業の改善を図る。

②日本では対馬だけに生息するチョウセンヤマアカガエルの幼生の生育状況を調査する。

③五島列島産タゴガエルの新種記載について協力する。

【研究の概要】

①コロナ禍での長崎特別支援学校カエルの授業の改善を図る。

長崎特別支援学校のカエルの授業は昨年まで４年連続で実施している。昨年度は、新型コロナの影響で対面での実施が不可能になったため、学生たちの劇はＤＶＤに収録してモニターで見せることとなり、本物のカエルは、事前に担当の先生方に指導をしたのち、教員にお願いすることとした。今年度は、長崎特別支援学校側の強い要望により、対面で実施することになった。コロナに関しては、マスクとフェイスシールドをし、児童との間にはビニールの仕切りをおくという３重の対策を講じた。カエルの劇は学生が演じたが、本物との触れ合いは、昨年同様に担任にお願いした。カエルの授業は、令和３年７月２日（金）の 10:30～12:00 の時間帯で、小学部４年生の３名を対象に、担当教諭や保護者、マスコミなど 10 数名の見守る中で実施した。

②日本で対馬だけに生息するチョウセンヤマアカガエルの幼生の生育状況を調査する。

長崎県には 13 種のカエルが生息しており、その中のツシマカガエルとチョウセンヤマアカガエルは日本では対馬だけに分布している。対馬の２種のカエルは環境省の絶滅危惧種に指定されているが、そのランクは最も低いものである。長崎県で両生類を調べている者として、チョウセンヤマカガエルの個体数が激減していることを危惧し、卵塊数による個体数調査を行い、環境省に対してランクを上げることを提案したいと思っている。2017 年から調査を開始し、2021 年（昨年度）も２月に実施した。今年度は、冬季の卵塊調査ではなく、産卵された卵塊のふ化後の幼生の状況調査を行った。実施期間は、2021 年４月 17・18 日の二日間である。

調査結果によると、２月に調査した 14 地点のうち幼生が確認できたのは２地点に過ぎなかった。つまり、2021 年は、産卵はそれなりに行われているが、変態してカエルになれる場所は非常に少ないということになる。この結果が、2021 年だけのことなのかは今後も調査を継続する必要があるだろう。今後も、この調査結果を報告して、保全活動に役立てていきたいと思っている。

③五島列島産タゴガエルの新種記載について協力する。

タゴガエルは九州、四国、本州に広く分布する山地性のカエルである。長崎県では、県本土と五島列島、平戸に生息し、壱岐、対馬には分布していない。五島列島のタゴガエルは、県本土の個体とは鳴き声や形態、産卵時期が異なっている。2003 年から調査を開始し次のようなことが分かってきた。①県本土の産卵時期が３月なのに対し、五島列島産は 10 月と３月の複数回であること。②県本土産の鳴き声が低音で断続的であるのに対し、五島列島産では高音で連続すること。③県本土産に対し、五島列島産がやや小型であること。などである。タゴガエルの研究に関しては、北九州にあるいのちの旅博物館の学芸員である江頭幸士郎氏が第一人者である。現在の所、県本土から五島列島の各島嶼の調査がほぼ終了し、ＤＮＡ分析も終わっている。まもなく、五島列島産のタゴガエルは、新種として発表される予定であるが、最終的な詰めの調査も継続している。新種記載は、江頭氏の方で論文として行われる予定であるが、補完的な調査は、地元に住む松尾の方でも協力していきたいと思っている。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　ビジネス・医療秘書コース　【職名】　准教授　【氏名】　濵　口　なぎさ
【研究の題目】能動的学修の実践に関する研究
【研究の概要】
(1) 目的
　担当する授業において、学生が受け身ではなく能動的に参加し、学んだ知識を実践できるための教材と指導法を研究している。

(2) 方法
①「ゼミナール」では５年連続で「長崎と猫」をテーマとし、猫に関わる地域の問題を解決する方法として、調査研究した結果をリーフレットとしてまとめた。

②「登録販売者試験」受験対策講座の実施

③タッチタイピング習熟度向上のための指導法の研究

(3) 結果
①今年度のゼミナール活動では、新型コロナ対策を徹底した上で、学外者との交流を積極的に行うよう指導した。前期は電話やメールによる取材が主となったが、後期は譲渡会への参加、長崎市動物管理センターや長崎県生活衛生課への取材を行うことができた。また、完成したリーフレットを持参した際に、内容についての一定の評価を得ることができた。
　学生達は自主的に役割分担を行ってはいたが、3 名ずつの 2 グループで活動していたが、他者とのコミュニケーションを苦手とする学生が複数いたことから、活発な話し合いがなされたとは言えず、リーフレットや報告書をまとめる際に支障が出た。一昨年度からの課題としていた年度当初の自己評価は行ったが、最終回での自己評価ではすべてのゼミで共通の項目に変更となったが、中心となって活動した学生の方が自己評価を低くつける傾向が見受けられた。

②昨年度から栄養士コースの古賀先生、桑原真美先生と協力して、「登録販売者試験」受験希望者を対象とした対策講座を実施している。4 月の時点では対策講座には 1L が 14 名、2S が 2 名参加していたが、日を追うごとに参加者は減り、12 月の試験を受験したのは５名（1L3、2S2）であり、残念ながら全員不合格であった。
　今年度も導入時は試験区分ごとに講義形式で概要を解説した後、課題として模擬問題を渡し、次回答え合わせをしながら、要点を深く確認するという方法を取った。対策講座で実施した過去問による模擬試験や、学生たちの本試験の自己採点の結果などから、「主な医薬品とその作用」「薬事関係法規・制度」を中心に点数が撮れておらず、より重点的な指導が必要である。また、2S の学生は栄養士実力認定試験と実施時期が重なっていることもあり、指導時間の確保も課題である。
　次年度は、過去問を効果的に活用し、科目ごとに丁寧に理解度を確認するように工夫して学生の理解を深める方向で指導計画を立てる予定である。

③1 年次前期の「ビジネス文書作成１」で取り組んでいる、タッチタイピングの習熟度向上のための指導法に関する研究に取り組んでいる。タッチタイピングの習熟度を上げることで、短大在学中はもちろんのこと、就職後においても作業効率の向上や時短につながり、余裕をもって仕事に取り組むことが可能となり、仕事の質の向上も期待できる。学生たちが能動的にタッチタイピングの習熟度向上に取り組むように工夫した教材及び指導内容について、その効果を検証した。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】准教授　　【氏名】本村　弥寿子

【研究の題目】（１）学外実習のための事前・事後指導の見直し
（２）保育の中の SDG s

【研究の概要】

（１）　令和２年度、「保育実習生に求められる力」について保育実習評価より紐解いた。その中で本学の学生に足りていない部分が“積極性”や“文章力”であることが把握された。それで、これらの力を学生に身に付けさせたり意識させたりするために、日々の授業も工夫する必要があることを確認した。しかしながら、基礎的な学習内容を様々な科目の中に盛り込むことも難しく、即対応とはいかない部分が大きい。そこで、学外実習の前後指導を見直し、実習や保育現場で必要と考えられる学習内容に特化した基礎的な学習を、効率よく提供できるようにしたいと考えた。

今年度は、全国保育士養成協議会が編集し、2018 年に出版した「保育実習指導のミニマムスタンダード」を基盤に、学生が理解しやすい内容で編集された教科書を選択し、令和４年度の「保育実習指導Ⅰ」「保育実習指導Ⅱ」の授業内容を見直した。それに伴い、本学科独自に作成している「教育・保育実習の手引き」も共に大きく改訂した。これにより、まずは学外実習事前指導の効率化が図られ、学外実習に向けての指導内容を深めることができると期待している。

次年度以降は実践及び学外実習の評価等を基に、見直しの評価・改善を行う。

（２）　平成 30 年度から関わっている県主催の環境活動指導者養成講座では、「保育の中の環境教育」として乳幼児からの環境教育の意味及び内容を提言してきた。今年、全国的に SDG s について取り上げられる機会が増え、自治体や企業、さらには一般市民が率先して取り組む様子をＴＶ等で見かけることも多くなった。環境保全活動は SDG s の取り組みの一つでもあるため、また、保育は、“持続可能な社会の担い手づくり”でもあることから、現場の保育者により意識して保育に取り組んでほしいという考え、「保育の中の SDG s」と掲げ講話を行った。

参加者に対する事前アンケートによると、どの園も環境教育を意識して保育活動に取り組んでいることが分かった。意識が高いからこそ、講演に参加していると考えられる。ただ、SDG s への意識はまだ低く、「意識している」とはっきり言える参加者は 55 名中３名であった。そこで、環境教育は SDG s につながっていることを伝え、改めて日々の保育実践の意味を問い直してほしいことを伝えた。

今後、社会は一層 SDG s を意識した取り組みが進み、教育・保育活動も必然的にそうなると予想する。保育においてどのような取り組みが SDG s につながるのか、保育現場への聞き取り調査や見学、講演等で得た情報を分析し、保育の質向上に役立てていきたいと考える。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　准教授　【氏名】中村浩美

【研究の題目】

1. ソプラノ音域からメゾ・ソプラノへの移行のもととした発声法と、それに伴う歌曲やオペラアリアを含むクラシック楽曲の音楽表現、演奏法、と演技法。また、ミュージカルにおけるミックスヴォイス等の発声法と歌唱法、演技法について。
2. 保育者養成校の音楽教育における授業内容、指導法、教材研究について。

【研究の概要】

1. 昨年同様コロナ過によって上京してのレッスンが受講できなかった。上京してのレッスンはクラシックのみならず、ミックスヴォイスや地声も含めたミュージカルにも精通する発声法や、当然ながら楽曲によって使い分ける演奏法と音楽表現を、個人の個性に見合う演奏法、活かす演奏法をレッスンして下さる事はとても大切なチャンスである。オペラのコルペティトゥーラであり、ミュージカルでの音楽コーチでもあり、クラシック歌曲の指導等多方面に渡って指導され、あらゆる演奏家のピアニストでもあり、音楽大学在学中より間隔を空けてではあるが指導を受けていた。そのため若い時代の声、発声、音楽表現を把握して下さっており、年齢や環境の変化でクラシックのみならずミュージカルの発声法や表現方法の良い点・課題点を的確に指導して下さり、長崎でのコンサートでも生活かす事ができている。コロナ過前には日本歌曲の指導も徐々にと言う形で指導を受け始めたところであった。この現況での研究活動は、ＣＤ・ＤＶＤを利用しながら、そして今まで上京しての指導を思い起こしながら独自で発声法や、楽曲に於ける言葉・歌唱技法・音楽表現を研究してきた。その結果、今現在一番の課題点と考える息の流れ・響による高音域の発声が難しく納得できない点が多々あり、特に高音域に於いては出せる音に限界を感じられる事もあり、選曲も大きな課題になってきたと考える。しかしながら、息の流れや今年度ある種の重きをおいている体幹をいかに使いながら力を抜けるかを、身をもって感じる事ができたのは独自での研究であった事と考える。そして言葉(歌詞)がどれだけの音楽表現を占めているか、その重要性と説得性に感銘を受けるＣＤとＤＶＤからも多く学べた。授業ではどうしても声帯に負担がかかってしまうが、それでも高音域が息の流れから導かれた響きある声・発声ができるために、地声での話し方や太く重い声にならない日頃の注意にも気を遣う室要請もある。高音域が以前のように出やすくなる事で、研究したい楽曲に固執せず取り組む事ができ、研究テーマにも偏りなく広げられと考えている。

2. 今年度からⅢ班制からⅡ班制に変わり授業形態が大きく変わった。1 年生は隔週でピアノレッスンと声楽・コード奏法、2 年生も隔週でピアノレッスンと声楽・手遊び歌の授業形態で、2 年生は 1 年次でⅢ班制を経験しているため、隔週ではなく毎週同じ授業形態が良いとの感想が多かった。理由としては隔週であると怠けてしまうため、毎週ピアノレッスンも声楽・手遊びもして欲しいとの事だった。1 年生はⅡ班制のみの体験のためどちらが良いかの検討が付けにくいようであった。しかしながらピアノは初心がかなり多くなり、声楽も歌うための基本を学ぶに当たって時間がかかるため、隔週の授業では指導内容を今まで以上に考慮しながら研究する必要性が十分にあった。声楽はコロナ過でマスクもしくはマウスシールドでの授業のため、心おきなく声を出す事が出来ず、口角から表情筋にかけてアップする大切さや、口の開け方、歌詞読みの習得がなされなかったと考える。ただ、声を出さずとも、マスクを外して歌唱に必要な表情筋の使い方や口の開け方を繰り返して行った。学生達は歌う事が大好きではあるが、実習や現場では子ども達のお手本として一人で歌うため、人前で歌う事への抵抗が大きく、コロナ過ではなかったら、授業内で一人から三人のみで歌う事や、歌詞読みにもイメージを持たせながらの表現ある実技が行われたと考えている。マスクの影響もあり学生の顔と名前がなかなか一致せず、その学生の個性も掴みにくかった。早く性格を知ることはその学生のピアノ技術の進度や音楽的な感受性をどのようにして引き出せるかにおいてとても重要である。また、学生と教員間の信頼度にも影響を及ぼすと考えているため、授業を通しての学生との関わり方を今まで以上に工夫すべきである。今年度同様、メンタルが弱く努力が苦手な学生には特に練習の仕方のノウハウを丁寧に、繰り返し指導していくことを継続したい。時として厳しくても愛情を持って心から応援する気持ちで指導することで、学生もなぜ厳しく指導されたのか、なぜ上達したのかを理解してくれた。今後もさらに学生に愛情ある指導をしていきたい。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】栄養士コース　【職名】准教授　【氏名】 太田　美代

【研究の題目】　女子短大生の生活活動調査を基にした昼食内容の検討
－スマホ写真を用いた昼食調査を利用して－

【研究の概要】

現在の学生が小学校に入学した２００９年頃は、学校において「食に関する指導」の推進が進められた初期に当たり、食育基本法の制定ならびに栄養教諭制度の創設から４年が経過した頃である。そこで、小学校や中学校で「食に関する指導」を受けてきたはずの学生たちは、食の自己管理能力が身についているのかという観点から、栄養士コース１年生の昼食内容を検討した。目標栄養量は生活時間調査を基に基礎代謝量を算出し、日本人の食事摂取基準２０２０年版とも照らしあわせて比較検討を行った。

今回、学生の生活活動時間調査をもとに生活活動レベルを求めた結果、全員が「低い」に該当した。座位が中心の生活で、家事に携わる時間も短く、運動をする学生もほとんどいなかったことから、生活活動レベルが全般に低く、消費エネルギーの平均も日本人の食事摂取基準（2020 年版）の参照体位における 18～19 歳女性身体活動レベルⅠ（低い）の推定エネルギー必要量 1,700kcal/日とほぼ等しい数値であった。

昼食調査では、スマホで撮影した写真データを収集する方法で摂取栄養量の見積もりを行った。本調査では、４２件のデータのうち、９件が主食のみ又は主食と飲み物や汁物のみの昼食だった。義務教育から食に関する指導を受け、食と健康について専門的に学ぶ栄養士コースの学生であっても、菓子パンだけ、おにぎりだけの食事をしているという事実は、学んだ知識や技術が自分自身の暮らしと結びつかず、実生活に生かされていない現状にあるものと考えられる。今後は、短大で学ぶ内容が自分の生活と深く関わっていることを自覚させながら指導を行う必要がある。また、自らも食の専門家である栄養士として社会に出ていく立場であることを改めて考えさせ、不足しがちな栄養素を含む食品を加えて昼食を整えることを今回の調査結果をもとに工夫させるなどの実践体験型の指導を試みたい。

弁当持参の学生の食事内容は、主食・主菜・副菜が揃ったものが多く、比較的栄養バランスの良い傾向にあった。学食の食事では、定食を選ぶと主食・主菜・副菜が揃っているが、ラーメンとおにぎりなど主食を重複させて選ぶと好ましくない食事内容となる。食品の選び方に注意が必要である。

また、摂取エネルギーが低い食事は他の栄養素も不足しがちであることから、生活活動レベルを上げてエネルギー必要量を増やすことも重要であると考える。

今後は、いかにして学習する内容を自らのこととしてとらえ、実生活に生かす考え方を身につけさせるかを課題の一つとして取り組み、食の自己管理能力の向上を図りたい。ひいてはそれが、学生が社会に出た時に生かされる技術につながるものであると考える。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】　特別専任准教授　　【氏名】島田幸一郎

【研究の題目】

特別な教育・保育的ニーズのある子どもに対する「合理的配慮」について
～5 年間の学生の実習後アンケートの分析をとおして～

【研究の概要】

1.　目的

インクルーシブ教育・保育の進展と共に、「合理的配慮」に繋がる支援ニーズへの対応は喫緊の課題である。本学学生の過去 5 年間にわたる教育実習・保育実習後のアンケート分析をとおして、特別な教育的・保育的ニーズのある子どもに対して、どのような配慮がなされているのかを、3 歳児以上の子どもを対象に幼稚園・保育所での取り組みを比較検討して、「人的な配慮」「特性に応じた配慮」「物理的な配慮」「連携による対応」に区分して考察する。

２．方法と内容

⑴ 方法

過去 5 年間の本学幼児教育学科 2 年生の教育・保育実習後に、特別な教育的・保育的ニーズのある子どもの在籍状況、また支援ニーズに即した必要な配慮の実施有無と配慮があった場合その内容について、学生が担当した 3 歳児以上のクラスを対象にしたアンケート調査を分析する。

⑵ 内容

障害のある子どもは、「発達障害」「身体障害」「知的障害」「病弱「その他」に大別し、気になる子どもについては、「落ち着きがない、多動等」「対人関係が築けない等」「言葉の遅れ、指示が通らない等」「身辺自立が遅れている等」「忘れ物が多い等」「その他」に大きく区分する。配慮事項の内容については、「人的な配慮」「特性に対応した配慮」「「物理的な配慮」「連携による対応」の 4 点に大別する。

３．結果

昨年度に引き続き、幼稚園、保育所別に過去 5 年間のアンケート集約と分析に取り組んだが、データ整理と分析に手間取り論文としてまとめることができなかった。しかし、幼稚園、保育所ともに特別な教育的・保育的ニーズのある子どもの受け入れが進んでいること、また物理的な配慮（スロープ等）の整備には経済的な面で課題が多いが、人的な配慮（支援員の配置等）や特性に応じた配慮（スケジュール表の利用等）については各園で独自の工夫をしていることが理解できた。更に、連携による対応については、幼稚園に比べ遅れがちであった保育所においても次第に増えていることが分かった。

４．まとめ

近年、特別な教育的・保育的ニーズのある子どもに対しては、徐々にではあるが理解が進んできている。しかし、教育・保育現場で子どもにかかわる際十分な「合理的配慮」がなされているかは疑問である。本年度、県保育協会主催の研修会において研究成果をもとにインクルーシブ教育・保育の必要性について講演することができた。今後も、子どもの教育・保育的支援ニーズへの配慮について注目していきたい。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　栄養士コース　【職名】　講師　【氏名】　古賀　克彦

【研究の題目】

長崎版日蘭辞書における食物に関連する用語の調査

【研究の概要】

長崎版日蘭辞書【原題　Vocabvlario da Lingoa de Iapam com a declaração em Portugues(ポルトガル語の説明を付したる日本語辞書)】は 1603 年に日本イエズス会長崎コレジオ(神学校)によって刊行され、1604 年にその補遺の部が出版された。イエズス会は日本でカトリック教を布教するにあたり、布教用語などもその土地の用語を用いることを原則としており、日本を訪れたイエズス会士は日本語の文展や辞書の整備を行いこの辞書が刊行された。この日蘭辞書に収録されている語数は本編が 25,967 語、補遺が 6,831 語であり、重複しているものを除いて総数は 32,293 語になる。この辞書には食物に関連する用語も多く収録されており、収録語を調査することは 15～16 世紀の長崎の食文化を知ることにもつながる。そこで今回、長崎版日蘭辞書の邦訳である「邦訳　日葡辞書（土井忠生・森田武・長南実編訳）」を用い食物に関する語句の調査を行った。

2. 方法

今回の調査では長崎版日蘭辞書の邦訳である「邦訳　日葡辞書」に掲載されている語句から食物に関する語句を抽出・分類した。抽出する語句は食品、料理に関する語句とし、調理器具に関する語句は今回除外した。また食材等で当時、食されていたか不明なものに関しては日本食品標準成分表 3）に掲載されているものや、各種書籍で食用が推測されるものは抽出することとした。

抽出した語句は日本食品標準成分表の 18 群（穀類、いも及びでん粉類、砂糖及び甘味類、豆類、種実類、野菜類、果実類、きのこ類、藻類、魚介類、肉類、卵類、乳類、油脂類、菓子類、嗜好飲料類、調味料及び香辛料類、調理済み流通食品）とそれらに分類できない「その他」に分類し考察を行った。

3. 結果・考察

今回の調査では「邦訳　日葡辞書」を用い 1603 年に発刊された長崎版日蘭辞書に掲載されている食物に関する語句の調査を行った。掲載されている食品数は現在の日本食品成分表と比較するまでもないが、各食品群の食品数の割合は現在と違い、当時の食文化を感じさせるものであった。掲載されている語句より 16 世紀後半に宣教師達が見た日本の食文化が浮かび上がってきた。魚介類のように多くの食材が使用されていたり、穀類や豆類のように様々な加工食品が当時から作られていたりしており、当時から豊かな食文化を存在していた。今後は調理法や調理器具等の調査も行い、当時の食文化の詳細を明らかにしていきたい。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】　講師　　【氏名】　荒木正平

【研究の題目】

対人ケア場面におけるコミュニケーションに関する研究

【研究の概要】

（1）本年度は、一昨年から開始した「障害のある子ども、気になる子ども、特別の支援を必要とする子どもの、教育・保育場面における“育ちあい”の支援に向けて」の継続研究という形で、文献研究を継続しながら、民間の児童福祉サービス提供施設における参与観察と、職員等への聞き取り調査とを開始したことを記しておきたい。

この研究・調査は、一昨年度までの研究成果も踏まえて、教育・保育現場においてその対応の重要性がますます高まっている「(発達障害を含む) 障害のある子ども、気になる子ども、特別な配慮を必要とする子ども」とのかかわりと支援の方法を、実践現場の観察記録や支援関係者の語りを通して、より具体的に検討していくことを目的に実施している。本研究を通して、支援を要する子どもとその保護者・支援者を取り巻く環境の整備・改善に向けた方策の検討を進めたいと考えている。

なお、一昨年度までの研究においては、子ども支援における課題として、障害当事者の支援のみならず、家族支援・家庭支援の意識がより重要性を増すことが考えられるということを指摘した。学生アンケートの結果からの検討と、その保護者の意識との比較を行った研究のプロセスを検討した昨年度の研究成果からは、当事者（支援を要する子ども）とその家族に対する支援体制の整備は当然のこととして、さらにそれ以外の周囲も含めた支援者の「認知」と「理解」を深めていくことの重要性について確認することができた。

さらに、昨年度別に執筆した論文では、特別な支援を要する子どもとの関わりにおけるキーワードとして、「遊び」が重要となることを指摘し、幼児教育・保育現場のスタッフの思いについて実施した個別のインタビュー調査等の結果も踏まえる形で考察を進めた。

これらこれまでの研究において浮上した課題への取り組みの手法として、今年度の参与観察及び聞き取り調査の実施は計画されたものである・しかし残念ながら、新型コロナまん延防止対応のため、予定していた参与観察及び聞き取り調査が中断となってしまった。調査中断前までに得られたデータの活用も検討したが、分析に用いるデータとしては十分とは言えず、本年度の論文化及びその発表を断念せざるを得なかった。調査協力施設との連絡は継続しており、コロナまん延状況が落ち着き次第速やかに研究調査を再開し、参与観察と併せて聞き取り調査についても継続して実施し、データの収集を行っていきたい。

（2）広義のケアをめぐる関連研究として、認知症高齢者ケアをテーマとした論文を執筆し、雑誌論文として報告することができた。タイトルとしては、「認知症の人が抱えるコミュニケーションの問題点」として執筆した。すでに（1）で触れた通り、筆者の現在の主テーマとしては、児童・障がい分野を設定しているが、認知症高齢者ケアの場面に関する研究の成果においても、対人ケアといった観点からは重なる部分も多い。詳細については割愛するが、この論文において筆者は、「コミュニケーションの問題点」という問題設定の危うさの検討から論を開始しており、そのような問題意識は、児童分野、障害分野、（認知症）高齢者分野といった分野の壁を超える共通性を見出すことが可能であると思われる。今後、上述した「遊び」という極めて多義的であり、文字通り遊びの多いキーワードを活用しながら、これまでに集積した各分野の成果・課題を集約しつつ、広義のケア実践に関する考察を引き続き進めていきたいと考えている。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　講師　【氏名】　福井謙一郎

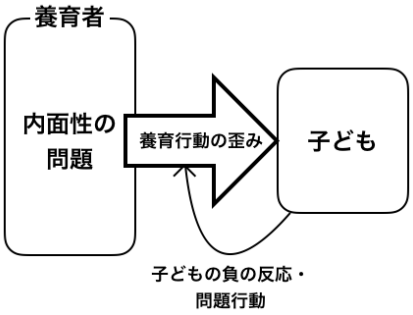
【研究の題目】

養育行動とその世代間伝達に関する研究の動向と展望

【研究の概要】

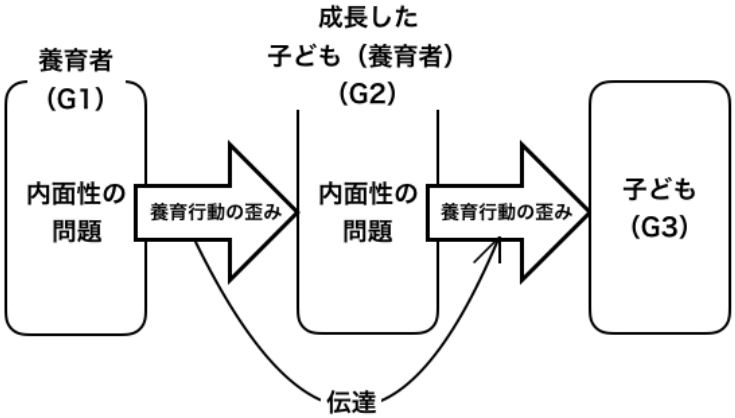
（1）養育行動とは

養育行動とは、養育者と子どもの相互作用から起こる養育者の行動や態度のことである（小山、2008）さらに類似した概念として養育態度が挙げられるが、この定義は養育者が子どもを育てるにあたって、意図的あるいは無意図的にとる一般的な態度・行動とされており（原田、2008）、その内容は様々な研究の中でほぼ同義として扱われることがほとんどである（伊藤ら、2014）。本研究では、養育を行動的側面から捉えるため、親の子どもに対する態度・行動を「養育行動」として扱うこととする。



（2）養育行動が子どもの内面性に及ぼす様々な影響

さらに養育行動については、養育者から子へ伝達すると言われている。これを厳密には「愛着の世代間伝達」という（数井ら、2000）。これは個人の愛着スタイル及び対人関係のテンプレートとなる内的ワーキングモデル(Internal Working Model；IWM)の世代を超えた伝達を意味する。IWM は、祖父母となる第一世代（G1）から第二世代（養育者；G2）、そして第三世代（子；G3）まで引き継がれていく（遠藤、1993；数井ら、2000；田邊ら、2009；大村ら、2001）。例えば Crowell & Feldman（1988）は、母親と子どもの相互作用について、愛着を軽視したタイプのかかわりをもつ母親の子どもは母親に対し抑制的で冷めた態度をとること、とらわれ型（自己観がネガティブで他者観がポジティブな愛着スタイル）の母親に対しては、怒りを表面化しやすい行動を示すなど、母親の愛着スタイルが子どもの愛着スタイル（行動）に対し様々な影響を及ぼすことを指摘している。このように、世代間伝達を説明する際、愛着スタイルそのものが第一世代（G1）から第二世代（G2）、そして第三世代（G3）へと受け継がれていくことを示す場合が多い。一方、客観的に観察される親の養育行動そのものが伝達するという見方も存在する。木本・岡本（2007）によると、被虐待相当経験を持つ母親の方が、被虐待相当経験を 持っていない母親よりも虐待相当行為を生じさせている確率が 2.5 倍以上であり、虐待のような負の養育行動が次世代の養育行動に伝達される可能性が高いとしている。また横張（2010）は、青年期の女子学生に対し、母親からの養育行動に対する学生自身の予期養育行動（学生自身が自分の子どもに対してとる予期的な養育行動）の関連を調査し、親のネガティブな養育行動が学生（娘）のネガティブな養育行動は影響を与えており、その伝達を媒介している要素が学生自身の親に対する認知であることを示唆している。



令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　ビジネス・医療秘書コース【職名】講師【氏名】江頭万里子
【研究の題目】秘書検定の学習意欲と教員の声掛けに関する研究
【研究の概要】

秘書検定の学習意欲を促進し、合格率を上げるための学習法として、自己調整学習を導入した指導法について昨年度より検討している。学習意欲には教員の声掛けも影響するという報告もあることから、本年度は「秘書検定の合否を左右する学習意欲の規定要因には教員の声掛けが関連している」という仮説を検証し、秘書検定の効果的な指導法検討の資料とすることとした。前年度実施した自己調整学習法は踏襲し、併せて、積極的に学生への声掛けを試みた。具体的な仮説としては、①はじめに教員が秘書検定の価値を伝え、秘書検定の勉強への動機付けを行い→②励ましの声掛けをする→③学生は各自目標設定を行い→④学習を行う（並行して教員は、声掛けを行う）→⑤結果のフィードバックを行う→⑥各自、学習方法を見直し、自己調整力を働かせ、自己効力感を得て、自信へと繋がり→⑦学習意欲が上がり→⑧新たな目標設定を行い→⑨新たな方法で学習し（並行して声掛けを行う）→⑩合格へと繋がる、という学習法の流れを考えた。声掛けは、先行研究で学習意欲に影響を及ぼすと紹介された称賛・励まし・承認の声掛けを中心に行った。結果としては、教員の声掛けが学習意欲の向上に繋がったとは言えなかったが、声掛けで学習意欲が上がったと答えた学生のコメントには、教員の声掛けが、自身の振り返りのきっかけになった、勉強法のヒントになった、前向きな言葉かけにより学習意欲が上がった、などがあり、一定の効果があったことは窺えた。

自己調整学習の構成要素の有用性（就職）と「教員の声掛けで学習意欲が上がった」には、正の相関が見られ、就職に有利だと思えば、教員の声掛けで学習意欲が上がる傾向にあると考えられることから、声掛けの効果を上げるには、初めの動機づけの声掛けの大切さが示唆された。また、教員の声掛けに対するコメントには、試験４日前の前向きな声掛けに学習意欲が上がったと答えた者が数名おり、吉川・三宮（2007）が、学習意欲を高める言葉かけは、それを行う適切なタイミングと方法が重要と述べているように、声掛けの言葉やタイミングの大切さが示唆された。

本年度の学生は、上位の級にチャレンジしたいという向上心は余り高くないが、向上心が高ければ、学習時間の目標を高く設定し、学習時間の目標が高い学生ほど、長く勉強している、そして長く勉強したことで頑張ったと感じていることが分かった。また、自身を計画性が高いと評価している学生ほど学習時間が長い傾向にあった。

自己調整学習の構成要素と検定の結果の関係を見ると、昨年同様、調整力の高い学生ほど、合格率が上がる傾向にあったが、本年度の学生も昨年同様調整力や計画性を低く自己評価していた。　調整力・計画性・向上心は高くないと自己評価している学生が多いが、自己調整学習を体験した結果、学生の多くがその勉強法に好感を持った。自己調整学習を実践することで調整力を少し養えたのではないかと思う。今後の検定の受験でもこの勉強法を続けることで、調整力が磨かれ、合格に近づくことを期待できるのではないかと考える。

検定の本学の合格率は、52.2％でよい結果とは言えなかったが、検定の二つの領域の片方は合格で、もう片方の点数不足（段階評価：あと一息で合格）で不合格となった者は、不合格者の 67％であり、あと一歩頑張れば合格のところまでは達している。今後は、それらの学生を合格に導くために、自己調整学習法は踏襲し、声掛けをするタイミング、声掛けの場所、個人への声掛けの回数を増やすことなどを検討していきたい。

本研究は本学武藤教授との共同研究であり、詳細は、本学紀要第 47 号に記載。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】　講師　　【氏名】　南條　恵

【研究の題目】
・乳児保育における「担当制」とアタッチメントについての一考察
・乳児保育における「担当制」の経緯と課題
・乳児保育における「担当制」はなにを目指すのか

【研究の概要】

1950 年代、イギリスの児童精神科医で精神分析家のジョン・ボウルビィ（1907―1990）は、自身が構築したアタッチメント理論の中で、「子どもは、基本的に一人（おもに母親）との緊密なアタッチメント関係のなかで築かれた内的モデルによって、その後の社会人格的特性等が形成される」という、「モノトロピー」ともいわれる「階層的組織化仮説」を提唱した。

この「階層的組織化仮説」について遠藤利彦は（2016）[1] は、「家庭外の集団状況における子どもへのケアは、たとえ専門的な保育者によるものであっても、家庭内の二者関係によるものに比して、乳幼児の発達にとって十分な発達促進環境には到底あり得ない」というものであり、このボウルビィの仮説は、その後、「少なくとも人生早期における子どもに対するケアは基本的に家庭内において、その親、殊に母親によって担われるべきであるという母子関係中心主義の思潮や世論を後押し」することになり、また「子どもに関する様々な政策形成の中心教義」になっていったとした。

しかし、現在ではボウルビィの仮定した「モノトロピー」は、ヒトの自然な養育形態ではなく、周囲の養育ネットワークを視野に入れたアロマザリングの役割を評価すべきとの議論があり、また 1960 年代以降の社会変動と家族関係の変容は、「母子関係」を第一義とする「モノトロピー」の考え方を「アレンジしなおす」[2] 必要性にかられている。

そのようななか、子どものアタッチメントの対象として十分に機能し得る他者の一人として、保育所における「保育者」があげられている。

そこで今回の 3 本の研究では、乳児期に養育者との間で形成された安定したアタッチメントの質は、子どもの発達においても、その後の人生においても自己肯定感や社会における適応性につながるという先行研究に基づき、保育所保育の質を構成する保育者と子どもの関係性の視点から、保育者と子どもとのアタッチメント関係を形成するのに有効な保育のあり方として「担当制」を挙げ、その目的や意義、課題を検証し、集団保育の中で、「一人ひとりの子どもを大切にした丁寧な保育」のあり方を考察することを研究の目的とした。

その方法として、「担当制」で乳児保育を経験したことのある保育者へのインタビューをおこない、質問項目を精査してインタビューした結果を分析したところ、「一人ひとりの子どもとの関わり」「クラス全体の子どもへの関わり」「保育者同士の関わり」に関しての実践的示唆を得ることができた。その結果、乳児保育のあり方について、①保育者と子どもとのアタッチメントの形成には特定の保育者との継続的な関わりの質が重要である。②子どもの情緒の安定には保育者同士の協働が必要である。③これらを実践するためには保育士配置の最低基準や保育環境の整備などの条件面の改善が必要であり、子どもを取り巻く人的、物的環境は、保育者と子どもの関係の質に影響するという考察を得ることができた。

引用文献

１）遠藤利彦（2016）乳幼児・児童期の子どもの育ちと子育ての課題．現代における親子・家族関係と乳幼児期からの保育．秋田喜代美（編）．岩波講座　教育改革への展望３　変容する子どもの関係．岩波書店 22－23
２）数井みゆき（2005）保育者と教師に対するアタッチメント．数井みゆき・遠藤利彦（編）．アタッチメント　生涯にわたる絆．ミネルヴァ書房．117

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】　助教　　【氏名】　船勢　肇
【研究の題目】　学問の自由の国際比較

【研究の概要】
学問の自由概念について、近現代日本を主に追求しながら、他国を対象とする研究者と交流した。
近現代日本について要点を挙げればおよそ次のようなものになる。

・日本では市民の権利として定着することに困難がある。これは旧憲法の規定はもちろんのこと、市民の理解の不徹底によるところも大きい。
・かつては帝国憲法の制約があり、自然権が規定されていないことが背景にあった。つまるところ、天皇大権のなかで専門性を発揮する国家をどのように構想するのか、という問題である。今日ではデモクラシーと専門性との関係が焦点になるが、戦前にもデモクラシーが主張されていたことに注視する必要がある。
・帝国憲法の規定がある中でも、美濃部達吉などは学問の自由を国家が積極的に環境を整えて保障すべきだとし、むしろ近年の日本の世論より主張が強いとさえいえる。
・沢柳事件では、すでに大学自治への弊害が指摘されていた。これは、大学自治を論難することが新しいわけでは無いことを示すと同時に、それでも大学自治が必要とされていたことを示している。
・学生運動に抑圧的な大学自治論は存在する。むしろ、スタンダードですらある。
・大学の自由論は、権力の中枢からひたすら距離を取る無責任な自由論と言うよりは、「社会」に対して責任を果たすことを念頭におかれている。現代の大学の「地域社会への貢献」と比較すれば、普遍主義的な使命感が強かったという点が指摘できる。
・先述のような戦前における大学の自由論は、大学批判と同時に存在していた。つまり、大学を取り巻く状況が問題なかったからでは無く、厳しい批判にさらされていたからこそ、戦前に大学自治が論理展開されていた。
・戦時下の観念右翼による大学自治批判は、マスメディアを活用し、閉鎖性を指摘し、中間領域を否定し、多元性を認めようとしないという特徴がある。これは、現代のポピュリズムとも共通点なしとしない。
・国際比較としては、近年の日本はアメリカの制度を模範としようとしているがそもそもアメリカの制度のついての誤解に基づいているところがある、ドイツにおいてもフンボルト理念は 1960 年代末から危機に瀕している、フランスにおいては個人の権利意識がかなり強固であるため大学自治は問題にならない、などの諸点である。

研究の成果は岩波書店より出版された。参考文献一覧を充実させ、この分野の基本文献としてまとめられた。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　栄養士コース　【職名】　助教　　【氏名】桑原　倫子

【研究の題目】若年女性の生活習慣と体格に関する研究

【研究の概要】

近年、若年女性におけるBMI（body mass index）18.5（kg/㎡）未満の低体重者の割合が高いことが問題となっている。令和元年度の国民栄養・健康調査によると、20 歳代女性のやせ者の割合は20.7%であった。その原因として、若年女性のやせ願望に伴う食事制限や偏った食生活が考えられる。また、BMI は 18.5～24.9 と標準であるにも関わらず体脂肪率が高い「隠れ肥満」の存在も注目されており、20 歳代女性において隠れ肥満者の割合は 3～5 割であることが報告されている。偏った食習慣や低体重者では、体脂肪が少ないだけではなく筋肉量や骨密度の低下、さらにはビタミンやミネラルの欠乏による栄養障害がみられることがある。運動習慣のある者の割合では、20 歳以上の男性 33.4%、女性 25.1%、20 歳代女性においては 12.9%と少なく、若年女性の運動不足も問題となっている。また、健康な女子大学生の調査において、26.5%に四肢骨格筋量指数（SMI：skeletal muscle mass index）の低下（5.7 kg/㎡未満）がみられたとの報告もある。若年時の筋肉量の低下や骨密度の低下は将来的なサルコペニアや骨粗鬆症の危険因子となり、フレイルや健康寿命にも影響するといわれている

本研究では、若年女性の体組成および筋力を測定し、運動習慣や食生活などの生活習慣との関連を調べ、低体重、筋肉量低下、筋力低下の有無とその危険因子を検討する。

若年時の筋肉量の低下や骨密度の低下は中高年以降のサルコペニアや骨粗鬆症の危険因子とされ、若年時の運動習慣、食習慣と筋肉量の関連を調べることで、将来的なサルコペニア予防につながる可能性がある。

方法

1. 対象者

本研究の趣旨に同意した長崎県立大学に在籍中の女子学生 32 人

2. 測定項目及び測定方法

筋肉量・筋力の測定

体組成計を用いて体重・BMI・SMI・筋肉量・体脂肪量・体脂肪率を測定した。筋力は握力計を左右各 2 回ずつ測定し、最大値を採用した。

栄養・成長・運動習慣に関するアンケート調査

現在の運動習慣の有無、過去の運動習慣の有無、毎日 1 時間以上の歩行の有無、月経の状態などを調査した。

食習慣調査

BDHQ（簡易型自記式食事歴法質問票）を用いた食事調査を実施した。

調査期間は令和元年 12 月 18～19 日。

解析及び結果

本年度は収集したデータを、分析・解析の途中までしか行うことができず、結果および考察にまで至らなかった。途中ではあるが、本研究対象者のうち、やせ及び肥満の者の割合は 1 名ずつであり、国民健康・栄養調査の結果と比較しても少なかった。栄養学系の学科に通う女子大学生を対象としたこともあり、一般若年女性の集団よりは健康意識が高いことが伺えた。正常 BMI の層において、筋肉量や体脂肪率の観点からみると、プレサルコペニアや隠れ肥満の状態にあるものが 3 割程度みられ、こちらは先行研究の報告とほぼ同様であった。

これら筋肉量や体脂肪率と運動習慣に関連し、食生活の傾向とその影響について、来年度は更に分析・解析を進めていく。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】栄養士コース　　【職名】助教　【氏名】桑原　真美

【研究の題目】本学学生の SDGs に関する認知度および意識調査

【研究の概要】

SDGs とは「Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)」の略称であり、2001 年に策定されたミレニアム開発目標（Millennium Development Goals：MDGs）の後継として、2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」にて記載された 2016 年から 2030 年までの国際目標である。近年わが国では、SDGs に関してメディアでも積極的に取り上げられ、民間企業や地方自治体の取り組みを目にすることも多い。また、大学および短期大学等の研究・教育機関においても SDGs の取り組み事例が報告されている。大学および短期大学の学生はこれからの社会を支えていく若者であり、その若者たちが世界が抱える課題に対して知識を習得し行動を起こすことは大変重要な意味を持つと考える。しかしながら本学では一部ゼミナール活動や全学共通科目にて SDGs について取り上げてはいるものの、積極的に取り組んでいるとは言い難い状況である。そこで本稿では本学学生を対象に、今後本学で SDGs に取り組むにあたっての基礎資料を得ることを目的としたアンケート調査を実施した。今回は筆者の所属する栄養士コース 1、2 年生を対象とし、SDGs に対する認知度、興味のある目標、栄養士として取り組むべきだと考える目標、日頃実施している SDGs の取り組みに関しての調査を行った。

SDGs の認知度の質問では、「SDGs という言葉を聞いたことがない」「SDGs という言葉は聞いたことがあるが意味は知らない」と答えた者が合わせて 6 割を占め、SDGs の認知度は低いことが示唆された。SDGs という言葉をどこで知ったかについては「テレビ」「ネットニュース」と答えた者が多く、メディアの影響が大きい。SDGs への関心度については「全く関心がない」「関心がない」「わからない」と答えた者が合わせて約 7 割であり、関心を持つ学生は 3 割程度と少ない結果となった。その理由として考えられるのは、学生が SDGs の意味を知らないことである。「SDGs への関心がない」または「わからない」と答えた者のうち、「SDGs という言葉を聞いたことがない」または「SDGs という言葉は聞いたことがあるが意味は知らない」と答えた者は約 8 割を占める。「SDGs という言葉を聞いたことがない」と答えた者のうち SDGs に関心がある者は 0 %、「SDGs という言葉は聞いたことがあるが意味は知らない」と答えた者のうち SDGs に関心があるものは 15.4 %であり、当然ではあるが SDGs の意味を知らない者は関心度も低い。一方、「SDGs という言葉の意味を知っている」と答えた者のうち、SDGs に関心のある者は 66.7 %、「17 のゴールと 169 のターゲットから構成されることを知っている」と答えた者のうち、SDGs に関心のある者は 100 %と増加している。SDGs の意味を知っている者と知らない者でその関心度が逆転した。

SDGs 達成へ向けた取り組み状況については、今現在取り組んでいると答えた学生が 16.3 %であった。一方、SDGs に関する取り組みと意識せずに普段から行っていることについては、節電や買い物時のマイバック持参と答えた学生が 7 割を超えていた。また、栄養士コース所属学生であることが要因とも考えられるが、食品ロス削減に関連した取り組みを行っている学生も 6 割を超えた。このように SDGs と意識せずとも SDGs に取り組む学生が存在していることがわかる。

自身にとって重要であると思う目標と栄養士として取り組むべきだと思う目標については選択された目標にばらつきがあった。特に栄養士として取り組むべきだと思う目標に関しては、選択されている目標が少なく、全く選択されていないものもあった。SDGs の 17 の目標はすべて繋がっており、それぞれの目標について食の面から健康を支える栄養士として取り組めることは何かしら存在するはずである。今回アンケートに回答した学生が SDGs の意味を知らない者が多かったことがこの結果に影響していることが考えられる。今後すべての目標の意味を深く理解することができれば、目標達成のためにどのような取り組みができるのか具体的に考えることができるのではないだろうか。

今後 SDGs 達成のための取り組みを行うにあたり、まずは学生の SDGs に対する関心度を高める必要がある。そのためには SDGs とは何かを学ぶ機会を設けることが効果的であることが示唆された。また、SDGs に関する取り組みは継続していかなければ意味をなさない。今現在、学生自身が SDGs の目標達成のための取り組みを知らず知らずのうちに行っているという切り口から SDGs の学びを展開していくことで、構えず気軽に取り組めることをアピールできるのではないかと考える。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】助教　【氏名】山中　慶子

【研究の題目】　5-6 歳児における「かたちへの興味」に着目した造形活動
－シンメトリーの型を用いたステンシル技法－

【研究の概要】

目的）本研究では、幼児が「かたち」に着目し、楽しみながら主体的に取り組める造形活動を提案し実践することで、幼児期の造形活動について示唆を得ることを目的とした。また、活動を通して、幼少接続期である 5 歳児の図形に対する好みや認識について調査、考察を行った。

方法）認知領域、精神運動領域において形を応用化したり内面化したりする時期である年長児（5～6 歳児）を対象に、かたちに着目した造形表現活動を行った。活動名は『みつけたよ！いろんなかたち』とし、二つ折りにした用紙を切り抜いてできるシンメトリー（線対称）の型紙を作成し、絵具によるステンシル技法を楽しむ約 60 分の活動である。活動を通しての幼児の活動、型紙の種類を分析し、考察を行った。

結果・考察）

（1）　図形の半分の形をイメージし、シンメトリーの型紙を作成する、または偶然出来た形から想像を広げる活動を通して、幼児の図形への興味は深まり、探求心をもって主体的に活動に取り組む姿が確認された。

（2）　自分で作成した型紙を使用してステンシル技法を行うことで、色や形の重なり方や画面構成など、表現を工夫する姿が見られた。また、活動を通して、友達が作成した形との違いに気づいたり、共にイメージを膨らませたりし、図形に対する知識や認識が育まれることが、幼児の行動・発語から推察された。

（3）　シンメトリーの型紙イメージでは、折りたたまれた用紙の縦横比が関係すると考えられた。正方形に近い形では、丸みを帯びた図形をイメージする。縦横比が極端に異なる用紙からは、曲線的な図形を連想することが困難なことが推察された。

（4）　5 歳児では、シンメトリーの形を頭の中でイメージし、更に半分の形を想像する力には個人差があると推察された。特に三角形については、半分に折りたたんだイメージが困難であると考えられた。

【研究の題目】　保育者の造形表現に関する意識調査　－指導困難に着目して－

【研究の概要】

目的）本研究では、保育者が幼児の造形活動において困難だと感じる内容、またはその要因について調査することで、保育者の造形活動に関する指導困難事項を明らかにすることを目的とした。また、保育者自身の造形に対する苦手意識が、幼児の活動に及ぼす影響について考察を行った。

方法）質問紙調査法

調査内容は、①自身の造形に関する意識②幼児の造形活動に関する意識③幼児の造形活動計画・内容について④造形指導で困難だと感じること⑤学生の時に身につけておきたかったと思うスキルについてである。研究の意図を園長先生に説明し、同意を得られた園に無記名の質問紙用紙を配布した。約 2 週間後に回収にうかがい、回答のあった 62 名を調査対象とした。

結果・考察）

（1）保育者の造形に関する意識と、幼児の造形活動計画に関する意識調査の結果から、保育者自身の造形に対する「嫌い」「好きではない」感情は、幼児の造形活動を計画することを困難にしていることが推察された。

（2）保育者が幼児の造形活動の指導において困難を感じる要因として、①発達差や個人差による要因②活動内容や指導法による要因③自身の保育技術による要因④保育環境による要因の 4 要因が、アンケート記述より考えられた。特に、「発達差」「個人差」が指導の難しさを感じる要因になっており、活動内容としては「絵具の指導」が困難であると感じる保育者が一定数存在することが示された。また、準備片付けなどを含む時間の余裕や人員の不足が活動を困難にする要因であることが考えられた。

（3）保育者にとって、「計画が容易な造形活動」と「計画が困難な造形活動」があることが示された。使用する道具や素材の準備の容易さは、造形活動の内容を決定する要因の一つであると考えられた。造形活動の計画を困難にさせる理由として、以下の 4 つが考えられた。Ⓐ自身の体験不足や知識不足Ⓑ保育時間や園環境の問題Ⓒ素材や用具の扱い方が難しいⒹ保育者自身の好み

（4）保育者は、自身の造形技術の向上及び、造形に関する様々な知識を身につけるとともに、保育技術や指導力について専門性を高めたいと考えていることが、アンケート記述より示された。

令和３年度（2021 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　助教　【氏名】　髙橋　秀樹

【研究の題目】

Effectiveness of dance/movement therapy intervention for children with intellectual disability at early childhood special education preschool

【研究の概要】

知的障害児（ID）は、粗大運動技能や静的・動的バランス能力に困難さがあり、下肢筋力が低下し、重篤な転倒のリスクが報告されている。また適応行動の面に関する困難さの報告がされている。ID を伴う児は知的障害や活動意欲の低下により、身体活動プログラムを継続することが困難と報告されている。しかし、ダンス/ムーブメントセラピー（DMT）は、ID を伴う児への静的・動的バランス能力や膝伸展筋の向上、また不適応行動面への支援に期待ができる。

本研究は幼児の療育プログラムの一環として、ID を持つ子どもに対する DMT グループセッションの有効性を検討することを目的とし実施した。評価方法は、膝伸展筋を評価する目的としハンドヘルドダイナモメーター、静的バランスを評価する目的とし片足立ちテスト、動的バランスを評価する目的としタイムドアップ・アンド・ゴー・テスト、子どもの適応機能と行動問題について、両親または親戚と教師からそれぞれ報告された Child behavior checklist(CBCL)と Caregiver-teacher report form(C-TRF)の実施をした。被験者は 36 ヶ月から 72 ヶ月の ID を伴う 21 名の幼児とした。

統計解析は SPSS Statistics 27 を用いた。データ分析は Wilcoxon 片側符号付順位検定を実施した。0.05 未満の P 値は統計的に有意であるとみなした。

その結果、両膝伸展筋、静止バランス、C-TRF にて統計的に有意な差がみられた。

本研究では 36 ヶ月から 72 ヶ月の ID 伴う幼児を対象とした療育プログラムの一環として DMT グループセッションを行うことで、膝伸筋の改善と同時に不適応行動の減少することが分かった。

【研究の題目】

徳島県における大正期の産婆養成 徳島市醫師會附屬産婆看護婦養成所産婆科の内務省指定認可の背景

【研究の概要】

徳島市醫師會附屬産婆看護婦養成所の創立から産婆規則に基づく養成所産婆科の指定認可までの経緯を明らかにすることを目的とし実施した。

研究方法とし徳島県文書館及び徳島県立図書館所蔵の文書，徳島市醫師會附屬産婆看護婦養成所廿年史，徳島醫學會雑誌，徳島県史，当時の新聞（1912 ～ 1926年）を手掛かりに史料を発掘し史料相互の関係から解析した。

結果：①徳島市医師会は，明治末期から大正初期の看護婦不足の緩和と産婆の普及のため，1920年私立産婆看護婦養成所を設立。翌年，内務省令（第9 号）看護婦規則により看護婦養成所の指定をうけ，徳島市醫師會附屬産婆看護婦養成所と改称したことが分かった。

②養成所運営を徳島市医師会事業とし，徳島市医師会長が所長を併任，医師会員が無報酬で講師を努めた。徳島県の協力を引き出し数年にわたり年間三百円の補助金を受け，養成所の充実に工夫を凝らして1927年産婆規則第1 条により徳島市醫師會附屬産婆看護婦養成所産婆科の指定を受けたことが分かった。

③医師会としての組織力を生かして人材・財政の確保，情報収集に努め，養成所の充実を図っていたことが分かった。

KAKUMEI
GAKUEN

SINCE 1896